文部科学省特別経費
「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」（平成 22 年度—平成 27 年度）

平成 22 年度「学生海外派遣」プログラム報告集

海　外　イ　ン　タ　ー　ン　シ　ッ　プ

海外アカデミック・ディスカッション

学　生　海　外　調　査　研　究

国立大学法人　お茶の水女子大学
リーダーシップ養成教育研究センター

平成 23 年 3 月 31 日

平成 22 年度「学生海外派遣」プログラム報告集　目次

区分		報告書	英文要旨
タイトル・派遣者氏名		頁	頁
海外インターンシップ（1 名）			
「リキャストによる誤りの訂正と学習者の認識：ストーリーナレーションタスクにおける助詞と動詞部分の誤りを対象として」高橋（菅生）　早千江	…	1	92
海外アカデミック・ディスカッション（9 名）			
「英国母国語教育：文学教育における文化変化について」青木　敬子	…	4	93
「教育研究用貴重書挿絵データベース開発のための議論、情報収集、国際学会発表訓練」馬場　幸栄	…	7	94
“Presentation and Research on Investigating Chinese Students' Opinions on Plagiarism” 姚　馨	…	（英文）11	（和文）95
「「誘い」表現における中日対照研究」黄　明淑	…	15	96
「翻訳劇の研究方法および評論」李　洪伊	…	18	97
“Dancescreen2010/Cinedans2010” 松岡　綾葉	…	21	98
「臨床に根ざした音楽療法のリサーチ方法について」山本（生野）　里花	…	24	99
「JFL 環境における上級日本語会話指導」小松　奈々	…	27	100
「バイリンガリズムと教育：21 世紀のバイリンガル教育と多言語教育に向けて」高友晗	…	30	101
海外調査研究（11 名）			
「中世後期ロンドンの刃物職人にみる「人と人とのかかわりあい」」佐々井　真知	…	34	102
「バレエ振付・演出家小牧正英の背景に関する研究～ハルビン居留時代～」糟谷　里美	…	39	103
「近代朝鮮の女性教育に関する資料調査—女子高等普通学校の記録を中心に」金　夏娟	…	45	104
「18 世紀のフランス・モードにおけるアンディエンヌの特徴及び受容に関する研究のための資料調査」権　裕美	…	51	105
「18 世紀初頭 スコットランド・ジェントリの史料調査」河内山　朝子	…	56	106
「近代日本における陶磁器輸出と米国市場」今給黎　佳菜	…	60	107
「14 世紀初期イングランド宮廷及びエドワード二世に関する史料調査」常木　清夏	…	66	108
「ローラン・プティ《若者と死》ー第二次大戦後のフランスの舞踊界での「事件」」深澤　南土実	…	71	109
「接触場面における中国人日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジーの使用ー意味伝達の問題を解決するための達成ストラテジーを中心にー」方　穎琳	…	76	110
「ローレンツ・フォン・シュタインが明治立憲国家構想に与えた影響について」松居　宏枝	…	82	111
「Henry James, "The Princess Casamassima" 自筆原稿の調査：The Princess Casamassima 自筆原稿に見られる社会的要因と心理的要因の混在」松浦　恵美	…	87	112

海外インターンシップ	
リキャストによる誤りの訂正と学習者の認識 ストーリーナレーションタスクにおける助詞と動詞部分の誤りを対象として	
菅生　早千江	国際日本学専攻
期間	2010 年 11 月 7 日～2010 年 11 月 22 日
場所	アメリカ　ニューヨーク州
施設	ヴァッサー大学

内容報告

1. インターンシップの目的

第二言語習得研究の中で、誤りをどのように訂正するかは主要な論点の一つである。リキャストは、発話の誤りに対して自然に言い直して正用を提示するフィードバック手法である。リキャストについては、教室で教師が多用する手法であるが学習者は訂正されたことに気づいていない （Lyster&Ranta, 1997）という報告を契機に、効果と気づきを検証する研究が数多くなされている。しかし、英語やフランス語を対象とした研究が中心で、日本語を対象とした研究は限られている。

報告者は日本語教師としての経験から訂正フィードバックをテーマに修士論文をまとめた。菅生（2008）では、誤用が助詞か動詞かによってリキャストを受けた学習者の反応が異なるため、助詞に対するリキャストは学習者に気づかれていない可能性があることを報告した。報告者は博士論文では、誤りを訂正された時の学習者の認識を明らかにし、欧米語とは類型論的に異なる日本語を対象とした場合、リキャストの働きかけ方も、欧米語を対象とした研究の知見とは異なることを指摘したいと考えている。さらに、どのように訂正することが効果的なのかを検証することを計画している。

そこで本インターンシップでは、学習者のリキャストの気づきが助詞と動詞部分で異なるかについて、菅生（2008）とは条件を変えて探ることを研究課題とした。そのため 2 回の教壇実習でタスクを実施しながら、誤りにはリキャストで対応して反応を観察した。さらに受け入れ校の承諾を得て、授業時間外に学習者の協力者を募り、一対一でタスクを実施し刺激回想インタビューを行った[1]。

2. インターンシップの概要

2.1. 実習授業

2.1.1 対象者と実習授業数

3 年生 8 名のクラスで実習を行った。レベルは中級前半である。50 分授業を週 3 回実施しているうちの 2 コマで、通常の授業とは独立に実習授業を行った。

2.1.2 学習目的と活動、および手順

授業における学習目的は初級文型の運用練習とし、格助詞と動詞部分を操作して物語を口頭で叙述するストーリーナレーションを行った。タスクシートは、10 数枚の絵に英語訳・空欄を設けた日本語の叙述文、日本語の語彙を配置したものを用いた。

実習 1 では、SPOT テスト[2]、および助詞と動詞部分の口頭産出を目的としたストーリーナレーションタスク「白雪姫」を行った。実習 2 では、動詞の適切な形と補助動詞の口頭産出を目的とした「シンデレラ」のストーリーナレーションタスクおよび復習クイズを行った。発話の誤りにはリキャストで対応した。2 回とも授業後にアンケートを実施した。

2. 2 一対一セッション

2.2.1 参加者

ボランティアを募集し､7 名の協力者（4 年生 5 名、3 年生 1 名、2 年生 1 名）を得て実施した。

2.2 .2 目的と活動、および手順

セッションの目的と活動、誤りに対するリキャストは、2.1 で記述した実習授業と同じである。協力者と一対一で約 1 時間のセッションを持った。SPOT テストを実施し、ストーリーナレーションタスク「舌切すずめ」[3]は､まず英語であらすじを聞かせてから、助詞と動詞を含む部分の口頭産出を目的として実施した。次に、録画ビデオを見せながら刺激回想インタビュー、最後に文法の復習を行った。

2.2.3 刺激回想法インタビュー

刺激回想法は、タスクを遂行している間の思考プロセスをデータとして引き出す内観法の一つである（Gass&Mackey,2000）。Mackey, Gass& McDonough （2000）の実施方法に従い、報告者と一対一で行っているタスクをビデオ録画し、タスク終了後にビデオを再生しながら、協力者にリキャストを受けた場面（一人約 10 数か所）で何を考えていたかを英語で語ることを求めた。

3. 研究課題に対する結果と考察

授業とセッションの録画資料は本報告時点で分析途中であるため、得られた傾向のみ記す。

3.1 実習授業におけるリキャストされた文法項目とリキャストの認識

実習 1 では、助詞へのリキャストは反応から判断する限り、気づかれていないものも多く見受けられた。一方、実習 2 における、動詞の活用と補助動詞の誤りに対するリキャストは、学習者にも認識されていたように見受けられた。

3.2 一対一セッションにおけるリキャストされた文法項目とリキャストの認識

刺激回想インタビューでは、助詞と動詞部分とでリキャストの認識に関するコメントが異なった。補助動詞については、「どういう場面で使うのかがわかった」というコメントが多かった。一方、助詞の誤りに対してリキャストしたものは、訂正には気づいても文法が理解できたというコメントは少なかった。また、助詞と動詞など二つの誤りを一つのリキャストで訂正している場合、コメントでは動詞など内容語の方を訂正されたことだけに触れ、助詞へのリキャストについて言及しない例が散見した。

3.3 考察

動詞部分、特に補助動詞へのリキャストは、意味と機能を文脈の中でマッピングする機会を提供するもので、効果的に働きかけるようである。助詞の誤用に対するリキャストは場面やその他の要因により気づかれにくい傾向がある。このように助詞と動詞とで認識が異なるのは、項目の卓立性の違いによる可能性がある。加えて、助詞については、リキャストで訂正しても文法ルールの再構築には至らないことも考えられる。助詞と動詞の二つの誤りをひとつのリキャストで訂正した時に、助詞の訂正が認識されにくいのは、内容を担う語の意味処理に認知資源が割かれることに起因するという解釈も可能である。

4.　インターンシップの成果と意義

対象者数の少ない小規模のデータであることは考慮しなければならないが、先行研究に照らして、次のような興味深い傾向が得られた。動詞部分の誤用に対して行うリキャストは、気づきやすさ、使用ルールの発見の両方の点で効果的に働きかける様子がうかがえた。一方助詞へのリキャストは、気づきを得にくく、ルールの再構築に結びつかない可能性がある。助詞と動詞を一度に訂正すると、動詞部分の方が意識化されやすい傾向が見られた。このような傾向についてデータ分析・考察を行い、日本語教育学会、言語科学会、第二言語習得研究会で発表するほか、それぞれのジャーナルにも投稿する予定である。新奇性のある結果でもあるので、TESOL Quarterly など、英語のジャーナルにも投稿したい。

今回の結果を、3 つの独立した研究論文として投稿し、またそれぞれを独立した章として博士論文の構成に取り入れたい。今後は、助詞と動詞に対するフィードバックの効果を実験的に検証し、総合的に考察することで博士論文全体をまとめたい。

本インターンシップの意義を述べる。訂正フィードバックの研究は、教育現場の協力なしには進めることができないが、一般的に教育機関でこうした協力を得ることは容易ではない。本海外インターンシップは、研究フィールドを確保する段階での困難点を解決する、必要性の高いプログラムであった。また、私見であるが、アメリカの大学では学内の手続きを踏むことで、調査者を教育現場に受け入れる体制が整っているようにも思われた。今後もアメリカで調査研究を行う機会があるかもしれないが、どのように進めたらいいのか、一端を知ることができた。

最後に、一教師としての振り返りを述べる。学習者から、誤りにフィードバックしてもらうのはとても勉強になる、という意見が多く聞かれたことは嬉しいことであった。また、アドバイザーから「タスク実施の前に、学習者をリラックスさせるための（ice breaking の）時間を設けてもよかったのではないか」とのご意見をいただいたことも有難く思っている。

謝辞：受け入れていただいたヴァッサー大学中国語日本語学科のドラージ土屋浩美学科長、松原優子先生他学科の教員の皆様に、謹んで感謝の意を表し、ここにお礼申し上げます。

注

1. 実習に先立ち、9 月に Research Proposal を大学の Institutional Review Board に提出し審査を受けた。
2. SPOT は筑波大学留学生センターが開発した、外国人日本語学習者のレベルチェックを目的としたテストである。
3. ウェブサイト「デジタル絵本」のイラストおよび英語音声を、管理者の許可を得て使用した。(http://www.e-hon.jp/)

参考文献

菅生早千江　（2008）「受益表現の誤用と訂正フィードバックに対する中上級日本語学習者の反応 －リキャストと自己訂正を促す介入の比較－」『日本語教育』139, 52-61.

Gass, S. M., & Mackey, A.（2000）*Stimulated Recall Methodology in Second Language Research*. London: Lawrence Erlbaum Associates.

Lyster, R. ,& Ranta, L. （1997）Corrective feedback and learner uptake: Negotiation of form in communicative classrooms. *Studies in Second Language Acquisition*, 19, 37-66.

Mackey, A., Gass, S.,& McDonough, K. （2000） How do learners perceive interactional feedback? *Studies in Second Language Acquisition*, 22, 471-497.

菅生　早千江（すごうさちえ）／お茶の水女子大学大学院　人間文化研究科　国際日本学専攻

指導教員によるコメント

本インターンシップ参加者菅生早千江より、実質 2 週間の実習に関する報告を受けました。

データは分析中ですが、サンプル数の少ない小規模データであっても、いくつか報告価値のある興味深い傾向が見られていると思います。

１．報告「教室環境で実施したリキャストの学習者の気づきが、助詞と動詞で異なる。動詞の誤りに対するリキャストは気づきを得ており、助詞の誤用に対するリキャストは気づかれていないものもある」。

○　先行研究では、文法項目の中での気づきの違いに言及したものはなく、これは新規な報告であります。

２．報告「～てくれる、～てしまう、～ていくのような補助動詞が使えないところにリキャストすることで、どういう場面で使うかがよくわかった、という学習者のインタビューコメントを得ている」。

○　文法説明を重ねるより、文脈の中で指導することが効果的な文法形式は、リキャストによる指導に向いているという説を実証する報告です。

３．報告「助詞に対するリキャストには、学習者が、「わかった」というコメントをしていない。なぜこの場面で「に」ではなくて「で」なのかがわかった、というような、文法ルールの再構築はできていない」。

○　既に学習者が何らかの中間言語のルールを構築している場合、メタ言語的な説明の方が効果があるかもしれません。これは、いくつかの仮説に照らして考察することのできる、興味深い報告です。

４．報告「助詞と動詞の 2 つの誤りを一度に訂正しているときの回想コメントは、動詞を訂正されたことのみに言及し、助詞へのリキャストにはコメントしない例が多い」。

○　多くの誤りを一度に訂正しない方がいい、という先行研究の知見はありますが、文法項目上の違いにより、意識化されるものが異なるということも、新規な報告です。

これらについてすみやかに分析を進め、論文として投稿することでこの分野に知見を報告し、博士論文を上梓するべく研究を進めるよう指導します。

なお、ヴァッサー大学の責任者の土屋先生からは、「大変まじめに取り組んでいた」として、A の評価をいただいてきたことも確認しております。

以上

2010 年 12 月 20 日

森山　新（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　教授）

海外アカデミック・ディスカッション		
英国母国語教育：文学教育における文化変化について		
青木　敬子		比較社会文化学専攻
期間	2010 年 10 月 6 日～2010 年 10 月 20 日	
場所	英国	
施設	ロンドン大学教育大学院	

内容報告

1. 2009 年からの継続内容

2009 年、英国ロンドン大学教育大学院において教育史専門である、ディヴィッド・クルック博士とのディスカッションでは、今までのキャノンといわれるシェイクスピアやチョーサーをはじめ、主たる英国の伝統的作家が中心であった英文学の教育が、日常を題材に描くような作家へと変化していることを認識した。この点からカリキュラム上の必修文学作品の変化を、教育史学研究の中では、ハイカルチャーからローカルチャーへの変化ととらえていた。例えば中等教育の必修リストに含まれている詩人のシェイマス・ヒーニーはアイルランドの出身で、日常の身近な題材を用いて描いている。教育研究の中でハイカルチャーと考えられていた、エリート教育に用いられるような、歴史の深さも上流階級を題材にしている作家でもない。この点から教育学研究の中では文化的変化と捉えられ、ハイカルチャーからローカルチャーへの移行という認識であった。（註１）しかし今回2010年10月のロンドン大学教育大学院における、ディスカッションでは、教育史専門のクルック博士と、英文学教育専門のハードキャッスル博士とで、教育学、英文学の両方向からディスカッションを行い、その結果、英文学、英語における文化について、ハイカルチャーとローカルチャーという分類ではないという認識へと変わった。

2. 2010 年ディスカッション

20 世紀以前の文学教育は、エリートと大衆とに分かれていたものの、大衆の中でも読み書きができて、文学が好きな人々は、読書会や家庭、または余暇に古典的作品を読んでいた。大衆の多くは公教育を受けていなかったが、文学的知識は読書の中で培われていた。20 世紀以降も読書という点からは、階級に関係なく、伝統作品は親しまれ読まれてきている。どの作品をどの階級が読むということではない。階級によって読まれる作品が異なるのではないことから、作品における階級ということでは、ハイカルチャーに対してのローカルチャーという分類は存在しないと考えられる。ローカルチャーはむしろ大衆文化から生まれた新しい独自の文化である。(2010 年 10 月 14 日ジョン・ハードキャッスル博士のコメントより)

3. まとめ

教育学研究の中では、19 世紀、20 世紀教育体制全体を階級、エリートクラス教育、大衆教育と分けているため、大衆文学と大衆教育との近似によって文学作品教育に対する階級が認識されたと考察される。しかしながら、実際、国民の読書状況と公にされている教育体制とが異なるために、容易に分類、定義できるものではなく、非常に複雑なニュアンスを含むということが今回の意見交

換によって明らかになった。分野の異なる研究者とのディスカッションにより教育史、英語教育研究の間での、新たな知見が生まれたことを、ぜひ論文に反映させたい。

ハードキャッスル博士も継続して、このテーマについて今後の論文指導をしていただけることになった。女性リーダーを今後も育成していくためにアカデミックレベルでの英国研究者との新たな関係を継続して、さらなる人材をおくる役割を担いたいと考える。

また母国語文学教育研究に関して、ハードキャッスル博士の同僚である、ジョン・ヤンデル博士の近年の研究を紹介していただいた（註２）。ヤンデル博士は現在の社会状況の中で、生徒の文化的背景によって文学作品の捉え方に違いがあることを中心に研究している。筆者の博士論文でも今までの学校調査による内容を反映させるために、非常に参考になった。また今回はリーズ北部のプリンスヘンリーグラマースクールへも訪問し、英語クラスや、図書館における読書への取り組みなどを見学し、英語科教員や、副校長と現場におけるディスカッションもあわせて行った。今後の博士論文では、現代英国における文学教育の状況や、文学教育背景を近代までの経緯や、階級、文化的視点でとらえなおし、分析したいと考えている。なお今回の報告は2011年4月発行予定の言語文化教育学会の学会誌へ投稿する予定である。

註

註１：青木敬子. 『大学院教育支援プログラム： 日本学研究の国際的情報伝達スキルの育成・アカデミック・ディスカッション報告書』お茶の水女子大学発行　2009年

註２：Yandell, John.' Class readers: exploring a different view from the bridge', Changing English. Routledge, London. 2006. Vol13, p319-334.

あおき　けいこ／お茶の水女子大学大学院　人間文化研究科　比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

青木敬子さんの今回の海外調査は、彼女が執筆を予定している博士論文（英国における母語教育と文学教育の関係の考察）のために、20 世紀以降にカテゴリー化されてきたハイカルチャーとローカルチャーがいかに母語教育に作用するかを検証するものであった。今回大変意義深いことは、そのような文化の階層秩序そのものが、教育の不平等と結びついた人為的な虚構であり、むしろローカルチャーを、大衆の表象が生み出した新しい独自の文化と捉え直して、公教育との関係を考察する必要があるという視点が浮上したことである。

公教育における母語教育と文学教育の関係は、一つ英国に留まらず、日本を含め、近代の国民国家においては避けて通れない主題であり、今回、植民地主義のみならず階級分化の位相で上記の考察が必要なことを確認できたのは、大きな収穫だった。併せて、当地での研究者や教育者との研究交流も深化してきたので、博士論文執筆における資料の厚みに貢献すると思われる。今回の知見が着実に博士論文として結実することを願っている。

竹村　和子（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　教授）

海外アカデミック・ディスカッション	
教育研究用貴重書挿絵データベース開発のための 議論、情報収集、国際学会発表訓練	
馬場　幸栄	比較社会文化学専攻
期間	2010 年 7 月 5 日～2010 年 7 月 16 日
場所	イングランド
施設	ロンドン大学キングス校

内容報告

1. 挿絵研究とデータベース

豊かな歴史的情報を内包する貴重書挿絵の研究と教育は、多くの学問分野において文字情報の研究・教育と同じくらい重要な位置を占めている。そのため、パソコン、インターネット、デジタル複写技術が爆発的に普及し貴重書の画像データベース制作が可能となった 90 年代以降、挿絵研究の成果を保存・更新・整理・解析・公開するためツールとして多数の貴重書挿絵データベースが開発されてきた（注 1）。

だが、日本ではまだまだ貴重書挿絵データベース開発について議論を交わし、情報を収集し、国際的な発表を行う場が十分に整っていない。主な議論・情報収集・発表の場は「人文科学とコンピュータ研究」とアート・ドキュメンテーション学会に限定されがちであるし、人文社会系研究のためのデジタル技術とその応用を専門に扱うデジタル・ヒューマニティーズの国際学会はいまだ日本で開催されていない（注 2）。

こうした状況を打開して貴重書挿絵データベース開発の議論・情報交換・国際発表を活性化するにはどうすべきか。国際的なデジタル・ヒューマニティーズ研究拠点のひとつであるロンドン大学キングス校の Centre for Computing in the Humanities（略称 CCH）と同分野における世界最大の学会のひとつである Digital Humanities 学会 2010 年度大会（略称 DH2010）を訪問し、そのヒントを探った（注 3）。

2. 常設のデジタル・ヒューマニティーズ教育研究機関—ロンドン大学キングス校 CCH

CCH は世界で最初にデジタル・ヒューマニティーズの PhD 課程を設けた常設の研究所であり、デジタル・ヒューマニティーズ、デジタル文化・技術、デジタル・アセット・マネージメントの三分野について MA 課程も設置している。約 40 名の教授やリサーチ・フェローらが CCH での教育と研究を担っており、貴重書挿絵データベースとしての応用が期待されているアノテーション・ソフト『Pliny: A Note Manager』の開発者ジョン・ブラッドリー氏もここに所属している（注 4）。CCH には英国だけでなくヨーロッパ各地から大学院生や研究者たちが集まって 30 件前後のプロジェクトが同時進行で遂行されており、ヨーロッパにおけるデジタル・ヒューマニティーズの拠点となっている。

「ここには、いろいろな地域出身の研究者や学生が集まり、それぞれ多種多様なプロジェクトに携わっています。わからないことがあったら誰にでも気軽に相談できますし、情報交換も盛んです。」ドイツ出身のシニア・リサーチ・フェロー、ゲアハルト・ブレイ氏は CCH の魅力をそう説明した（写真 1）。たしかに、楽譜のデジタル校閲からアラビア語写本目録データベースまで CCH が扱うプロジェクトは多種多様だ。大勢のメンバーがシェアする広い研究室はとても見通しが良くて、かなりオープンな雰囲気だ。フランス国立公文書学校から出向中のカミーユ・デザンクロ客員研究員も作業の手を止めて、彼女が行っているアングロ＝サクソン時代公文書データベースのプロジェクトを快く解説してくれた（写真 2）。

学会や研究会並みの情報交換と議論をいつでも気軽にできる空間。CCH を訪問して、そんな印象を受けた。貴重書挿絵データベース開発をいっそう活性化するために日本に必要なのはこのようにいつでも情報交換と議論ができる常設の教育研究機関ではないだろうか（注 5）。

3. デジタル・ヒューマニティーズの国際学会—DH2010

デジタル・ヒューマニティーズ学会（略称 DH）は、人文社会系研究におけるデジタル技術の活用についての発表・議論を行う世界最大の国際学会のひとつである。日本の貴重書挿絵データベース開発者たちが DH のような国際学会で発表する際、あるいはこうした国際学会を日本で開催する際、どのような点

に気をつけるべきか。DH2010 の会場を回り、日本の貴重書挿絵データベース研究者が注意すべき点を観察した。

第一の注意点は、発表スタイルの違いである。DH は基本的に情報学系の発表スタイルを取っており、口頭発表者はパワーポイントと流暢な英語を駆使して短時間にできるだけ多くの情報を盛り込んだ発表・議論を行わなければならない（注 6）。日本の歴史系・文学系学会と異なり、ポスター発表が重要な位置を占めているのも大きな特徴のひとつだ（写真 3）。

第二の注意点は、マルチメディアの活用と環境整備である。パワーポイントのほか、発表者たちの多くはデモ用ノートパソコン、PDF 化したハンドアウト、ハンドアウトをダウンロードする URL の 3 点も用意していた。短時間で詳細な情報を提供するためのあらゆる工夫が発表者には求められるからだ。また、参加者たちは Twitter やブログを使って学会で得た知見を直ちに世界に向けて発信することにも熱心だ。したがって学会会場は当然ながら無線 LAN が無料利用できるようになっていた（写真 4）。日本で貴重書挿絵データベースの国際学会を開催する際にもこうした通信環境への配慮が必要となろう。

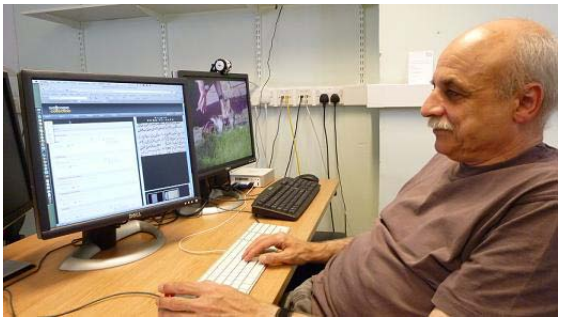
4. まとめ

議論・情報収集・国際学会発表の場を整備して日本における貴重書挿絵データベース開発を活性化するためには、CCH のような常設のデジタル・ヒューマニティーズ教育・研究機関を大学などに設置して研究者間の議論と情報交換を推進することが肝要である。また、開発者はデジタル・ヒューマニティーズの国際学会における独特の発表スタイルに慣れる必要があり、さらに日本でそうした国際学会を開催する際にはマルチメディアの活用を実現するための通信環境整備に配慮すべきである。

注

1. HUMIプロジェクト（2000）『Caesare Ripa, *Iconologia*』http://www.humi.keio.ac.jp/matsuda/ripa/ripa_index.html（最終閲覧 2010 年 7 月 30 日）、早稲田大学演劇博物館（2001）『演劇博物館浮世絵閲覧システム』http://www.enpaku.waseda.ac.jp/db/enpakunishik/（最終閲覧 2010 年 7 月 30 日）、立命館大学（2002）『ARC浮世絵検索閲覧システム』http://www.dh-jac.net/db/arcnishikie/default.htm（最終閲覧 2010 年 7 月 30 日）、日本大学（2005）『Ovid's Metamorphoses』http://ovidmeta.jp/search/p/index.php（最終閲覧 2010 年 7 月 30 日）、『西鶴浮世草子全挿絵画像CD』（中嶋隆・篠原進（編）2006『西鶴と浮世草子研究』1, 笠間書院, 付録）、神奈川大学 21 世紀COEプログラム（2008）『東海道名所図会絵引きデータベース』http://www.himoji.jp/database/db07/tokaido/（最終閲覧 2010 年 7 月 30 日）、実業史研究情報センター（2009）『実業史錦絵絵引』http://ebiki.jp/（最終閲覧 2010 年 7 月 30 日）、国際日本文化研究センター（2010）『怪異・妖怪画像データベース』http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiGazouMenu/（最終閲覧 2010 年 7 月 30 日）などはそのごく一部の例である。
2. 人文科学とコンピュータ研究会（通称じんもんこん）は情報処理学会の SIG のひとつ。「デジタル・ヒューマニティーズ」はかつてよく「ヒューマニティーズ・コンピューティング」Humanities Computing とも呼ばれた。
3. Centre for Computing in the Humanities, King's College London, http://www.kcl.ac.uk/schools/humanities/depts/cch/（最終閲覧 2010 年 7 月 30 日）。Digital Humanities は http://dh2010.cch.kcl.ac.uk/（最終閲覧 2010 年 7 月 30 日）Alliance of Digital Humanities Organizations（ADHO）が主催する国際学会。
4. Pliny: A Note Manager（2006）http://pliny.cch.kcl.ac.uk/index.html（最終閲覧 2010 年 7 月 30 日）は無料で利用できるアノテーション・ソフト。現在もバージョンアップが継続されている。
5. 日本にも立命館大学グローバル COE プログラム「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」があるが、これは期限付きのプログラムである。http://www.arc.ritsumei.ac.jp/lib/GCOE/guideline_j.html（最終閲覧 2010 年 7 月 30 日）。
6. フランス語やイタリア語などでの発表も認められているが、原則として発表は英語で行われる。

ばば　ゆきえ／お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻

写真 1	
写真 2	
写真 3	
写真 4	

指導教員によるコメント

馬場さんは、西洋中世手稿本研究を中心としながらも、もうひとつの柱として中世手稿本研究に資するための史料アーカイヴ・史料データベース研究にも力を注いでいます。最近の研究では、西洋中世写本に書かれている文字だけでなく、写本に挿入・配置されている細密画挿絵にも重要な史料的価値が見いだされつつあります。写本研究において、異本どうしの比較・系統研究が必要不可欠であるように、写本細密画を比較考察するためには、いわゆる画像情報をデジタルコンテンツ化したデータベースの構築が必要不可欠です。しかしながらこの分野はとりわけ我が国が後れをとっている分野のひとつであり、2009 年度グッドデザイン賞を受賞し馬場さん自身も関わった「実業史錦絵絵引」のような史料の持つ画像情報を文字化・デジタルコンテンツ化し検索するシステムの開発が待たれているところです。今回、馬場さんは学生海外派遣プログラムの支援を得て、海外アカデミック・ディスカッションを行ってきました。「実業史錦絵絵引」作成の実績、また慶大を中心とする HUMI プロジェクトでの実績があったおかげもあって、国際的なデジタル・ヒューマニティーズ研究拠点であるロンドン大学キングズ・カレッジで、馬場さんは情報交換と議論を活発に行い、短期間とはいえ十分な成果をあげることができたようです。この分野の研究で成果を上げるために、現場での実績をつむことと人的コネクションを築き活発な情報交換を行うことが重要な意味を持っていますが、本研究支援により貴重書挿絵データベースの国際的拠点とのつながりを持つことができたことは、今後の馬場さんの研究進展に大いに資することになると考えます。

新井　由紀夫（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　教授）

海外アカデミック・ディスカッション		
Presentation and Research on Investigating Chinese Students' Opinions on Plagiarism		
姚　馨		比較社会文化学専攻
期間	2010 年 11 月 23 日～2010 年 12 月 21 日	
場所	パリ	
施設	Télécom ParisTech 大学、Paris Diderot - Paris 7 大学、Paris-Sorbonne 大学	

1. Presentation at the 29th Annual International TESOL France Colloquium

Financially supported by the Overseas Academic Discussion program, I was able to take part in and make a poster presentation at the 29th Annual International TESOL France Colloquium held in Paris from November 26th to 28th, 2010.

My academic interest is teaching English writing. And the main topic of my doctoral project is about Chinese students' plagiarizing practices in intercultural contexts. Nowadays in the field of teaching English writing, it is common sense that the concept of authorship and the rules of quotation/citation are West-originated. One opinion that is supported by many researchers and educators is that Chinese students are more inclined to plagiarize during the English writing process because they culturally and historically have weaker consciousness about it. Some previous studies have discussed the "cultural difference" theory in the field of teaching English writing. Some claim that cultural differences do exist in understanding and explaining frequent plagiarizing practices of students from certain countries, while others believe that it is only an "urban legend" (Buranen, 1999).

I am interested in how Chinese college students themselves look at this problem. I made a survey in order to investigate whether there are so-called "cultural differences" that are big enough to contribute to the frequent occurrences of Chinese students' plagiarizing practices in English writing classes. A questionnaire consisting of ten multiple-choice and free answer questions was used to research Chinese students' experiences of, attitudes toward, and knowledge of plagiarism. More than 400 responses were collected. This presentation reported the findings of the survey and addressed the issue mainly from a cultural and historical perspective. Since one of the most important purposes of taking part in the conference was to share my study with other educators, I also made some suggestions for English teachers who have Chinese students in their classes based on my findings.

The findings of this presentation and my suggestions are: (1) culturally and historically we cannot assert that Chinese students have no or little consciousness of plagiarism or copyright. (2) Imitation is emphasized and valued in the process of teaching and learning writing in China. (3) However, many Chinese students don't know to what extent imitation can become plagiarism. And they don't have knowledge of quotation and citation rules in academic writing. (5) For teachers who have Chinese students in their classes, it would be effective to firstly teach them the differences between imitation of article structures or usage of words and incorrect text borrowing. To stress the importance of creativity, explaining the quotation and citation rules clearly would also help those who plagiarized unintentionally in order to get rid of the risk of plagiarizing and at the same time improve their writing ability.

By presenting this study at the conference, I received valuable feedback and was able to hear other researchers' opinions and advice, which will be very important for my further studies, on the same issue, including my doctoral dissertation. By

listening to lectures of well-known scholars, presentations of researchers from all over the world and discussions with other participants, I was able to deepen my understanding and knowledge in the field of Teaching English to Speakers of Other Languages. This precious experience will no doubt help me continue with my doctoral research.

2. Class observation at the University of Paris Diderot

I was also given the chance to observe classes at the University of Paris Diderot during this period of oversea research. Since my academic interest is teaching English writing to students who are from non-native English speaking countries, it was a valuable chance to see how English writing is taught in a Western country. This experience will not only allow me to learn more pedagogical methods of teaching English writing, but also help me deepen my knowledge in this field from a comparative point of view.

I observed an Intensive English class, which aimed at helping students learn language in real use, and a Creative Writing class, several times. Both were fulfilling and meaningful for me but the latter one was especially inspiring in that to some extent it was relevant to my dissertation in progress. In the Creative Writing class, the professor focused on helping students improve their writing abilities by free writing (for example, short stories, poems, magazine writing) in English. During my observation period, the professor was teaching students how to write poetry. No textbook was used in this class. The flow of the class activities is as below:

(1). The history of poetry writing was introduced briefly.
(2). Students were asked to find words with the same rhymes as certain given words. This helped students to understand and feel rhymes.
(3). Introduction of meter (stress patterns) and iambic.
(4). Dictation of a humorous poem.
(5). Checking the dictation results.
(6). By reading the poem repeatedly, the professor tried to help students understand how rhymes and iambs worked.
(7). Students were asked to find stressed and un-stressed words of each line of the poem.
(8). Students were instructed to write a short poem by using iambic.

As the professor emphasized, students need not pay much attention to iambics or rhythms since they were taught just a few minutes previously. The most important thing was to enjoy the process of free and creative writing. Students were given 20 minutes to write the poem and hand in their work at the end of the class. At the second class, more knowledge and techniques of poetry writing was taught. Class activities included:

(1). The poems students wrote last time were returned.
(2). The professor summarized several typical grammatical errors. Students were given some time to read the professor' correction of their own poems and ask questions individually.
(3). Review of the contents taught in the previous class, with emphasis on iambs since it was a completely new concept to students.
(4). More techniques of writing a poem (e.g., setting, rhyme, metaphor, verse, and synesthesia) were taught.
(5). A printout of three short news reports was distributed. The professor asked the students to read it and answered some questions on the news contents.
(6). Making sure that students had understood the contents, the professor asked them to become aware of five words coming to their minds when reading each report.
(7). After the professor's example, students were instructed to compose a short poem by using one of the word sets.

According to the Professor, the purpose was to "have fun" by imaging and writing freely. The techniques and quality of the poems were not stressed at all. As a result, students were able to enjoy writing in another language, without worrying about making mistakes. Other styles of free writing, like magazine writing and short stories, had or would be taught with the same purpose.

This class was inspiring for me because it not only showed me a method of teaching English writing to first year undergraduate students with which I was unfamiliar, but also gave me some hints in preventing plagiarism in English writing classrooms. Nowadays in many universities,

students are usually asked to hand in their homework in print form. While in this class, the professor asked students to hand-write their assignments. And what is more, most of the assignments were finished within the class time. Due to the time limit (usually15~20 minutes), students surely could not finish every writing task in a very complete, long enough and neat style. They could not refer to any other materials, either. However, they were able to use their imagination to the upmost and write with more freedom. There was no danger of plagiarism since they were given no chance to touch a computer, get online, search for information, and then plagiarize more or less, purposely or not purposely. In an era when many students rely too heavily on Internet information, it might be a good way to prevent plagiarism while at the same time cultivate students' interest in writing.

With some knowledge of the processes of teaching and learning English writing and what English writing classes are like in China and Japan, it was a precious experience to observe classes in a Western university.

3. Survey investigation

As mentioned in section 1, I am doing my doctoral research on Chinese students' attitude toward, knowledge of and experiences of plagiarizing in English writing classes. Although I have collected a number of responses and made a presentation on the primary results of the investigation, I need more responses in order to make my dissertation more convincing statistically. This Overseas Academic Discussion program gave me the chance to continue the survey with Chinese college students who were studying abroad. I was able to obtain about 80 responses, which would be very meaningful for my further study in that the results could be used as data of a control group. The survey conducted in Paris made it possible for me to compare the results of students from mainland China and students who are studying abroad in order to find whether there are any differences between them.

In summary, I was able to not only learn a lot from this oversea study, but also express myself and introduce my study to many international researchers. This experience will no doubt shed light on my future research from a global perspective.

Reference:

Buranen, L. (1999). 'But I Wasn't Cheating': Plagiarism and Cross-cultural Mythology. In L. Buranen & A.M. Roy (eds.), *Perspectives on Plagiarism and Intellectual Property in a Postmodern World*. State University of New York Press.63-74

やう　しん／お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

Yao Xin's report on her trip to the 29th Annual International TESOL France Colloquium is divided into three sections: her poster presentation at the colloquium, her classroom observation at the University of Paris Diderot, and her survey of Chinese university students studying abroad as part of her data collection towards her doctoral dissertation. It is clear from this report that Yao Xin benefited greatly from this experience. Her poster presentation gave her the chance to present her research to date at a professional conference and receive valuable feedback, which will assist her in continuing her doctoral study of plagiarism practices and attitudes among Chinese university students. Her classroom observation helped broaden her perspective on current teaching practices in ESL writing, and she was able to gain insights and ideas on dealing with plagiarism prevention from a practical and pedagogical point of view. Finally, the trip gave her an opportunity to continue her questionnaire research on plagiarism by allowing her to access Chinese university students studying abroad as participants. In sum, this trip was a positive contribution to Yao Xin's professional and academic development, and I look forward to further supervising her through the completion of her dissertation.

Edward Schaefer（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　教授）

海外アカデミック・ディスカッション		
「誘い」表現における中日対照研究		
黄　明淑		比較社会文化学専攻
期間	2010 年 9 月 16 日～2010 年 9 月 27 日	
研究交流プログラム	2010 年度中国日語教育研究国際フォーラム・ 第六回中日韓教育国際フォーラム	
場所	中国・大連	
施設	大連外国語大学	

内容報告

1. 研究の構想と進捗状況

本報告者は博士課程において、「誘い表現」における中日対照研究をテーマとして研究を進めている。博士論文では、中国語母語話者と日本語母語話者の比較対照研究と中国人日本語学習者と日本人母語話者の接触場面研究を通して「誘い」表現における中日間の全体の構造分析を目指している。

今回の発表では、今までの先行研究を踏まえ、二つの研究課題を設けた。

（1）中国語母語話者と日本語母語話者の誘い部で使用された意味公式の使用頻度には、どのような差が見られるか。

（2）中国語ぼ語話者と日本語母語話者の誘い部で使用された意味公式の種類別の使用に、どのような特徴が見られるか。

今までの研究をより深めるためには、客観的な視点から意見を聞く必要性があると考えた。そこで、今回の海外アカデミック・ディスカッションという研究プラグラムを通して、2010 年 9 月 24 日から 27 日にかけて中国で行われた「2010 年度中国日語教学研究会年会・第六回中日韓文化教育研究国際フォーラム」に参加し、研究成果を発表した。日本語教育専門分野の海外及び現地の研究者と教師及び発表者から様々な視点からのコメントと貴重なご意見をいただき、自分の研究を見直す良い機会となった。以下では、報告者が参加したフォーラムで得られた成果について報告する。

2. 中日韓教育国際フォーラムの概要

このたび、平成 22 年度大学院教育支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」―「海外アカデミック・ディスカッション」の支援をいただき、大連市に滞在できたことに、心より感謝を申し上げる。

中国日語教育学研究会（英語名：China Japanese Education Association）は、国家教育行政部門と中国外語教学研究会の指導の基で、学術活動を積極的に行い、日本語教授経験をまとめ、交流し、教授法及び日本語、文学、文化など様々な面から学術研究を行う学術団体で、現在中国日本語業界で最も影響力を持つ日本語教育学会である。

本研究会は二年に一回、中国国内あるいは国際的な学術研究会を行っており、今回は大連外国語大学と中日韓文化教育国際フォーラムの共催で開かれたものである。テーマは「学習者中心の日本語教育に向けて」である。

今回のもう一つの主催側である大連外国語大学の日本語科は中国国内でも有数の日本語教育が盛んに行われる大学であり、学習者数は国内高等機関の中上位を占めており、世界最大の日本語教育の養成機関となっている。

今回の国際フォーラムには、中国日語教学研究会会長、副会長を含め、全国や海外の一流の専門家や教授、学者、教授、国内外の研究者が共に参加し、最近の日本語教育の研究の動きや現状、研究方法、異なる視点及び分析方法について議論を行った。

3. 中日韓教育国際フォーラム参加の成果

今回の学会参加及び発表を通して、日本語教育の中の教材開発や教授法の検討など、中国国内の日本語教育の方向及び現状を把握すると同時に、日本語教育における学習者の分析、及び学習者のコミュニケーション能力育成などの問題について、その理論と実践方法を検討し、日本語教育に関わる学習者・支援者・教師・研究者の間で活発な意見交換を行うことができた。

今回のフォーラムは、中国と日本、韓国三カ国が参加する国際色鮮やかな国際フォーラムであり、今度の日本語教育研究の世界的拠点となり、ひいてはア

ジア諸国との研究の新たな可能性が開かれ、日本語教育や中国と日本の文化研究やアジア研究において、新たなディシプリンの確立が期待される。

また、本報告者の発表においては、本報告者が研究を進めていく課程で疑問に思っていた部分や本報告者とは相違なる見方であった部分について、質疑応答やディスカッションを通じて意見交換を行い、貴重なご意見をいただいた。それだけではなく、発表を通して自分の研究を見直すいい機会となり、研究進捗状況の確認ができ、修士論文の結果を踏まえた次の研究計画がなされることが期待される。

今後の研究課題

今回の海外アカデミック・ディスカッションで得られた成果は、現在まで収集した資料や今回の国際フォーラムでいただいたご意見を参考に研究を見直し、お茶の水女子大学の 2011 年『人間文化創成科学論叢』や日本語言語文化研究学術誌に投稿する予定である。

コウ　メイシュク／お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

黄明淑さんの研究は、中国人と日本人の勧誘談話の対照言語学的研究であり、将来は研究の成果を中国における教育に活かすことを目的といたしております。従いまして、今回、中国における大きな学会に参加し、研究者の方々と交流することを通して、問題意識が明確になるとともに研究に関する様々な具体的な示唆を得ることができましたことは、博士論文作成に向けて大きな収穫となりました。このような得難い機会を与えていただきましたことに指導教員として心より感謝申し上げます。

以下に具体的な成果とともにコメントを記します。

黄明淑さんは、平成 22 年度大学院教育支援プログラムの助成を受け、中国大連において 2010 年 9 月 24 日から 27 日にかけて中国で開催された「2010 年度中国日語教学研究会年会・第六回中日韓文化教育研究国際フォーラム」に参加し、「誘い表現における中日対照研究―誘う側の言語行為に着目して―」というテーマで研究発表を行った。

その結果、研究課題の設定の仕方、データの分析方法などに関して具体的な示唆を得ることができた。今後はその成果を活かして、修士論文で行った分析の精緻化を図り投稿論文に仕上げる予定である。さらに、博士論文執筆に向けては、新たなデータも収集する計画であり、今回の助成による研究の深化が期待される。

佐々木　泰子（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　教授）

海外アカデミック・ディスカッション	
翻訳劇の研究方法および評論	
李　洪伊（イ・ホンイ）	比較社会文化学専攻
期間	2010 年 11 月 22 日～2010 年 12 月 2 日
場所	フランス
施設	パリ 7 大学・リヨン 3 大学、オデオン座、パリ市立劇場など

内容報告

1. 研究テーマと研究の目的

私はメロドラマ [1] というジャンルとその受容に関する研究をしながら、特に小説の舞台化、戯曲の翻訳に注目してきた。本プログラムの目的は、研究の全体像に照らしつつ、日韓の現代演劇 [2] の曖昧なアイデンティティを言語化する方法を探索である 。

2. 本プログラムからの成果

2.1 国際的な視点で観る演劇

2.1.1 「学術の場」としての劇場

どこを見ても劇場があるパリでは、演劇が映画と同じく大衆にとても近い存在だった。劇場は単純に演劇を上演する場所というだけではなく、市民や観光客が自由に利用する空間でもあった。ほとんどの劇場が国立だという環境の違いも衝撃的だった。

その中、一番興味を持ったのは「学術の場」として使われている劇場だった。多くの劇場がこのようなプログラムを提供していたが、特にオデオン座(Théâtre de l'odéon)ではジャン・ジュネ(Jean Genet)とジャン・ルイ・バロー(Jean-Louis Barrault)の誕生記念百周年セミナーが開催され、二人の演劇人をテーマにした、様々な内容のレクチャーや討論会が行われていた。10 月から始まったこのイベントは 12 月まで続く予定で、その中には無料で参加できる討論会「ジャン・ジュネの政治、欺瞞の道徳」、「ジャン・ジュネ―文学翻訳の検閲」が、11 月 24 日、25 日の一日中に行われた。25 日の討論会はインターナショナル翻訳協会によって開催された行事で、翻訳をめぐる「劇場的な表現」、「過去の作品を現代化する作業」が述べられたことが印象的だった。

しかし劇場に足を運ぶ人はみんな白人だったと言っても過言ではない。西欧演劇の「大衆演劇」、「民衆演劇」という言葉を借用する際、その用語自体についての再検討の必要性を強く感じた。

2.1.2 『春琴』と『魔笛』の観劇

私がフランスで観劇した作品は、サイモン・マクバーニー演出の『春琴(Shun-kin)』とピーター・ブルック演出の『魔笛(Une Flûte Enchantée)』だった。二つの作品は「パリの秋祭り(Festival d'automne à Paris)」の参加作として、前者はパリ市立劇場(Théâtre de la ville)で、後者はピーター・ブルックが芸術監督を務めているブッフ・デュ・ノル(Bouffes du Nord)劇場で上演された。

マクバーニーの『春琴』はフランスでは初演だったので [3]、観客の反応や新演出などを楽しみにしていた。笈田ヨシのフランス語のナレーションから始まった『春琴』は、現代の日本の女性があるラジオ・ブースで小説を読む設定で、二人のナレーターによって語られた作品だった。マクバーニーは谷崎潤一郎のエッセイ『陰翳礼賛』と小説『春琴抄』を舞台化しながら、何よりも小説『春琴抄』のエクリチュールを再現しようとした印象を受けた。久保田万太郎・巖谷真一・川口松太郎によって戯曲化された脚本と比べてみてもその特徴が感じられる。

パンフレットには「まるで水の上に書こうとしたような [4]」作品だというマクバーニーの感想が書かれている。彼の演出の手法を見ると、新野守広氏が『シアター・アーツ』での評論で「グリーナウェイの映画『枕草子 [5]』によく似た異国趣味の舞台 [6]」と述べたことが想起される。マクバーニーは文楽や歌舞伎などの演出方法を使って「日本的な」舞台を作り上げた。それが日本人とヨーロッパ人の目に同じ舞台として映らないのは当然であろう。この作品がヨーロッパの観客を魅了したのは確かであるが、それとは異なる観点からもこの作品は述べられるべきではないかと思う。

一方、『魔笛』は家族オペラとしてよく知られている。この作品は元々庶民のために作られたオペラだったが、今回はさらにフランスの観客に近づいた気がした。オペラ俳優が、歌はそのままドイツ語で歌ったが、台詞の部分はフランス語で演じたからだ。楽器はピアノたった一台で、上演時間を 1 時間 50 分にした。ピーター・ブルックは、1 年間俳優たちがこの作品だけに集中するようにした [7] そうだが、オペラ

の厳しいルールから脱皮しようとした演出家の様々な演劇的なアイデアがとても新鮮だった。

しかし、昔の演劇の形から今の実験的な演劇の形までを、一つの舞台に再構成できるのは西欧演劇だけなのか。『魔笛』のような古典/オペラの大衆化・自国語化は、形式の側面からの分析により他の作品との比較も出来ると思われる。

2.2 「日本演劇」の研究

アリアーヌ・ムヌシュキンの『堤防の上の鼓手 [8]』やフレデリック・フィスバックの『ソウル市民 [9]』など、フランス演劇の新しい世代とアジア・日本の古典劇が出会った事例は決して少なくはない。そして「日本的な」演劇、「日本の」演劇は日本の国内と国外で異なる意味を持っているかもしれない。

私が今回、日本学ではなく韓国学の授業に参加した理由は、韓国人として日本学を学ぶときに韓国に関する知識や理解がもっと求められるときがあるからである。 ヨーロッパで韓国学者として著名なイ・ジンミョン先生に出会ったのはとても貴重な機会でもあり、大きな光栄でもあった。イ先生はフランス大百科事典の韓国史の執筆者であり、日韓関係の研究者としても知られている。先生の紹介で国会図書館に行って見たり、パリ 7 大学のアジア言語研究科について説明を聞いたりすることが出来た。授業は学部の授業だったが、韓国学科 1 年生の数が 150 名だったので驚いた。日本学も韓国学も、最近はマンガの影響で多くの学生が入学してくるが、その興味は深い研究まで続かないそうだ。この問題は翻訳の問題にも繋がるもので、マンガ・小説の翻訳に偏っている。

このような環境を知り、私は受容する側としての日本演劇を研究しながら徹底的に現代演劇を西洋のものだと思っていたことがわかった。韓国学を深い研究までには発展できないフランスの大学生と同じだと感じたのである。帰国後、私は『春琴』の評論原稿の投稿と研究発表を準備しながら、改めてメロドラマの勉強を始めた。西欧の古典的な大衆演劇と日本の伝統劇との類似性を分析し、それぞれが現代演劇に与えた影響を調べる方向に論文を書き直している。本プログラムを通じて視野が広がったので、世界の演劇研究を注目しながら、その中での日韓演劇のことを研究していきたい。

注

1. メロドラマとは、メロディー(音楽)とドラマ(演劇)の合成語で、(1)典型的な登場人物と(2)善と悪が戦う単純なプロットと、(3)華麗な舞台装置を特徴とした演劇ジャンルを示す。18 世紀フランスの劇作家ピクセレックールが創始したと知られているが、その人気はヨーロッパ全体に広がった。19 世紀、20 世紀になって形が変わり、今は「悲しいラブ・ストーリ」という意味で使われている。
2. ここでは同時代の演劇という意味ではなく、歌舞伎などの古典劇ではない、西洋演劇の形式の演劇を示す。
3. マクバーニー演出の『春琴』は、彼の劇団コンプリシテと世田谷パブリック・シアター合作作品として二〇〇八年二月~三月に初演、二〇〇九年三月に再演、そして二〇一〇年 12 月にまた再演された。
4. “Comme essayer d’écrire sur l’eau” <Shun-kin>パンフレット、4.
5. ピーター・グリナーウェイ(Peter Greenaway)の映画『Pillow Book』は日本の古典『枕草子』をモチーフにした映画である。
6. 新野守広 (2008)「ギリシア悲劇とニヒリズムについて―『アルゴス坂の白い家』、『時の物置』、『春琴』、『ブレイクーぃング』」『シアター・アーツ』34, 130.
7. “ne travailler qu’une seule oevre Durant toute une année ”<Une Flûte Enchantée>パンフレット、4.
8. フランスの太陽劇団(Théâtre du Soleil)の作品で、二〇〇一年九月、新国立劇場で上演された後、同年十月韓国ソウルの国立劇場で上演された。
9. 平田オリザ作の作品で、彼の演出による初演は一九八九年である。フィスバックの演出としては二〇〇五年一二月シアタートラムで上演された後、二〇〇六年フランスで上演され『ル・モンド』の 1 面に取り上げるくらい注目を浴びた。

参考文献

新野守広 (2008)「ギリシア悲劇とニヒリズムについて―『アルゴス坂の白い家』、『時の物置』、『春琴』、『ブレイクーぃング』」『シアター・アーツ』34, 126-131.

野田学 (2008)「舞台暴力の政治学、もしくは、「血みどろ係」に抗するには―『THE BEE』と『春琴』」『シアター・アーツ』36, 52-60.

Lyn Gardner. (2009) Theatre Shun-kin, *guardian.co.uk,* (http://www.guardian.co.uk/stage/20090/feb/06/review-shun-kin-barbican). (6/feb/2009)

Armelle Heliot. (2010) Shun-kin, un conte envoûtant au Théâtre de la Ville, *LE FIGARO.fr* (http://www.lefigaro.fr/theatre/2010/11/22/03003-20101122ARTFIG00422-shun-kin-un-conte-envoutant-au-theatre-de-la-ville.php) (22/Nov/2010)

Théâtre de la ville <Shun-kin> パンフレット

Bouffes du Nord <Une Flûte Enchantée> パンフレット

イ・ホンイ ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

李洪伊氏は、近現代演劇をめぐる日韓比較研究を大きな研究課題としている。当該海外アカデミック・ディスカッションの目的は、その研究課題にそって、とくに現代演劇をめぐる研究言説の新しい方法の模索にあった。氏が博士論文の中心に置こうとしている新劇の研究においては、日韓比較を含めて、すでに先行研究の積み重ねがあり、研究言説の様式それ自体は確立している。しかし、現代演劇研究を研究の射程に含めようとする場合、研究言説それ自体の独自の構築が必要となる。それは研究文献による再構成では不可能であり、演劇の「いま・ここ」として体験されることが何より重要である。本プログラムを通じて、フランスにおける現代演劇上演の現場、ならびに観客の反応を直接体験できたことは、李氏にとって、博士論文執筆に向けての貴重な体験となったことは明らかである。とくに、氏がこれまで博士論文のキータームの一つとしてきた「メロドラマ」についても、実際のフランスでの上演の現場、さらには多くの知見を与えてくださったパリ第７大学のイ・ジンミョン先生の導きと授業参加の体験により、その研究用語自体に対する再考を余儀なくされている。これは、今回のプログラムによってもたらされた研究の進展であり、貴重な成果の一つと言えるだろう。

演劇研究においては、レーゼドラマのアプローチ方法には限界があり、たとえそれが過去のものであっても、上演の「現場」をどのように再構成しうるかという研究者の想像力が必須である。それらは、文字文献だけから習得されうるものではない。今回のような、アカデミック・ディスカッションの体験を通して、過去に遡及しつつ、演劇研究の方法それ自体が習得され、さらに新しい方法が創造されると期待される。

菅　聡子（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　教授）

海外アカデミックディスカッション	
Dancescreen2010/Cinedans2010	
松岡　綾葉	比較社会文化学専攻
期間	2009 年 12 月 8 日～2009 年 12 月 21 日
場所	アムステルダム（オランダ）
施設	De Ballie

内容報告

1. 本アカデミックディスカッションの必要性と目的

ダンスの映像作品であるビデオダンス（video dance）は国内における先行研究が殆どなく、また研究資料にも乏しいことから、海外を視野に入れた研究が必要不可欠である。特にビデオダンスが先進している欧米は、作品製作やフェスティバル・シンポジウム・ワークショップ等の実践活動が多く展開されていることから調査の目線を向けるべき地域である。筆者は修士論文研究時に一度海外調査研究（オランダのビデオダンスフェスティバル調査）を行い、フェスティバルの概要把握及び特性考察における観点を導き出したが、特性の考察において課題が残された。博士論文研究では、ビデオダンスが既存の舞台作品とは異なる特徴を更に掘り下げていくため、本アカデミックディスカッションでは①まず先行研究の発見と映像作品の収集、②考察内容をより細分化し、ビデオダンスの特徴を明らかにする観点を導きだすためにシンポジウム等で言説を得ること　以上を主な目的としてプログラムに参加した。

2. 本海外アカデミックディスカッションへの参加で明らかとなったこと及び今後の研究における位置づけ

まず最も重要な成果はビデオダンス研究の方向性と展望に再び向き合い、再考できたことである。これまで国内で先行研究が見つけられず舞踊学・映像学からの知見を交えながら手探りの状態で研究方法を編み出してきたため、しばしば方向性で迷いが生じたが、本ディスカッションでは最前線で活動する映像作家・研究者・組織関係者などと直接言葉を交わし、交流を持ち、ビデオダンスの本格的な先行研究をようやく見つけることができた。国内では見つけることのできなかったこれらの先行研究は、本研究において、ビデオダンスの特徴についての明確な切り口や論拠をもたらすものと考える。そしてグローバルな規模での研究が求められる本領域において、世界との繋がりを持ち、情報や見解を入手可能な状態にすることができた。このことは大きな前進であり、今後の方向性や明らかにすべきことを再考するきっかけとなった。

次にシンポジウム・パネルディスカッションへの参加を行ったが、これらのプログラムは実践的な方法論について意見交換・情報共有を行い、世界中での取り組みを高めていく主旨のものであった。これによってビデオダンスフェスティバルのマネジメント（集客や助成金の獲得について）や映像作家と振付家の作品製作における関係性、映像を使用した新たなテクノロジーの開発等、開催と創作両面についての実践的な状況を概観することができた。本研究の考察の核ではないが、ビデオダンスの現状についての論考において重要な位置を占めると考える。ビデオダンスはどのように製作され、配信されているのか。その詳細な過程は、考察を行う上で前提として明らかにしておくべきところであり、ビデオダンスの第一線で活動する作家・TV局関係者・組織運営者による本プログラムのパネルは重要な一次資料となった。またパネル中におけるプレゼンテーションから、ビデオダンスのアカデミックな研究活動は欧米の中でも特にイギリスとアメリカによって牽引されており、今後の調査研究地域の限定の見通しが明らかとなった。

そしてフェスティバルで多数の作品に触れ、コンペティションの結果等を踏まえ、作品にみられる傾向からビデオダンスの特徴の視点について新たな見解を見出すことができた。それは、舞踊の専門的な訓練を受けておらずかつ日常生活においても踊る機会をそれほど持てない人々、とりわけ障害者・高齢者などにスポットを当てたことである。これらの人々が踊り表現する様子をカメラで捉え、普段見ることのできない光景を詳細にかつダイナミックに映像で描き出したことは、今後のビデオダンスの新たな方向性であり、舞踊の可能性を広げると考える。舞踊の専門的訓練を

受けたダンサーではなく、プロフェッショナルでないダンスに価値を見出し、映像技術によっていかに生き生きと劣らない迫力を感じさせるかという可能性への挑戦は新たな試みである。この新たな展望の発見は、分析の視点の幅を広げ、考察の一助となった。

以上、本プログラム参加による研究成果から、前提として明らかにすべきビデオダンスの製作と配給の現状を論じ、先行研究からのアプローチによって、ビデオダンスとはどのようなものか再考していく。そこからビデオダンスの特徴について「身体性」と「社会性」という視点を再度検証し考察を行っていきたい。今後、本海外アカデミックディスカッションへの参加による研究成果を「ビデオダンスフェスティバル一事例による海外でのビデオダンス実践の現状」としてまとめ、研究発表の場としてはまずお茶の水女子大学人間文化論叢への投稿を予定している。

まつおか　あやは/お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

松岡綾葉さんの海外アカデミックディスカッションでは、①ビデオダンスにおける先行研究の発見と映像作品の収集、②博士論文における考察内容をより細分化し、シンポジウム等においてビデオダンスの特徴を明らかにする観点を導き出すことが主な目的であった。先行研究と映像作品に関しては、最前線で活動する映像作家、研究者と交流することを通してビデオダンス研究に適切な文献等を見つけることができた。また、シンポジウムにおいては、ビデオダンスの現状を概観し把握できたことも大きな収穫であったと思われる。実際にオランダのビデオダンスフェスティバルに赴き、ビデオダンスに関わる人々との交流が持てたことで、松岡綾葉さんの意図していた海外アカデミックディスカッションにおける計画は概ね遂行できたのではないかと考える。ここで得られた貴重な情報をもとに、ビデオダンスの特性を考察する視点である「身体性」と「社会性」を再度検証し深化させることを期待している。

猪崎　弥生（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　教授）

海外アカデミック・ディスカッション	
臨床に根ざした音楽療法のリサーチ方法について	
山本（生野）　里花	比較社会文化学専攻
期間	2010 年 10 月 14 日～2010 年 10 月 28 日
場所	アメリカ合衆国（ニューヨーク，フィラデルフィア，サンタバーバラ）
施設	TOTS, Inc.，ニューヨーク大学，レベッカ・スクール，ベス・アブラハム病院，テンプル大学、及び同大学教授私宅，アンティオーク大学教授私宅

内容報告

1. プロジェクトの目的

今回のプロジェクトは，臨床に根ざした音楽療法の研究方法を討論することを主眼として計画した。

2. 日程と内容

2.1　TOTS,Inc.：音楽療法士 David. Murcus 氏、他（10 月 15 日）

ブロンクス地区の就学前障碍児療育施設 TOTS[1] を訪ね，音楽療法士 Murcus 氏ら [2] によるグループ音楽療法を 5 例見学した。対象児の動きや発声のダイナミズムを取り込んだ即興的・自然主義的・音楽中心的アプローチは、博士論文で取り上げる私の症例とも通じるものが多く，非常に参考になった。また当日，ニューヨーク大学の Guererro 氏がリサーチ目的の録画に訪れており，その意見も交えて討論することができた。

2.2 ニューヨーク大学ノードフ･ロビンズ音楽療法センター：所長 Alan Turry 博士（10 月 15 日）

ノードフ・ロビンズ創造的音楽療法 [3] は，私が臨床上、多大な影響を受けた方法論であるが、ここ 10 年程同センターを訪れる機会がなかった。今回，その実践と研究の「現在」について大きな関心を持って訪問した。Turry 博士から，センターの現況とリサーチ計画についての概観を，最新のプロモーション・ビデオを交えて聞くことができた。

2.3 ニューヨーク大学ノードフ･ロビンズ音楽療法センター：リサーチ・コーディネーターNina Guerrero 氏、他（10 月 16 日）

同センターで 3 例の音楽療法セッションを見学し，1 例についてセッション後の記録作業に立ち会った。またセラピストらの合同ミーティングに同席し，その共通テーマや討論に触れることができた。

さらに，Guerrero 氏から同センターのリサーチの新しい方向性と方法について詳説を受けた。人間主義的・直観的な視点に立った臨床をどのように社会の他領域の専門家と分かち合っていくのかについて，興味深い意見が聞かれた。

2.4 レベッカ・スクール：音楽療法士 Stacey Hensel 氏（10 月 18 日）

マンハッタンに地区ある、4 歳から 18 歳までの主に広汎性発達障碍児のための学校レベッカ・スクールで音楽療法を見学した。アートやドラマと並ぶ創造的芸術療法プログラムの一貫として行われており，１人の子どもが週に2～3回の個人音楽療法を受けられるという，臨床的にも研究的にも理想的な設定であった。この日，２つのセッションを見学し，その目的や記録と評価の方法についての解説を受けた。

2.5 テンプル大学教授 Kenneth Aigen 博士私宅（10 月 18 日）

音楽療法質的研究の指導的研究者の一人である Aigen 博士 [4] を訪ね，私の二つの論文発表「ある個人音楽療法セッション・プロセスにおける関係性の展開—重度発達障碍児と音楽療法士の双方に焦点を当てて—」（第 10 回日本音楽療法学会にて発表，9 月 23 日）と，「関係性と意味性:重度知的障碍児との音楽療法場面を解釈する方法の検討」（第 42 回日本芸術療法学会にて発表，10 月 30 日）について 3 時間半にわたり意見を聞いた。音楽療法における質的研究の位置づけや臨床的視点について、多くの発見があった。

2.6 ベス・アブラハム病院音楽神経機能研究所：音楽療法部長 Benedikte Scheiby 氏（10 月 19 日）

ニューヨーク地区でも歴史ある音楽療法臨床現場として定評のあるベス・アブラハム病院 [5] を訪れた。この日は、学生インターンのスーパービジョン，ヨガを取り入れた神経難病高齢者グループの音楽療法，同じく青年グループのバンド活動などを見学し，さらにリサーチ部長の Mijin Kim 博士から同研究所が力を注ぐ量的リサーチの解説を受けた。量的・質的リサーチの意味づけや社会的役割にも議論が及び，非常に刺激的だった。

2.7 テンプル大学大学院：Kenneth Aigen 教授（10 月 10～23 日）

同大学で音楽療法を専攻する修士・博士課程の学生と共に音楽療法質的研究の講座を聴講した。教授の講義のほか、学生による質的リサーチ・プロジェクトの発表にも加えて頂き，具体的かつ概念的な討論をすることができた。

2.8 アンティオーク大学教授 Carolyn Kenny 博士私宅（10 月 24～26 日）

前述のふたつの論文について，Kenny 博士[6] に現象学的・解釈学的視点に関する意見を聞いた。同じ論文についての Aigen 博士からのコメントを交え、微妙に異なる意見を対比しながら議論することは大変興味深かった。また解釈学的研究の前提となる考え方，方法論，とくに健康科学の領域で深まってきている議論についての知識を得ることができた。

3. 終わりに

日本の音楽療法臨床家の間での質的リサーチのニーズは高まっており，国際的な議論に積極的に加わっていくことが望まれる。今回，２週間という短期間ではあったが，様々の立場・意見の臨床研究者との議論の糸口を作ることができたのは大きな収穫だった。

音楽療法の概念や研究方法への考え方は，特定の社会，特定の機関の歴史や社会的役割，そしてセラピスト個人の職業的役割や個人史によって異なる育ち方をすることを実感すると共に，今回会った人たちは皆、自分自身の立場について明確な裏付けのもとに論述していたことに強い印象を受けた。そこに私自身の考え方を反映させて見つめ直すこともできた。

成果は、日本芸術療法学会誌、日本音楽療法学会誌への投稿を検討すると共に、これからもこうした研究者たちとの議論を続行し，博士論文を熟成させていきたいと考える。

注

1. These Our Treasures, Inc.：1970 年、この地区の障碍児の親たちによって始められた自主療育活動が基盤となり、後に学校となった。
2. 同氏は後述するノードフ・ロビンズ音楽療法センターに勤務する傍ら、マンハッタン地区に Creative Music Therapy Studio を開いており、TOTS の経営陣がその活動に共感して同校の音楽療法プログラムに招聘している。
3. 1950~60 年代に作曲家兼ピアニスト、Paul Nordoff と特殊教育家 Clive Robbins によって創始された音楽療法で、人間主義心理学と即興演奏を軸とする。以来、北欧、イギリス、ドイツ、アメリカ、オーストラリア、日本、韓国などで多彩な展開を見せてきた。
4. 2006 年までニューヨーク大学ノードフ・ロビンズ音楽療法センターの指導的立場にあり、現在テンプル大学で教鞭をとる。質的リサーチ、音楽基盤的音楽療法に関する臨床及び理論研究の著作が多数ある。
5. 音楽心理療法、MIDI 器機による音楽療法、コミュニティ的グループ音楽療法、神経リハビリテーションプログラム、認知症音楽療法、緩和ケア音楽療法、リラクゼーション及びストレス・マネージメント音楽療法など、現代の多彩な音楽療法を包括的に取り入れている病院。
6. 文化コンテクストを重視した音楽療法、心理療法的音楽療法、質的方法論などの研究に力を入れ、大学で教鞭をとるかたわら、Voices: A World Forum for Music Therapy の共同編集長も勤める。

参考文献

Aigen, K. (1996) *Being in Music: Foundation of Nordoff-Robbins Music Therapy*, MMB Music, Inc.

Creswell, J.W. (2007) *Qualitative Inquiry & Research Design: Choosing Among Five Approaches*, Sage Publications.

Kenny, C. B. (1989) *The Field of Play: A Guide for the Theory and Practice of Music Therapy*, Ridgeview Publishing Company. (近藤里美(訳) 2006『フィールド・オブ・プレイ －音楽療法の「体験の場」で起こっていること』春秋社)

Marshall, C., Rossman, G.B. (2011) *Designing Qualitative Research*, Sage Publications.

Nordoff-Robbins Center for Music Therapy: Research. http://steinhardt.nyu.edu/music/nordoff/research/ (2011 年 11 月 27 日閲覧)

Robbins, C. (2005) A Journey into Creative Music Therapy, Barcelona Publishers. (生野里花(訳) 2007『音楽する人間：ノードフ-ロビンズ創造的音楽療法への遥かな道』春秋社)

Van Manen, M. (1990) *Researching Lived Experience*: Human Science for An Action Sensitive Pedagogy, SUNY.

Voices: A World Forum for Music Therapy. http://www.voices.no/ (2011 年 11 月 27 日閲覧)

やまもと（いくの）　りか／お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

山本里花さんは、本学の博士後期課程２年生ですが、すでにアメリカと日本での音楽療法研究の実績を持ち、学会等でも高く評価されています。今回の海外アカデミック・ディスカッションのプロジェクトによって、音楽療法の先進国であるアメリカ合衆国の最先端の研究機関を訪れ、現在中核となって研究および臨床に関わっている研究者や音楽療法士の方々と、臨床を踏まえた議論が行なえたことは、大変有意義であったと評価できます。　音楽療法の分野は一定の手法によってカバーできるものではなく、セラピスト自身が対象者とそのつどの時間と場所で、そのつどの関係を構築しながら、質的リサーチを積み重ねてゆくものであろう、ということが、山本さんの研究姿勢からうかがうことができます。人と人とが直接的に関わりを持つ、その時に、その関係がいかに質的であるのか、様々な関係性の中でもどのようにあることが、質的に「その次の」局面へと進めることができるのか、そして、音楽はその「場」においてどのような意味を持ちうるのか、あるいは音楽にどのような意味を与えることができるのか、など問いは尽きることがありません。

しかしながら、山本さんは今回の海外アカデミック・ディスカッションにおいて、たしかな手応えを感じたとともに、それを単に受容するのではなく、自らの療法士としての、そして日本の文化的コンテクストの中で、民族音楽学の成果をも踏まえて、日本から発信できる音楽療法の新たな質的リサーチを見いだすための、基盤を得たと考えられます。

今回の成果が山本さんの博士論文に結実し、日本の音楽療法のみならず、世界の音楽療法に対しても、その「根」の部分で大きな貢献をすることが期待されます。

永原　恵三（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　教授）

海外アカデミック・ディスカッション	
ＪＦＬ環境における上級日本語会話指導	
小松　奈々	比較社会文化学専攻
期間	2010 年 10 月 30 日～2010 年 12 月 10 日
場所	韓国　ソウル市
施設	同徳女子大学校

内容報告

1. 活動目的

近年、インターネットの普及や留学準備環境の整備により、日本国外での日本語学習者数は増加の一途をたどっている。特に、韓国では全世界の日本語学習者の 3 割を占める 91 万人が学んでいる [1]。ＪＦＬ環境では、同一言語を用いる学習者同士の関わりやネイティブおよび非ネイティブ教師の担う役割など、国内とは異なる教育内容が発展していると推察される。学習者の日本語能力がどのような学習環境を経て身につけられたのかを知るためには、国内のみならず海外の教育事情も詳細に調査する必要がある。

そこで本活動では、韓国の大学における日本語授業でどのような学びが達成されているかを調査した。

2. 本活動の博士論文における位置づけ

現在まで、熟達した日本語学習者、いわゆる超上級レベルの日本語学習者に備わる会話運用能力については、複段落を用いて詳細に語る、考えの根拠を示し論理的に話すなどの特徴が明らかにされている（荻原ほか 2001、鈴木 2006）。しかしながら、一般的な発話場面は会話相手との相互行為によって成り立っていると捉えると、相手への反応、相手との会話内容の共同構築など、さらに幅広い視点から見た特徴が明らかにされるべきであろう。筆者の博士論文のテーマは、意見交換場面において超上級学習者と母語話者はどのようなやりとりの過程を経て話し合いを深化させているかを解明することである。

現在までに収集したデータによると、熟達した学習者の中には基礎を自国で学び、上級に達してから日本で進学、就職するというケースが多い。そこで本活動では、学習者の母国における学習段階を観察し、どのように会話能力を身につけているのかを調査することで今後の対象者の精緻化に役立てたいと考えた。本活動は、博士論文における基礎調査に当たる。

ＪＦＬ環境における韓国人学習者を対象とした研究は、学習スタイルや学習ストラテジーを調査したもの（朴 2007、朴 2010）や、日本語学科全体の流れを示したもの（李 2004、金 2008）など数多くあるが、実践現場でどのような活動が行われているかを質的に観察したものは少ない。本活動では、ＪＦＬ環境において数少ない機会であると思われる日本人教師との関わりを通して、学習者が何を学びとっているかを観察した。

3. 活動内容

3.1 授業見学

4 年生が対象となる「発表・討論」および「文化間コミュニケーション」の 2 授業を 1 カ月間に渡り観察した。

「発表・討論」では、学期の前半に発表時によく使われる表現を教科書で確認する。学期の後半は、2 人ずつペアになって各組の関心のあるテーマでプレゼンテーションを準備する。その後、発表された内容について賛成、反対、討論の司会、傍聴者に役割を分け、討論を行う。討論の様子はビデオに録画し、後日全員でフィードバックを行う。

この授業では、発表に関する質問、討論を進める準備など、授業における手続きが全て日本語で行われており、教師とのやりとりを通して自然な表現を身につけようとする様子が観察された。

「文化間コミュニケーション」では、日本人向けに書かれた理論書の講読を中心に授業が進められる。各章の担当になった学生が事前に教科書の内容を韓国語に翻訳し、当日全員で照らし合わせながら読み進む。

この授業では日本対韓国という構図ではなく、西洋と東洋の比較を通して間接的に日本と韓国の文化差について学生が気づいていくという過程が見られた。教師は日本人としての自然な感覚や常識を紹介し、それについて西洋、また韓国ではどうなのか常に問いかけていた。それにより、学生は客観的な目

で日本を観察する視点を得ていることが伺えた。

3.2 アンケート

見学後にアンケートを行い、学習者の進路および授業に対する期待について調査した。

卒業後の進路予定として、39 人中 17 人（44%）が日本で進学または就職することを希望しており、学んだことを日本で生かしたいと感じている学生が多いことがわかった。

また、日本人教師と韓国人教師に求めるものが異なると答えた学生が多く、31 人（79%）が異なる授業方式、34 人（87%）が異なる授業内容を求めていた。具体的には、日本人教師にはグループ、発表形式の授業形式で、会話や実用的な文法の授業を希望するという記述が多く見られた。

4. 今後の予定

本調査内容は、2011 年 2 月に行われる韓国日本学会第 82 回国際学術大会において発表する予定である。今後韓国の大学において有益な授業とは何か、意見交換を活発に行っていきたい。

注

1. 『海外の日本語教育の現状　日本語教育機関調査・2006 年（概要）』国際交流基金編

参考文献

李徳奉 (2004)「韓国の新学習指導要領に見る日本語教育の新しい動き」『世界の日本語教育. 日本語教育事情報告編』7, 11-27

荻原稚佳子・斎藤眞理子・増田眞佐子・米田由喜代・伊藤とく美 (2001)「上・超級日本語学習者における発話分析―発話内容領域との関わりから―」『世界の日本語教育』11, 83-102

金英美 (2008)「韓国の大学における日本語教育学科のカリキュラムの変遷について－専攻科目の分析を中心に」『アジア教育史研究 』17, 40-57

鈴木志のぶ (2006)「日本語学習者によるアーギュメントの特徴 －上級者・超級者間の差異－」『 Speech Communication Education』19, 95-112.

朴志仙 (2008)「韓国人日本語学習者における学習スタイルの研究動向：Kolb の学習理論を中心に」『人間文化創成科学論叢』10, 47-54

朴一美 (2010)「学習ストラテジーと韓国人日本語学習者要因との関係」『人文社会科学論叢 』19, 75-90

こまつ　なな／お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

小松奈々さんの今回の研修の目的は、海外、特に韓国における日本語教育の実態を把握し、その成果を博士論文に活かすことである。

小松さんの博士論文のテーマは、上級日本語学習者が話し合い場面においてどのように意見を交換し、合意に至っていくのかを明らかにすることである。円滑なコミュニケーションを通した協働的意思決定プロセスの解明は、グローバル社会における喫緊の課題であると考えられる。研修においては、そのような話し合いの場面の指導を観察することができ、大変有意義な研修となった。

上記に加え、韓国の大学の授業を見学したり、関係の先生方や研究者の方々と交流したりすることによって、博士論文の執筆に向けて、問題意識が明確になるとともに研究に関する様々な具体的な示唆を得ることができた。小松さんは、将来、韓国で日本語教育及び日本語教育研究に携わる予定であり、その点においても非常に大きな収穫となった。

今後は、研修の成果を活かして、博士論文執筆を視野に入れて、修士論文で行った分析の精緻化及び新たなデータ収集を行う予定である。

佐々木　泰子（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　教授）

海外アカデミック・ディスカッション	
バイリンガリズムと教育：21 世紀のバイリンガル教育と多言語教育に向けて	
高友晗（ゴイハン）	人間発達科学専攻
期間	2010 年 9 月 6 日～2010 年 9 月 24 日
場所	アメリカ合衆国　ニューヨーク市
施設	ニューヨーク市立大学　グラジュエイトセンター

内容報告

1. 本学での研究内容とその背景

グローバル化が進む中、先住民・少数民族教育において、バイリンガル教育からトライリンガル（三言語）、またマルチリンガル（多言語）教育へシフトする動きが大きな教育変化の一つとして注目を集めている。中国少数民族地域では、1950 年代に始まった二言語併用教育 1 政策のもと、少数民族のため特別な措置として設置した民族学校において漢語と民族語によるバイリンガル教育が行われてきたが、英語教育必修化によってトライリンガル教育を実施することになった。経済的に立ち遅れた農村地域や少数民族区域の中には義務教育完全普及に至っていない地域もあるが、グローバルな競争に参入するための手段となる英語能力を習得するために、2001 年から民族学校において、小学校一年次またそれ以上の学年から英語を学ぶことになり、英語習得を通した経済発展に期待が寄せられている。本論文で事例として取り上げる内モンゴル自治区のモンゴル族学校では、1992 年に中等教育課程で英語教育が必修化される以前は、ほとんどの学校で外国語教育を行ってこなかったが、2001 年からは小学校の低学年から三つの言葉を同時に教え、更に中学校の段階から第二言語の漢語による英語教育が普及している。

中国の民族教育において、トライリンガル教育を実施するための公的な言語政策とインフラ設備は揃っているだろうか。三つの言語を同時に教えることで、三つともうまく習得できるのだろうか。バイリンガルの生徒はモノリンガルの生徒に比べて第三言語を獲得するのが早い（カミンズ 2005）と言われるが、モンゴル語と漢語のバイリンガル教育を受けるモンゴル人学習者は英語をうまく習得しているのか。早期英語教育の必修化に伴うトライリンガル教育システムの導入が民族学校へ通う中国少数民族学生の言語能力の発達・形成にどのような変化を与えるか。民族教育当事者たちはトライリンガル教育についてどう認識されているか。また母語教育と母語を媒介語としての教育をどう位置づけているか。さらに、トライリンガル教育がうまく行ってなければ、その発生要因は何であろうか。以上の問題意識を踏まえ、本研究では、英語教育必修化に伴う民族教育の中身を解明し、英語教育とトライリンガル教育を含めた民族教育がどう発展するか方向性を示し、これからの民族学校における存在目的及びあり方について探っていきたい。

2. 海外アカデミック・ディスカッションの必要性

これまで、バイリンガル教育に関する研究は数多く行われており、その成果は言語教育の現場において様々な形で活用されてきた。しかし、バイリンガルからトライリンガルまたはそれ以上の言語を習得するための研究は少ない。また、バイリンガル教育の多くは結果的に多数派言語への同化をもたらす移行型言語教育であると、その目的と形態が不明瞭で不安定なものとして認識されている（ベーカー 1993）。中国の民族教育においてもその曖昧性が露呈し、民族言語教育重視という立場から策定されたものも、実際には漢語普及の道具になっている（庄司 2003）。そのため、バイリンガル教育という基本路線を維持しても、民族言語習得には効果を満たされないものも含まれている。このように先行研究を読んでくると、バイリンガル教育の可能性とあり方について疑い始めることが多くなり、バイリンガル教育がもっとも進んだ欧米の研究者はどう見るのか、知りたくなった。

ちょうどこの時期に、大学の中で「女性リーダーを創出する国際拠点の形成プロジェクト―海外アカデミック・ディスカッション」に関する応募を見つかり、自分の問題意識にぴったりと合致すると思った。それから、申請手続きを始め、私が参考文献でよく論文を拝見する、ニューヨーク市立大学の教授、社会言語学で世界的有名な研究者 Ofelia Garcia 氏の研究室を訪問することにした。そして今年 9 月に、

ニューヨーク市立大学大学院の博士後期課程のセミナーで、Ofelia Garcia 教授による講義「Bilingualism in Education」とゼミナール「Bilingualism, Multilingualism and Education: Global Sociolinguistic Perspectives」に参加することを希望したところ、教授の快諾をいただき、現地へ伺うこととなった。

3. 海外アカデミック・ディスカッションの目的とその目的の達成

私は海外アカデミック・ディスカッションにおいて、以下三つの目的を持って臨むことにした。1）バイリンガリズムとマルチリンガリズムに関する近年の研究結果を知る。2）教授の研究チームによるゼミに参加可能なので、現地の研究者や博士課程の院生達と討論の機会を通じ、バイリンガリズムとマルチリンガリズムにおける問題意識をシェアする。3）バイリンガル教育が学校教育の中での理想的なあり方をトライリンガル教育に応用する可能性について、内モンゴル自治区における言語教育事情と照らし合わせながら、教授と意見交換する。

現地に到着してから、私は自分の問題関心を伝えたところ、Ofelia 教授に三週間にわたるスケジュールを計画していただいた。その中では、教授による講義「Bilingualism in Education」に毎週参加すること、教授が関わる三つの研究チームの活動に毎週参加すること、ニューヨークの公立小学校への見学、個人面談と、Nicholas M. Michelli 教授による講義「Education Policy」を聴講することなど、ボリュームのある内容だった。この他にも、私はニューヨーク市立大学が開催する、Tel Aviv University からの Elana Shohamy 教授による特別講演「Testing and Language Minority Students: Personal Biography and Current Research」と、博士号を取ったばかりの Laura Ascenzi-Moreno 氏による講演「Writing Your Dissertation Proposal」などに参加した。

時差ボケに加わり、ハードな三週間のスケジュールだったが、想像する以上に有益な研究訪問になったと言える。それは訪問当初の目的達成にほぼ近づいただけではなく、研究方法に関する新しい発見や、バイリンガリズムに関する違ったあり方の発見など、たくさん新しい発想と見解を伺ったからだ。

まず、Ofelia 教授による後期課程の講義「Bilingualism in Education」において、一学期にわたる内容を三週間で三回しか聴講できなかったため、より完整した知識構造を得ることができなかった。しかし、教授は私の問題関心を意識されながら講義をされたお陰で、私は短い期間でも、今後の研究にヒントとなるポイントを幾つか掴むことができた。例えば、バイリンガル教育という概念に関して、多くの文献では、「コミュニケーションの道具」として扱うことが多いが、近年の社会言語学分野での研究では、この概念に「アクション、ローカルプラクティス」という新たなニューアンスを入れていることが分かった。この概念の変化に関して、自分でちょっと考えれば「確かにその通りだと」思い始める—バイリンガル教育は前世紀において、支配者側の言語教育政策の一環となっていたが、グローバル化が進化する今日では、言語的少数派が言語権を維持するため活動に変化しつつあるのである。

次に、Ofelia 教授の研究チームの活動に参加したところ、文系の研究にも企業のマネジメントが適応されることが分かった。毎回のゼミでは、前回の課題の達成が確認され、解決できなかった部分を全員で検討し、次の課題の役割分担を決め、何を誰が何時まで完成するかなど、細かいスケジュールを決めて解散する。三つの研究チームの活動に参加したが、それぞれ異なった課題研究が行われ、進捗状況も違っていた。予算とメンバー配分を決める回もあったが、最後の仕上げをどのようにデジタル化するような完成を迎える回もあった。ここでは、知識より、研究のノウハウや研究のマネジメントについて新たな発見があったといえるだろう。

また、私は最初の頃、Ofelia 教授に「バイリンガル教育の理想的なあり方」について尋ねたところ、教授に「バイリンガル教育は地域の特徴、言語の特徴、政府の方針やコミュニティの協力によって、あり方が違う。理想的なあり方より『良い事例』をたくさん参考することが大事だ」ということを教わった。そして、教授の研究チームが関わるニューヨークのとある公立小学校での教育経験が良い事例として紹介され、見学することも可能になった。私は一日でその小学校の幼稚園部から 1,2,3,5 学年次までの見学を実現できた。この小学校はスペイン語と英語のバイリンガルプログラムを推進する小学校で、スペイン語を母語としないアジア系やアフリカ系の生徒も多く在籍しているため、ケースによって、学校教育だけでバイリンガル能力を育成する責任を果たしていることになる。教員はいずれもバイリンガルで、カリキュラムは一日に一回教授言語を変える形で行われる。教授言語が毎日変更されても 2、シラバスが順調に行われていることに驚くばかりであった。生徒達にとって、前日に英語で習った数学の内容を次の日にスペイン語で復習することは、極普通の日課のようで、不自然さや学習内容の連続性に欠ける現象は見られなかった。このようなバイリンガルプログラムに関する見学を通して、今ひとつ言えるのは、「バイリンガル能力は適切な学校教育によって育成、または発展されることが可能である」ではないだろうか。これまで、私は言語教育の結果ばかりに注目して、その可能性を検討してきたが、この見学を通して、バイリンガル教育とは、「アクション」であり、「ローカルプラクティス」であることをさらに理解することができた。したがって、バイリンガル能力とは、育成しようと思う強い気持ちと、適切な

学校教育があれば、十分理想的な形にまで発展できるという可能性を知らせてくれた。

以上のような主なファインディング以外に、バイリンガル教育及びマルチリンガル教育を実施する際、言語の機能を分けて行うことに心がけることの重要性に気付いた。また、自分の経験をどのようにして研究動機へと接続するかなどについて発見できたことからも、成果を得たと言えよう。

4. アカデミック・ディスカッションと今後の研究

アカデミック・ディスカッションを通して得た研究成果は、私の今後の研究活動を大いに影響するものである。私の研究は、バイリンガリズムやマルチリンガリズムなど比較教育社会学と社会言語学的理論に基づき、民族教育における英語教育のあり方とより有効なトライリンガル教育（ここでは、バイリンガル教育に加わる英語教育のことを指す）システムの検討であり、グローバル時代における「民族教育」のモデルとその新しい教育の可能性を探ることである。今回の研究訪問では、知識の学習と事例学習を通して、バイリンガル及びトライリンガル教育を実施する可能性とそのあり方の一例が主なファインディングである。今後は、博士論文や投稿論文において、その成果を反映していきたい。また、Ofelia 教授は私の研究分野にとても興味を持っておられ、来年から執筆される書籍の中に、内モンゴルの事例を紹介する章を設けると言われた。その章で紹介する内モンゴルにおける言語教育の現状の記述部分を担当するよう依頼された。大変光栄に引き受けさせていただき、原稿を来年 3 月までに送るように、作成している最中である。

注

1. 中国で行われている、漢語と民族語の二言語教育を指す名称。中国では、「双語教育」と呼ぶ。本論文では、「バイリンガル教育」という表現を使用する。
2. 英語とスペイン語のバイリンガル教育で、一日に一回教授言語を変えて授業を行うこと。例えば、月曜日の授業が全て英語で行われると、火曜日の授業は全てがスペイン語で行われることになる。

参考文献

ベーカー、コリン（1993[1996]）『バイリンガル教育と第二言語習得』（岡秀夫訳編）大修館書店。

庄司博史（2003）「中国少数民族新局面―特に漢語普及とのかかわりにおいて―」、国立民族学博物館研究報告 27(4)、683－724。

Cummins,J. M. Danesi(2005),『カナダの継承語教育 多文化・多言語主義をめざして』（中島和子・高垣俊之訳）明石書店。

Cummins,J. (1981). Age on Arrival and Immigrant Second School in Canada. *Applied Linguistics*. 11, 132-149.

Cummins,J. (1984). *Bilingualism and Special Education: Issues in Assessment and Pedagogy*. Clevendon: Multilingual Matters.

Ofelia Garcia (2008). Bilingual Education in the 21st Century: A Global Perspective. John Wiley and Sons Ltd..

ゴイハン／お茶の水女子大学大学院　人間文化研究科　人間発達科学専攻

指導教員によるコメント

ゴイハン氏の研究テーマは、一貫して少数民族教育を扱っており、特に、言語面での教育改革を扱っている。多文化教育、多言語状況における教育、第二言語習得などの研究は今やグローバルな視野が不可欠になっており、グローバルなトレンドとローカルな意味を常に往復させながら問い直していかねばならない。今回の海外アカデミック・ディスカッションにおいて、ゴイハン氏は、中国の民族教育における言語政策に関する問題意識から出発し、米国ニューヨーク市立大学の Ofelia Garcia 教授のもとで、講義の受講、公立小学校の見学などに参加し、多くの刺激を得ることができたと思われる。多言語・多文化教育の先進的実践を吸収することがきわめて有益なことであり、この後の研究に活かされていくものと思われる。ただ、今回ゴイハン氏が経験したことも、あくまでも米国というローカルな事例の一つであることをよく認識し、それを相対化しつつ、中国の事例がどう位置づけられるのか、検討するようにしていただきたいと思う。

浜野　隆（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　准教授）

学生海外調査研究	
中世後期ロンドンの刃物職人にみる「人と人とのかかわりあい」	
佐々井　真知	比較社会文化学専攻
期間	2010 年 7 月 14 日～2010 年 7 月 29 日
場所	英国　ロンドン
施設	国立公文書館・大英図書館・ロンドン市立公文書館・ロンドン大学歴史学研究所図書館

内容報告

1. 海外調査研究の必要性・目的

執筆者は、中世後期イングランド諸都市に生きる人々が築いた、「人と人とのかかわりあい」の様相を明らかにすることを目指して研究を進めている。博士論文では、中世後期ロンドンの商工業者、とくに刃物職人と、絹加工業に携わる女性であるシルクウーマンとを対象とし、複数の種類の史料を収集・分析してこのテーマを考察するつもりである。シルクウーマンについてはすでに史料の収集を完了し、分析・考察を進めているため、本調査では、14・15・16 世紀の刃物職人に関する史料の収集を目指した。

刃物職人の事例から見えてくる「人と人とのかかわりあい」の様相を明らかにするには、刃物職人が結成していた同業者団体すなわち刃物職人ギルドの内部での相互扶助やギルドを介しての異業種の人々とのかかわりと、個々の刃物職人が持つ、同業者以外をも含むさまざまな人々とのかかわりの両方を扱わねばならない。団体と個人の両方に注目することで、ロンドンの人口の大半を占めた商工業者の生き方を理解することが可能になると考えるからである。同業者団体を通じてのかかわりあいについては、刃物職人ギルドの会計簿を主な史料としてすでに考察を進めているため、本調査では、執筆者のこれまでの調査では収集が不十分であった、刃物職人個人が持つ他人とのかかわりの一端を見出しうる史料を収集することを目的とした。すなわち、本調査は、中世後期ロンドンに生きる人々が築いた、「人と人とのかかわりあい」の様相を明らかにすることを目指す博士論文の中核となる議論を発展させるために不可欠だといえる。

ひとりの刃物職人を中心に据えて、彼の持つ他人とのかかわりを明らかにしようとする際に有効な史料は、第一に、遺言書である。先行研究では、遺言書はとくに女性の持つかかわりを研究する際に多く用いられてきたように思われる。商工業者として働く個々の女性については遺言書が唯一の史料である場合が多いためである。しかしながら、60 年以上前に S. スラップが 15 世紀ロンドンの商人について示したように、男性の商工業者の遺言書もまた、遺言書作成者と彼を取り巻く多様な人々、たとえば親族、同業者、近隣住民などとのかかわりあいを探るためには有益といえる。なお、遺言書本文が現存しておらず、遺言書の検認記録のみが現存していることもある。本調査では検認記録のみの記載であっても収集したが、本文も現存している場合と区別するため、検認記録のみが記載された史料は遺言関連文書と呼ぶこととする。

第二に、裁判関連文書もまた、個々の刃物職人の持つ他人とのかかわりを探るために利用できる。裁判関連文書は、索引が刊行かつデータベース化されているために効率的に一次史料収集が可能である、大法官府裁判所 The Court of Chancery に提出された請願書のうち、ロンドンの刃物職人が申立人あるいは申立人とのもめごとの相手であるものを収集した。裁判関連文書を史料として用いる理由の第一は、非親和的関係をも明らかにできることにある。遺言書には、遺言書を作成する時点で遺言者が心にかけ、信頼していた人々への遺贈や依頼が記されることから、遺言書が示すかかわりは、親和的、友好的なものに限定される可能性が高い。しかし人々の生活には非親和的なかかわりも生じざるを得ない。その諸相を見出せるのが、もめごとの相手や内容を伝える裁判関連文書である。一方で、内容を丁寧に読み解くことで、刃物職人がさまざまな人々と親和的と考えうるかかわりを築いていた証拠をも、見出すことができるだろう。

2. 調査の概要

刃物職人の遺言書および遺言関連文書と、刃物職人が関係する大法官府裁判所の文書のそれぞれについて、本調査の概要を示す。

2.1 遺言書・遺言関連文書

現存する刃物職人の遺言書および遺言関連文書は、ロンドンにある国立公文書館 The National Archives とロンドン市立公文書館 London Metropolitan Archives に所蔵されている。国立公文書館所蔵の史料はすでに入手してあるため、本調査ではロンドン市立公文書館に赴き、一次史料の撮影あるいはマイクロフィルムの印刷というかたちで収集した。本調査で収集の対象としたのは、ハスティング裁判所 The Husting Court、ロンドン副司教管区裁判所 The Archdeaconry Court of London、ロンドン大助祭管区裁判所 The Commissary Court of London に登録された、14 世紀から 16 世紀の刃物職人の遺言書・遺言関連文書である。刃物職人と自称しているなど、史料中の文言から判断して刃物職人であることが明らかであるもののみを選択した。

遺言書・遺言関連文書を収集する際には、ロンドン副司教管区裁判所とロンドン大助祭管区裁判所に登録された文書については、それぞれの裁判所が作成した 2 種類の文書を調査する必要がある。ひとつは、遺言書登録簿 Will Register である。遺言書本文は通常は、検認記録を末尾に付されて遺言書登録簿に記され、この遺言書登録簿が、登録を受け付けた裁判所ごとに作成されて現存している。加えて、遺言書登録簿には、検認記録のみが記載された箇所や、遺言を残さずに死亡した人々の財産の処分を執り行うべき人々を裁判所が決定した旨が記載された箇所もある。調査すべきもうひとつの文書は、検認記録のみを集めた、少なくとも現在ではアクト・ブック Act Book と呼ばれている文書である。

つまり、上述の 2 裁判所については、遺言書（ほとんどの場合は検認記録つき）・単独の検認記録・遺言なしの死者に関する取り決め、の 3 種類の史料が存在するといえる。16 世紀については、同一人物に関して遺言書と単独の検認記録の両方が現存している例もあるが、14 世紀・15 世紀については、同一人物に関しては上述の 3 種類の史料のうちの 1 種類が現存するのみである。ただし、14・15・16 世紀を通じて、同一人物に関して複数の遺言書が現存する例はある。その場合でも、検認記録つきの遺言書は通常は同一人物につき一通のみである。検認記録はラテン語で記されるが、遺言書本文は、15 世紀末以降はラテン語で記されたものに加えて英語で記されたものも見られるようになり、次第に英語による記載が増加していく。

本調査で収集したのは、上述の 3 種類の史料を合計して、14 世紀に作成されたものが 21 名分 22 通、15 世紀のものが 15 名分 15 通、16 世紀のものが 26 名分 31 通であり、計 62 名分 68 通である。

以下では、博士論文で中心的に扱う 15 世紀の史料について、本調査で収集したものに限定して述べていく。収集した 15 世紀の史料 15 通の内訳は、遺言書が 5 通、遺言関連文書が 10 通である。ここでは、博士論文のテーマに関してより多くの情報を持つ遺言書 5 通をとりあげ、「人と人とのかかわりあい」という観点から注目すべき内容のみ抜粋して紹介する。なお、以下の紹介では、史料中に現われる名前の表記は現代英語に直した。氏名の次が史料番号であり、括弧なしの年は遺言書が作成された年、括弧[　　]つきの年は検認された年を示す[1]。

・Nicholas Ryke (GL, MS 9171/3, f. 366v.), 1433 [1433]
　遺言執行人に妻と指物師 2 名を指名している。
・John Eggleton (GL, MS 9171/3, f. 374v.), 1434 [1434]
　遺言執行人に弓職人、刃物職人、指物師それぞれ 1 名を指名している。
・Henry Kendale (GL, MS 9171/5, f. 311v.), 1453 [1453]
　遺言執行人に妻と刃物職人 2 名を指名している。
・William Smith (GL, MS 9171/5, f. 300), 1460 [1460]
　遺言執行人に刃物職人 1 名を指名している。ロンドン市外（Essex、Hertford）にある教区教会や、その教区に住む貧者へ金銭を遺贈している。刃物職人ギルドに、物品を遺贈している。徒弟 Thomas Higham の残りの徒弟訓練期間を免除するとしている。
・Richard Gybson (GL, MS 9171/7, f. 8v.), 1483 [1483]
　遺言執行監督人に食料品商 1 名を指名している。

以上のように、遺言書は、遺言書作成者が維持していた他人や団体とのかかわりを探る手がかりとなる。本調査で入手した 14 世紀、16 世紀の遺言書も、今後、解読、分析していく。

2.2 大法官府裁判所の文書

大法官府裁判所に提出された請願書は、国立公文書館に所蔵されており、一次史料の撮影によって入手した。本調査で収集したのは、刃物職人が申立人あるいは申立人とのもめごとの相手であることが明らかである請願書である。時間の制約上、15 世紀に提出されたもの 27 通のみを収集した。これら 27 通のうち、博士論文のテーマに照らして重要な情報を持つ請願書を、明らかになる事柄別に紹介する[2]。

・刃物職人の仕事の一側面を示す史料
　TNA, PRO（以下同）, C1/10/124：刃物職人間で、ある使用人（おそらく雇われて働く刃物職人）の扱いをめぐってもめごとが起こった。雇われて働く職人の状況の一例を伝えている。
　C1/64/190：ある徒弟が、徒弟契約期間中に無断で親方の下から逃亡した。徒弟が、再び親方の下に戻る許しを乞うた際に、親方は「彼の仕事の監事 warden」すなわちギルドの役職者

のすすめで徒弟の要求を受け入れた。このことから、刃物職人ギルドの役割の一つに、親方 - 徒弟間の問題解決があり、実際に機能していたと推測できる。親方と徒弟の確執の一端も垣間見られる。

・刃物職人と、ロンドンの商工業者との金銭をめぐるもめごとを示す史料
  C1/28/292 : William Seton（刃物職人）と Robert Trotte（獣脂蝋燭製造人）
  C1/64/859 : William Jakson（刃物職人）と Thomas Wilson（仕立商）
  C1/73/146 : Robert Saxham（刃物職人）と Robert Otteway（醸造人）
  C1/117/55 : John Bull（刃物職人）と John Pynder（服地商）

これらの史料から、刃物職人が多様な業種の人々とかかわりを持っていたと述べるのはあまりに短絡である。しかしここに登場する人々について複数の史料にあたって調査することで、もめごとの当事者同士が近隣住民であったのか、仕事の上で面識があったのか、などを探ることは可能である。さらなる調査のきっかけとなる史料といえる。

ここに挙げたのは一例に過ぎないが、収集した大法官府裁判所の請願書を概観すると、刃物職人に関しては、シルクウーマンの場合ほどは仕事の内容や働き方を考える手がかりが請願書に含まれていないように思われる。ギルドを結成していた刃物職人は、仕事の上での問題はギルドを通じて解決していたのかもしれない。たとえば、1489 年度の刃物職人ギルドの会計簿からは、3 名の徒弟が親方の家に居住していないかどで罰金を徴収されていることが明らかである [3]。少なくとも親方と徒弟間の問題に関してはギルドが関与していたようだ。

大法官府裁判所の請願書から見出すことができるのは、むしろ刃物職人でもあったロンドンの一市民が、おそらく仕事以外と思われる場面でどのような人々とかかわっていたのか、という点だろう。刃物職人に関して、ギルドの会計簿とは異なる種類の価値ある情報を提供する史料である。

以上のように、本調査で収集した史料は有益な情報を多く含む。ただし当然ながら、史料の持つ情報がすべて真実であるとは限らないし、遺言書と裁判関連文書から読み取れる人間関係を当事者の持つ他人とのかかわりのすべてととらえることはではない。しかし、史料が豊富だとはいえない 15 世紀ロンドンの商工業者層に属する人々について、史料の持つ問題点を踏まえて慎重に分析し、研究していくことは意味のあることだと考える。

一次史料に加えて、大英図書館とロンドン大学歴史学研究所図書館にて、日本では入手不可能な研究文献も収集した。さらに、ハーラクストン中世学会に参加し、多くの中世後期イングランド史研究の専門家と意見交換をする機会を得た。

3. 執筆者の研究における本調査の位置づけ

執筆者はこれまで、中世後期ロンドン商工業社会をよりよく理解するため、男女の商工業者に注目し、彼らが仕事内外で築き、利用した他人とのかかわりの一端を明らかにすることを目指して研究を行ってきた。これまでの執筆者の研究の特徴は以下の 2 点にまとめられる。

第一に、同業者団体を結成していなかった、15 世紀ロンドンの女性商工業者の働き方や他人とのかかわり方の考察である。女性商工業者の例として、絹加工業に携わっていたシルクウーマンを対象とした。大法官府裁判所の裁判関連文書を用いて、未婚女性・既婚女性・寡婦という女性のライフサイクルの段階ごとの働き方を、法や慣習と関連づけて論じ、女性がライフサイクルの段階ごとに異なる枠組みの中で、法と慣習が定める権利を選択し、状況に応じて使い分けていたことを指摘した [4]。この論考は、シルクウーマンの仕事への夫の介入の度合いや、同業者、原料供給者、顧客との関係などの、他人とのかかわり方についての枠組みの整理と実際の状況の考察ともいえる。また、仕事上での非親和的なかかわりの存在も、徒弟とのもめごとを伝える一件の裁判関連文書の分析から示した [5]。

シルクウーマンに関しては、仕事すなわち絹加工業という側面以外での、他人とのかかわりをも考察してきた。シルクウーマンの遺言書や王室の会計簿などを史料とし、同業者や顧客とのかかわりのほか、家族との、近隣住民との、また出身地と思われる地域の人々とのかかわりも、具体例を挙げて示した [6]。

第二に、同業者団体を結成していた男性商工業者に注目し、団体が成員に対して果たした対内的な社会的役割の研究も進めてきた。具体的な事例として取り上げたのは、先行研究がわずかしかない、15 世紀ロンドンの刃物職人である。刃物職人ギルドの会計簿の残存原史料のすべてと関連文書の分析から、慈善活動や互助活動などの社会的機能の実態を具体的に示した [7]。同業者団体を通じての、同業者同士の支えあいの様相の一端が明らかになったといえる。

これらの、執筆者のこれまでの研究は、どれも博士論文の柱となるものである。しかし、第二の特徴として挙げた刃物職人を対象とした研究では、上記 1. で述べたように、同業者団体だけでなく個々の刃物職人に注目することも必要である。すなわち、刃物職人の遺言書および刃物職人が関係する裁判関連文書を収集する本調査は、執筆者のこれまでの研究を博士論文の本論としてまとめるにあたって重要な調査だといえる。

4. 今後の研究計画・展望

上記 3. で述べた執筆者のこれまでの研究は、博士論文の本論にあたる部分をなす。本調査で収集した刃物職人の遺言書を用いた分析は、まず、博士論文の第 6 章「商工業の場を通じて築かれたかかわりの利用」（章番号、タイトルは予定、博士論文については以下同）の一部となる。対象とする遺言書に記される遺贈相手に注目し、刃物製作の場で築いたと思われるかかわりが、遺言書作成の時点でも意識されていたことを指摘したい。裁判関連文書もまた、この章を執筆する際に参照する。裁判関連文書からは、仕事の上で築いたかかわりが非親和的な関係に転化する事例もまた明らかにできるだろう。次に、第 7 章「教区、区におけるかかわり」、第 8 章「親族とのかかわり」でも、本調査で収集した史料を用いた議論を展開する。商工業者としての刃物職人だけでなく、教区民、区民としての刃物職人、家族・親族の一員としての刃物職人の姿を示すことで、個人から見たロンドン史を描くことを試みる。

本調査の成果は、博士論文以外の媒体でも公表される。博士論文提出以前に予定している口頭報告や論文投稿は 2010 年 8 月現在、以下のとおりである。2010 年 11 月に、第 4 回韓日英国史学会 The Fourth Korean-Japanese Conference of British History にて、“Cutlers in Fifteenth-Century London: Their Relationships with Others” と題して口頭報告を行うことが決定している。その後、この報告に基づいた論文を執筆し、2011 年 6 月に刊行予定の同学会の学会誌 *The Proceedings of Korean Japanese Conference of British History* に 2010 年中に投稿する予定である。この口頭報告および投稿論文では、執筆者が本調査を含めこれまでに入手した 15 世紀ロンドンの刃物職人の遺言書および遺言関連文書 70 名分 72 通すべてを用いて、刃物職人が築き、ときには選択して利用していた他人とのかかわりを具体的に示すつもりである。刃物職人の持つ他人とのかかわりあいの種類や性質に、15 世紀のロンドン商工業社会の一面を垣間見ることができると考える。

また、博士論文提出後になると思われるが、2013 年秋に刊行予定の *Journal of Medieval and Early Modern Studies* (Fall 2013, vol. 43, no. 3) への論文の掲載が決定している。“The Charitable Priorities of London Cutlers in the Fifteenth Century” と題して、刃物職人ギルドの会計簿と刃物職人の遺言書・遺言関連文書を史料とし、団体と個人の両面から、商工業者の互助活動・慈善活動の一端を具体的に示すことを目指す。本調査で収集した史料は、この論文の執筆においても主要な史料となる。

以上のように、本調査の成果は、日本語のみならず、英語でも公表される予定である。本調査で収集した史料を用いる論考が、国際学会での口頭報告と洋雑誌への掲載を受理されたことから、本調査およびそれに基づく考察は、グローバルな視野での先進的な調査研究であるといえるだろう。

注

1. 史料番号にある ‘GL’ は ‘Guildhall Library’ の略である。ロンドン副司教管区裁判所とロンドン大助祭管区裁判所に登録された遺言書と遺言関連文書は、以前はギルドホール図書館に所蔵されていたが、2009 年途中からはロンドン市立公文書館に所蔵されるようになった。
2. 史料番号にある ‘TNA’ は ‘The National Archives’、‘PRO’ は ‘Public Record Office’ の略である。
3. GL, MS 7146/32.
4. 佐々井真知（2008）「大法官府裁判所の裁判関連文書に見るシルクウーマン―中世後期ロンドンの女性のライフサイクルと仕事―」『お茶の水史学』52, 137-176.
5. 佐々井真知（2007）「ある係争事例にみる 15 世紀ロンドンのシルクウーマン」『F-GENS ジャーナル』9, 93-100.
6. 佐々井真知（2007）口頭報告「遺言書にみる 15-16 世紀ロンドンのシルクウーマン」 日本西洋史学会第 57 回大会、新潟；Machi Sasai (2008) presentation “The Connections of Silkwomen in Medieval London” International Medieval Congress, Leeds, United Kingdom.
7. Machi Sasai (2009) “The Cutlers’ Craft in Fifteenth-Century London: Corporate and Personal Charity” MA dissertation, Royal Holloway, University of London; 佐々井真知（2010）口頭報告「15 世紀ロンドンの刃物職人―相互扶助に注目して―」 第 2 回西洋中世学会、名古屋。

参考文献

Thrupp, Sylvia L. (1976) *The Merchant Class of Medieval London, 1300-1500*, 2nd edn, Ann Arbor: University of Michigan Press.

Welch, Charles (1916-1923) *History of the Cutlers’ Company of London: And of the Minor Cutlery Crafts: With Biographical Notices of Early London Cutlers*, 2 vols, London: Printed Privately for the Cutlers’ Company, I: *From Early Times to the Year 1500*, II: *From 1500 to Modern Times*.

ささい　まち／お茶の水女子大学大学院　人間文化研究科　比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

佐々井さんは、博士課程論文で、中世後期の都市ロンドンにおける、商工業者が取り結んださまざまな社会的結びつきを明らかにすることで、中世都市社会の特質を浮き彫りにしようと考えています。人と人とのつながりは人間社会に普遍的に存在しているものですが、そのありかたは時代や地域によってさまざまに異なっていて、それぞれの時代・地域の特徴を形作るものとなっていると考えられるからです。西洋中世社会の研究においては、これまで都市商工業者の政治・経済的結びつきについて関心が集まり、多くのことが明らかにされましたが、宗教的な結びつきや地域に基づく相互扶助など、都市民による他の結びつきについてはまだあまり明らかになっていません。佐々井さんは、同業者組合を持つ刃物職人と、同業者組合を持たなかった絹加工業女性職人に着目し、ギルド史料だけでなく裁判関係文書や遺言書史料などさまざまな史料を用いて比較議論することで史料の間隙を埋め、全体像を浮かび上がらせようとしています。今回の学生海外調査研究による支援を得て、佐々井さんは、ロンドン大学に 2009 年に提出した修士論文で扱った刃物職人ギルドの史料を補完する、その他の史料調査を行うことができました。これにより、既に刊行されている絹加工業女性職人（シルクウーマン）に関する佐々井さんの研究と比較考察を行うために必須の史料調査が可能となったのは誠に喜ばしいことであり、博士課程論文の核心部分の研究が可能となりました。また、海外調査の折りに、欧米の第一線研究者と交流し、中近世研究のメジャーな雑誌である Journal of Medieval and Early Modern Studies に論文掲載が決定したことは大きな成果であり、視点のユニークさが世界に認められた証であると考えます。

新井　由紀夫（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　教授）

学生海外調査研究		
バレエ振付・演出家小牧正英の背景に関する研究～ハルビン居留時代～		
糟谷　里美		比較社会文化学専攻
期間	2010 年 8 月 19 日～2010 年 8 月 22 日	
場所	中華人民共和国　黒龍江省　ハルビン市	
施設	モデルン・ホテル、ソフィスカヤ寺院、ハルビン市建築芸術館分館	

内容報告

1. 海外調査研究の必然性

学位論文における研究テーマは、「日本バレエ史上、職能集団形成において小牧正英が果たした役割に関する研究」である。小牧正英（1911 - 2006）は、戦前ハルビンにおいてロシアのバレエ教育を受け、＜上海バレエ・ルッス＞で第一舞踊手として活躍した後、戦後日本にバレエを持ち帰り、多くの全幕作品を紹介し、その活動を通じて日本全国にバレエを普及した人物である。筆者はこれまで、小牧の戦後の活動に焦点をあて、その芸術活動を概観してきた（糟谷、2009）が、それだけでは小牧の活動の真髄に触れることにはならず、戦前のハルビンや上海での活動をつぶさに検討していくことが必須の課題として残された。そこで筆者は戦前の小牧の活動に関する資料収集を行なったが、日本国内に存在する資料の一部は、その信憑性が十分であるとは言えず、現地でのさらなる調査が必要となった。

2. 海外調査研究の目的と意義

本調査は、戦前小牧が受けたハルビンでのバレエ教育に着目し、国内では入手困難な資料収集を図ることを目的とした。

筆者は昨年度より小牧の戦前の活動について調査研究をすすめてきた。その結果、どの先行研究も小牧正英のハルビン居留時代については、小牧の著作に依拠した記述となっており、その信憑性が不十分であることがわかった。小牧の著書には、＜ハルビン音楽バレエ学校＞の当時のレッスンの様子や恩師に関することなどが記されている。しかし、1930 年代、バレエ学校がどのような環境の中で運営されていたか、また小牧がどのような環境のもとでバレエを学んだかについてはほとんど言及されていない。したがって、現地調査においてこれらに関する資料を収集し、国内の＜東京小牧バレエ団＞において収集された新聞記事や写真等を照らし合わせながら、小牧のハルビン居留時代の様相について明らかにしていくことが課題である。これにより、これまで明らかにされてこなかったプロのダンサーになる以前の小牧の活動を辿るという点に意義を有すると考える。

3. 海外調査研究の成果

本稿では、事前調査の結果を踏まえながら、現地調査で得られた成果を報告する。

3.1 モデルン劇場とモデルン・ホテル

“モデルン劇場”という名は、小牧の著作や記事の中に多数出現する。小牧はバレエ学校時代に「レオ・ドノーレ（ЛЕО Д’ОНОРЭ）」という芸名でこの劇場の舞台に立ち、卒業公演もこの劇場で行なっていたことは事前調査で明らかであった。（小牧、1975、p. 32、pp. 154-155/小牧、松島、1979、p. 96/山川、1995、pp. 87-88）したがって、この劇場が当時どのようなものであったかを知ることは、小牧のハルビンでの活動の一端を知る上で重要であると考え、現地調査を行なった。

中国黒龍江省のハルビンは、帝政ロシアによって、東清鉄道（岩野、1999、p. 27）の敷設や教会の設立を中心として、近代都市へと大きな変貌を遂げ、1924（大正 13 年）には中国東北部のハルビンのロシア人は、約 10 万人に達していたという。（函館日ロ交流史研究会、2002、p. 2）帝政ロシアは、ハルビンにヨーロッパ風文化をそのまま移植するため、アールヌーボー様式、バロック様式、ビザンチン様式などの欧風建築物を次々と建設し、オペラやバレエの上演や舞踏会などのできるホール等も設けた。その 1 つが“モデルン劇場”である。

1930 年代、「時代の流れで観客を映画に奪われ街には常演劇場はなくなった」（毎日新聞社、1980、p. 123）というものの、小牧によれば、モデルン劇場はホテルやレストランも備え、ハルビンの社交の中心として、オペラやバレエ、演奏会などを催していた。（小牧、1975、p. 155）また、モデルン劇場は、“ロシア

キネマ館”という映画館も備えており、1930 年代かなりの数の映画を上映していたという。（長谷川、1936、p. 234）

写真１（中央大街）0016

＜モデルン・ホテルのある中央大街＞

本調査で訪れた“モデルン・ホテル（馬迭爾賓館）”は、1906 年（明治 39 年）ユダヤ系ロシア人によって開業されたものである。ハルビン駅の北側に位置する大通り“中央大街（旧キタイスカヤ）”のほぼ中央にあり、アールヌーボー様式の建物である。

事前調査では、モデルン・ホテルとモデルン劇場が同じ建物であることを示す文献は見当たらなかった。しかし、現存するモデルン・ホテルと“モデルン劇場”と記された 1930 年代の写真（毎日新聞社、1980、p. 123）とを照合したところ一致が認められたため、同一の建物であることが判明した。モデルン劇場は、当時“ハルビンの銀座”と称せられ商業中心地となっていたキタイスカヤ（長谷川、1936、p. 126）という大通りにあったことになる。現在劇場は存在せず、宿泊施設とレストランをもつ建物となっている。

写真２（モデルン・ホテル）0026

＜モデルン・ホテル＞

ホテル内にはモデルン劇場で踊ったバレリーナの写真が展示されていた。そこに記されていた文言には、「バレエ界の新しいスター、ニーナ・コゼヴニコワ（注 1）は、ハルビン時代モデルン・ホテルで踊り、その後 1940 年代上海で大いに活躍した」（注 2）とあった。ハルビン市内には、1930 年代のバレエに関する写真資料が 7 枚残されていたが、そのうち個人名で紹介されているダンサーは、ニーナ・コゼヴニコワとグラッフゾフ（Graffzoff）の 2 名であった。ニーナ・コゼヴニコワがハルビンにおいて著名なバレリーナであったことが推察される。

ニーナ・コゼヴニコワは、小牧のバレエ学校時代の同級生で、小牧の＜上海バレエ・ルッス＞招聘に尽力した人物であった。（小牧、1977、p. 31）モデルン・ホテル所蔵のニーナ・コゼヴニコワの写真説明には、戦後オーストラリアに移住したことが記されている。（注 3）＜東京小牧バレエ団＞団長の菊池宗氏（インタビュー、2010 年 4 月）によれば、小牧は＜上海バレエ・ルッス＞解散（1945）後、オーストラリアへの渡航を考えていた。ニーナ・コゼヴニコワも含め＜上海バレエ・ルッス＞時代の仲間は、戦後オーストラリアに移り住んだものも数名おり（小牧、1984、p. 62）、さらに小牧は戦後の日本への引き揚げを「旅行のつもりで帰ってきた」（小牧、1979、p. 124）と述べていることから、小牧のオーストラリアへの移住計画の可能性が示唆される。

3.2 1930 年代のロシア人社会と文化

山川によれば、小牧が通っていたバレエ学校は、ロシア人のための学校であった。（山川、1995、p. 76）また小牧は、バレエ学校時代ロシア人のアレクサンドラル・シャモフスキィの家に寄宿していた。（小牧、1979、p. 8）このことから、小牧は日本の管轄化にあったハルビンにおいて、ロシア人社会の中で生活をしていたことは明らかであり、1900 年（明治 33 年）から 1930 年代のロシア人の社会と文化を調査することは、小牧がどのような環境の中でバレエを学んだかを知る手がかりとなるだろう。

戦後ロシア人の撤退したハルビンは、1965 年（昭和 40 年）から 1975 年（昭和 50 年）に起こった文化大革命によって、戦前の遺産（ハルビン駅舎や中央寺院等）が取り壊されるなど大打撃を受けた。辛うじて残されてきた古い建造物は、現在重要文化財として登録がすすめられている。しかし町並みは一部の地域を除いて、高層ビル建築、幹線道路敷設など都市計画がかなりすすめられていたため、当時の様子を現場で知ることは難しいと考えられた。したがって、本調査では 1900 年（明治 33 年）から戦前までのロシア人の様子を伝える写真を多く保存している 2 つの施設、すなわちソフィスカヤ寺院（ハルビン市芸術建築館）およびハルビン市芸術建築館分館（旧ユダヤ教礼拝堂）を訪れ、当時の様子を調査した。

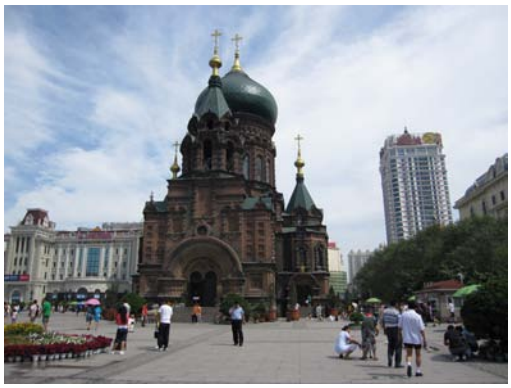
3.2.1　白系ロシア人の社会

ロシア革命後、1920 年（大正 9 年）にシベリアの白系（注 4）政府が倒れたため、数万人の白系ロシア人が満州に移住し、それ以降この地は「世界で唯一、白系ロシア人が政治的・経済的な基盤を保っていた。」（岩野、1999、pp. 34-35）

1907 年（明治 40 年）に創設されたロシア正教会の“ソフィスカヤ寺院”は、ビザンチン様式建築のハルビンを代表する欧風建築物で、現在ハルビン市芸術建築館となっている。ここには、ハルビンでのロシア人の姿を伝える古い写真が多く展示されていた。

白系ロシア人の生活は、帝政ロシア時代の営みを保守しており、白系ロシア人専用の小学校や中学校を持ち（長谷川、1936、p. 282）、音楽学校等も帝政ロシア時代のシステムを採用していた。（函館日ロ交流史研究会、2002、p. 4）彼らは主に新市街（ノーウィゴーロド）（注 5）というハルビン駅の南側の高台に住んでいた。この地区は、サポール（中央寺院）(注 6)というロシア人が最も信仰したハルビン最古の教会を中心につくられた街で、当時中国人の居住が禁じられ、通行さえも制限されていた。「道路建物共に整然とし緑樹は美しく繁り、哈爾濱市中最も整った市街」（長谷川、1936、p. 125）であり、領事館等の官公庁と住宅街が共存していた。展示資料からは、彼らが松花江（スンガリー）という河の中洲である“太陽島”に別荘をもち（注 7）、春夏秋冬の余暇を楽しんでいた様子がうかがえた。

写真 3（ソフィスカヤ寺院）0136



＜ソフィスカヤ寺院（ハルビン市建築芸術館）＞

3.2.2　ユダヤ系ロシア人の社会

帝政ロシアの領土拡大政策によって、ロシア人となったユダヤ人（以下ユダヤ系ロシア人と記す）は、ユダヤ教の弾圧や「ポグロム」と呼ばれる組織的な略奪や虐殺などから逃れて 1882 年（明治 15 年）から 1914 年（大正 3 年）にかけて、200 万人がアメリカに移住した。そして、「19 世紀末に清国から満州を獲得したロシア皇帝ニコライ二世は、ユダヤ人をヨーロッパから追放すると同時に、満州を西欧化することをもくろんで、『満州へのユダヤ人移住者には信教の自由を許す』と布告」（岩野、1999、p. 27）したため、1 万人以上のユダヤ系ロシア人がハルビンを中心とする満州に移り住んだ。ハルビンの外国人商店の 8 割ほどがユダヤ系ロシア人による経営であったとする言説もあり（岩野、1999、p. 28）、戦前のハルビン経済は、彼らによって支えられていたといえる。

現在ハルビン市建築芸術館分館となっている旧ユダヤ教礼拝堂（1918 年設立）には、ハルビンにおけるユダヤ系ロシア人社会の足跡を伝える多くの写真が残されている。これらの資料から、ユダヤ系ロシア人が商業的な成功のほか、学校や病院、養老院の設立・運営等を中心とする教育・慈善活動にも力を入れていたことがうかがえる。また展示資料からは、子供の音楽教育に強く関心がもたれ、特にピアノ教育が多く取り入れられていたこともわかった。1920 年（大正 9 年）には、ハルビン第一音楽学校がユダヤ系ロシア人によって設立され、音楽家になるための専門教育も本格的に行なうようになった。岩野は、「ロシアのユダヤ人にとって、音楽家になることは、〝自由への道〟につながっていたからである」（岩野、1999、p. 29）としている。

写真 4（ハルビン市建築芸術館分館）0088

＜ハルビン市建築芸術館分館＞

3.2.3　1930 年代のロシア人の文化

1917 年（大正 6 年）に起こったロシア革命は、革命を逃れた多くの芸術家を流出させ、ハルビンにも白系ロシア人とユダヤ系ロシア人を中心とする一流の芸術家たちが押し寄せた。1920 年代には、「東支倶楽部」（注 8）によって、オーケストラやオペラ、バレエなどが数多く上演され、ハルビンの音楽文化が最高潮に達していた。（岩野、1999、p. 35）1930 年代、日本が中国東北部を掌握し、ソ連国籍取得者の帰還がはじまり、ハルビンにおけるロシア人人口は減少した。ルスナク・スヴェトラーナによると、終戦時

までハルビンには、22 のロシア正教会があり、医学や技術関係の高等教育機関は 13、農業などの研究所が 9、「帝政ロシア時代の教育方式に則った音楽院（3 校）、バレエ学校（2 校）、そして、市民が誇る『ハルビン交響楽団』（団員約 60 人）があった」（函館日ロ交流史研究会、2002、p. 4）という。したがって、1930 年代、社会情勢が変化しつつも、ロシア人の社会と文化は継続していたと考えられる。

ソフィスカヤ寺院には、3 つの音楽学校（1921 年、1924 年、1927 年に設立）に関する資料が展示されており、ロシア人の音楽教育に対する熱心さがうかがえる。

小牧はハルビンで生活をはじめてすぐにロシア人にピアノとロシア語を学んでいる。（山川、1995、pp. 73-74）長谷川によれば、「元來ロシア人は、音樂好きな人間である爲、ハルビンには立派な音樂家が相當に居た」（長谷川、1936、p. 290）という。小牧が個人教師にピアノを学べたのも、多くの音楽家がハルビンにいたことと、ロシア人の芸術教育の意識の高さゆえだったと思われる。

3.3 ハルビン音楽バレエ学校

ソフィスカヤ寺院には、1930 年代のバレエ学校の様子を伝える写真が 1 枚だけ展示されていた。その写真には、「1930 年代はじめ、アンドレーヴァによってハルビンに創立されたバレエ学校では、著名なバレリーナを養成した」（注 9）と付記されていた。小牧によれば、彼の通っていたバレエ学校には、キャトコフスカヤ担当のクラスとアンドレーヴァ担当のクラスがあった。（小牧、1975、p. 31）このことから、この写真のバレエ学校は、小牧の通っていた「ハルビン音楽バレエ学校」であることが明らかである。

また、この写真が前述のルスナク・スヴェトラーナの言説中にある 3 つの音楽院と考えられる音楽学校に関する写真資料とともに展示されていたことから、アンドレーヴァのバレエ学校が同言説のバレエ学校のうちの 1 つで、帝政ロシア時代のシステムの学校であったことが推察される。長谷川の調査では、当時の学校は満州人、日本人、ソ連人、白系ロシア人の学校に区分されていた。（長谷川、1936、p. 282）したがって、このバレエ学校は、山川の述べるとおり、ロシア人ための学校であったことがわかる。

また小牧によれば＜ハルビン音楽バレエ学校＞は、新市街（南崗)にあった。（小牧、松島、1979、p. 95）新市街は、前述のとおりロシア人が生活した街である。小牧が生活も学校もロシア人に囲まれた環境の中で営んできたことから、小牧がハルビンにおいて受容したことは、日本人にとっての外来の文化である単品としてのバレエではなく、ロシア人のもつ文化の一部としてのバレエ、言い換えれば帝政ロシア時代の人々の生活そのものであったといえる。

4. 今後の展望

今回の海外調査では、小牧のハルビン居留時代の様相を探るため、①モデルン劇場　②ソフィスカヤ寺院　③ハルビン市建築芸術館分館において調査を行なった。その結果、これまで不明確だったモデルン劇場について、＜ハルビン音楽バレエ学校＞について、さらに小牧の生活環境についての情報が得られた。これらのことをその後に展開される小牧の上海での活動にどうのように結びつけ考察を深めていくかが今後の課題である。

本調査で得られた知見は、小牧の戦前の中国での活動としてまとめ、戦後の小牧の芸術活動との結びつきの中で、どのような意味の礎となっているかを考察した上で、テーマ「小牧正英・バレエマスターへの序章」として『舞踊学』（舞踊学会）に投稿する予定である。

戦前社会情勢が複雑な時代にあって、あえて外国人社会の中に身を置きながら、外国文化であるバレエを享受していった小牧正英は、現代にも通じるグローバルな視点をもつ数少ない日本人であり、彼の戦後の芸術活動にその視座がどのように反映されていくかを見ていくことは、現代の国際的学際的な研究のあり方にも示唆を与えるだろう。

注

1. 日本語表記は、小牧の著作では「ニーナ・コゼヴニコワ」となっている。(『ペトルウシュカの独白』1975、p.30) 露語表記は、“Нинθй Кожевниковой”あるいは“Нинθй Кожевникова”などがみられる。（1943 年の上海の露語新聞）また、上海の英字新聞にみられる英語表記は、“Nina Kojevnikova” であるが、写真に付記されたローマ字は“Nina Crofnikova”とあった。しかし、これは中国語表記「克热芙尼科娃」を発音してこのように表記されていると思われ、英字新聞の表記が正しいと考える。
2. 原文（英語）は、次のとおりである。“The new ballet star Nina Crofnikova in Harbin performed in Modern Hotel, who was employed by Shanghai in 1940s and was popular for a period of time, and then migrated to Australia.”
3. 注 2 の原文参照。
4. 1917 年（大正 6 年）のロシア革命の際に、革命を支援する「赤系」に対し、皇帝を支援する反革命派を「白系」といった。
5. またの名を「南崗(ﾅﾝｶﾞﾝ)」という。
6. この教会は、文化大革命（1965－1975）によって取り壊され、現存していない。
7. 1957 年（昭和 32 年）の松花江の氾濫による洪水で、ほとんどの別荘が流されてしまい、現在ではハルビン最大の公園“”太陽島公園”となっている。
8. 1910 年（明治 43 年）に建設された「ハルビン東清倶楽部」は、オペラやコンサート、舞踏会のできる大ホールと、図書館やレストラン、バー、ビリヤード室などを備

えた鉄道従業員のための慰安施設で、1920 年代には「東支倶楽部」と改名されている。（岩野、1999、pp.23-27）

9. 原文（中国語）は、次のとおりである。「三十年代初、哈尔濱創 办了安徳列耶娃芭蕾舞学校、培養了大批著名的芭蕾舞演員。」また、著名なバレリーナとは、ニーナ・コゼブニコワであると推察される。

参考文献

岩野裕一(1999)『王道楽土の交響楽』音楽之友社
糟谷里美(2009)「戦後の日本バレエ史における小牧正英の位置付けに関する考察　―戦後から昭和末期を中心に―」『昭和音楽大学研究紀要』28、pp.63-71
小牧正英(1977)『バレエと私の戦後史』毎日新聞社
小牧正英(1979)『ペトルウシュカの独白』三恵書房
小牧正英、松島正幸(1979)「小牧正英を囲繞するもの　連続対談 2　おゝ、ハルピン」『The TES Graphic Ballet & Dance』3-4・5、テスカルチャーセンター出版部、pp.94-97
小牧正英(1984)『舞踊家の汗の中から　晴れた空に･･･』未来社
函館日ロ交流史研究会(2002)『会報』20
長谷川治編集(1936)『ＸＡＰＢＩＨ 1936』哈爾濱印刷所出版部
毎日新聞社(1980)『別冊　一億人の昭和史　日本植民地史（4）続・満州』
山川三太(1995)『白鳥の湖伝説』無明舎

かすや　さとみ／お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

糟谷は、バレエ振付・演出家小牧正英を取り上げ、日本のバレエ界の職能集団の形成において小牧正英が果たした役割に関する研究を進めている。糟谷は、小牧の戦後の活動に焦点をあて、振り付け家・演出家・ダンサーとしての小牧の芸術活動をみることによって、小牧が日本のバレエ界に如何に職能集団を形成しようとしたのか、そしてそのことが現在のバレエ界にどのような影響をもたらしているのかを探ってきた。しかし、そこでは、小牧がバレエを始め、ダンサーとして頭角を現した戦前のハルビン及び上海での活動については小牧に関する文献からの引用に止まっていた。その後、小牧の関係者から貴重な資料の提供を受け、それらの資料につぶさに当たる中で、とりわけ小牧バレエの原点となった戦前のハルビンでの活動を現地調査することが必須の課題として浮かび上がり、今回の学生海外調査研究の助成を得て、ハルビンでの調査を行うこととなった。今回の調査であたることのできた当時の関係者の写真や説明文から日本国内に存在する文献から得た情報への疑問が解かれ、ダンサーであった小牧がダンサーにとどまらず、日本のバレエ界に職能集団の形成をという志を持つにいたる過程への解明に繋がる収穫を得てきたと評価できる。派遣学生は今回の海外調査研究の機会を得て、学位論文に向けての成果をあげたものと認められる。

柴　眞理子（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　教授）

学生海外調査研究		
近代朝鮮の女性教育に関する資料調査―女子高等普通学校の記録を中心に		
金　夏娟		比較社会文化学専攻
期間	2010 年 11 月 17 日～2010 年 11 月 30 日	
場所	韓国（ソウル・釜山）	
施設	淑明女子大学図書館、梨花女子大学図書館、国会図書館、日新女学校記念館など	

内容報告

1. 調査の目的

今回の調査は、近代朝鮮における女性の中等教育の場であった「女子高等普通学校」の歴史を辿り、当時の女性教育の状況と教育内容、そして女学校卒業後の社会進出などに関する資料を調査することを目的とする。

近代化とともに女性教育機関が設立され、それまで男性に限られていた教育の機会が、女性にも与えられるようになった。近代女性教育は、男性中心社会の差別的性規範とそれを基盤とする政府の教育政策から自由ではなかったが、男女間の接触を禁止し、女性の外出を制限する「内外法」が存在していた時代に、女性が家の外に出て教育を受けることができたその意味は大きい。『淑明 70 年史』(1976) をみると、女性の外出が徐々に自由になるのは 1900 年代に入ってからで、1907 年からは家から毎日通学する学生も現れたとの記録がある。

女学生たちは、学校卒業後には上級学校への進学や海外留学、または職業を持ち社会へと進出をしており、それらのことから、当時の学校が女性リーダーを創出する重要な場であったことは確かである。そのような女性教育機関の歴史は、現在に至るまで韓国の各女子大学、女子高校に繋がっている。

しかし、その記録は日本で閲覧することが困難であり、そして同じ学校の資料であっても発行年代により、掲載されている資料の分量と内容に違いがある場合があるので、現地にて各記録を直接に確かめる必要があった。そこで、今回の調査では、各施設ならびに必要に応じて当該女子普通学校の図書館を訪問し、各学校の歴史、同窓会誌、卒業生による回顧録などを調査した。

資料収集の対象においては、限られた調査時間のため、近代朝鮮で最初に女学校が設立された 1886 年から、植民地となった後朝鮮総督府により第 2 次教育令が発布された 1920 年代までに限定した。貞信女学校 (1887、ソウル) や 順成女学校 (1899、ソウル)、崇義女学校（1903、平壌)、進誠女学校（1904、元山）など、初期女性教育の歴史のなかで重要な位置を占める学校が多数あったが、今回の調査では、所在地を韓国内に限定したうえ、女子高等普通学校を中心に行った。

調査の対象とした重要女学校及び植民地時代の女子高等普通学校の設立状況は次のようである。

「私立」
- 梨花学堂（1886、ソウル）→ 梨花女高普（1918）
- 日新女学校 (1895、釜山) → 東萊日新女高普 (1925、高等科のみ東 萊に移転)
- 培花学堂（1898、ソウル）→ 培花女高普（1925）
- 好壽敦女学校 (1899、開城) → 好壽敦女高普 (1918、韓国戦争後大田に移転)
- 明新女学校（1906、ソウル）→ 淑明女高普（1911）
- 進明女学校（1906、ソウル）→ 進明女高普（1912）

「官公立」
- 漢城高等女学校（1908、ソウル）→ 京城女高普（1911）
- 全州女高普（1926、全州）
- 大邱女高普（1926、大邱）
- 釜山女高普（1927、釜山）

2. 研究テーマとの関連性

学位論文では、日韓の近代女性作家の作品分析を通して、時代や制度に対する問題意識を持ち、社会秩序に向かって戦う近代女性知識人像について考察したいと考えている。

その前段階として、当時の女性教育の状況を把握する必要がある。日本と朝鮮の近代女性教育の状況について比較・検討することにより、女性知識人に向けられた眼差しの変貌を明らかにする一方、近代的な自己発展のための肯定的な側面と、国家政策による抑圧の問題という、教育のもつ両面性について

も考察する必要があると考えられる。

日韓両国の近代化していく過程において、女性問題は重要な位置を占める。この問題について考える際に、とりわけ強調したいのが女性教育の問題である。女性作家たちは小説で教育の重要性をとなえており、近代的な自己発展のためには教育が必要であることを明らかにしている。教育とは、個人として認められなかった女性が、一人の主体的な人間として生きることを可能にする通路でもあった。

しかし、そのような肯定的な面がある一方、国家から強要される女性教育の側面も無視することはできない。そこで、今回の調査では、近代朝鮮の女子高等普通学校に関する記録を検討し、女性たちがどのような状況の中で、どのような教育を受けていたのかを調べた。そして、女学生たちの卒業後の進路に関する資料を集める一方、朝鮮総督府の教育政策についても考察することをこころみた。具体的には、朝鮮の近代女性教育の歴史、女性教育政策、各学校の学制、学校卒業生の社会進出状況などを中心に調査したが、ここでは1920年代までの女性教育をめぐる状況と、その女性教育の中心にあった「女子高等普通学校」に関する政策について簡略に述べたいと考える。

3. 近代朝鮮における女性教育と「女子高等普通学校」

韓国の女学校教育の歴史は1880年代から始まっている。しかし女性の中等教育が制度的に定着して、女学生の数が増え始めるのは、1920 年代の半ばに入ってからとみられる。

それ以前までの女学校の設立は、国ではなく、民間による女性教育運動と、アメリカの宣教師たちによって行われていた。

1886年梨花学堂が設立されて以来、1900年代までに十数校を超える基督教系女学校と、民間の私立女学校が設立された。1900 年代の大韓帝国政府は、女性中等教育機関の設立に消極的だったため、1908 年にようやく「高等女学校領」により最初の官公立女学校である漢城高等女学校が設立された。ところが、植民地となった後には、日本帝国が民間の学校を「各種学校」と規定し、卒業生の学歴と資格を公式的に認めなかったため、私学は大きく衰退した。1911年、「第 1 次朝鮮教育令」により教育制度が整備され、女性中等教育期間の設立も制限的に認められることになったが、朝鮮総督府は、高普増設の要求を抑圧し、教育の機会を縮小したうえ、朝鮮の歴史や地理などの教科の代わりに、日本語の教育を強化した。1922年「第2次朝鮮教育令」をきっかけに教科は調節されるが、高普増設は、事実上「一道一校」の原則によって、私立学校の設立を抑制し、官公立中心の高普体制を設立する過程によって行われた。

女子高等普通学校は、1925年まで公立は当時のソウルである京城と平壌の二ヶ所のみであった。日本帝国が認めた公式的な女性中等教育機関は、1910 年代に女子高等普通学校に改編した 8 校の私立女学校と 2 校の公立女高普が全部で、男子高普が一道に一校ずつ全部設立された後の1926年から公立女高普が各地に増設されはじめた。

それでは女学校と女子高等普通学校をめぐる教育政策についてみてみよう。

3.1「高等女学校令」

「高等女学校令」は1908年4月2日勅令第22号として発表されたもので、新教育が導入されて以来初めて制定された、女性教育に関する法令である。官公立と私立の区別と、高等女学校の編成と授業の年限、学令などが規定されている。

基督教によって設立された初期の女学校は、男女平等主義による西洋式の教育をモデルにしていたが、それに対して「高等女学校令」の教育精神は、日本の良妻賢母主義をモデルにしたものであった。この「高等女学校令」は、「女子に必須な高等普通教育」を教えることを目的としていたが、それは女性が家庭のなかで、母として模範的な家庭教育をすることができるようにするためであった。この法令を契機として、同年最初の官公立女学校である漢城高等女学校が設立された。

そしてその施行の細部が記載された「高等女学校令施行規則」（学部令第9号）では、授業年限及び休業日、学科課程、授業時間、成績、卒業、定員、賞罰、職員など、学校運営と教育課程が細かく規定されている。その内容の一部を紹介すると次のようである。

・授業年限は3年以内とする。
・1学級の人数は50人以下とする。
・教科書を決める時は、学校長が学年初から 2 ヶ月前に学部大臣の認可を受けなければならない。
・学科目には修身（道徳倫理）、国語、漢文、日本語、歴史、地理、算術、理科、 図画、家事、手芸、音楽、体操などが含まれる。
・学年は4月1日を始めとし、翌年3月31日までとする。
・学期は3学期にする。
・授業日数は毎学年200日以上とする。

3.2「第1次朝鮮教育令」と「女子高等普通学校規則」

3.2.1「第一次朝鮮教育令」

日本帝国により植民地とされた後、朝鮮総督府は朝鮮に滞在している日本人の教育のための学制とは異なる、朝鮮人だけに適用される差別的な学制を公表した。1911年8月22日に勅令229号に公布され、同年11月1日から施行された「第1次朝鮮教育令」がそれである。日本人のための学制と比較してみると、教育年限が初等課程では 2 年、中等課程では 1 年少ない。

この朝鮮教育令の中で、女子高等普通学校と関連

している条項は第 15 条から第 19 条までである。大韓帝国時代の「高等女学校令」と比べると、「高等女学校」が「女子高等普通学校」と名称が変わり、教育の目的に「国民たる性格を陶冶する」という内容が添加されている。第 15 条には、女子高等普通学校の目的として「女子に高等の普通教育をする」とともに、「女性の婦徳を養い、国民たる性格を陶冶し、その生活に有用な知識機能を教える」と明示されているのである。

3.2.2「女子高等普通学校規則」

『淑明 90 年』(1996) を参照すると、この朝鮮教育令と、朝鮮総督府令第 112 号として発表された「女子高等普通学校規」により、1911 年 11 月 1 日から私立淑明高等女学校は私立淑明女子高等普通学校に改称され、芸科は 4 年制の淑明普通学校に改編、併設された。

「女子高等普通学校規則」は大韓帝国末期の「高等女学校令施行規則」と比べ、学級定員(50 人)、学年(4 月 1 日から翌年 3 月 31 日まで)、学期(3 学期)、年間授業日数(200 日)などは同じだが、教科に一部変更があり、校則と課程が添加されている。次の表は 1911 年当時の女子高等普通学校の教科課程と週間授業表である。

「表 1」女子高等普通学校教科課程及び毎週教授授業時数表(1911-1921)

과정 / 교과목	제 1 학 년		제 2 학 년		제 3 학 년	
	시수	과 정	시수	과 정	시수	과 정
修 身	1	修身의要旨	1	左 同	2	左 同
國語 (日語)	6	讀方, 解釋, 會話, 書取, 作文	6	左 同	6	左 同
朝鮮語 及 漢文	2	讀方, 解釋, 書取, 作文	2	左 同	2	左 同
歷 史	2	本邦 歷史	1	左 同		
地 理		本邦 地理			2	本邦에 관계 있는 外國地理
算 術	2	整數, 小數	2	諸等數,分數,珠算	2	比例, 步算算, 求積, 珠算
理 科	2	植 物	4	動物,衛生 人體生理	4	物理 及 化學(鑛物을 合)
家 事				養老, 衣食住		育兒 看護, 割, 烹 等
習 字	2	楷書, 行書	1	左 同		
圖 畫	1	自 在 畫	1	左 同	1	左 同
裁縫 及 手藝	10	運針法, 普通衣類의 縫法·裁法·繕法 編物, 造花, 刺繍	10	左 同	10	左同, 재봉기계 사용법 조사, 염직

資料:『淑明 90 年史』(1996)

外見上には教科目に大韓帝国の時とあまり違いがないようにみえるが、内容では大きな変化があった。国権の喪失とともに、日本語が「国語」になっており、歴史と地理も「本邦」、つまり日本のものを学ぶことになったのである。そして、全ての科目の授業用語が日本語に変わった。

3.3「第 2 次朝鮮教育令」と「女子高等普通学校規定」

3.3.1「第 2 次朝鮮教育令」

日本帝国による抑圧に対抗して行われた 3·1 独立運動以来、朝鮮総督府はいわゆる「文化政治」を標榜した。その一環として、教育分野においても措置が行われており、それによって 1919 年 12 月高等普通学校と女子高等普通学校の規則が改定され、教科の一部が変更された。そのなか、女子高等普通学校では、従来にはなかった外国語の科目、つまり「英語」を随意科目に指定し、その代わりに実業科目の「裁縫及び手芸」の時間を減らすことができるようになった。そして「算術」という名称を「数学」に変更し、教育レベルが高くなった。

朝鮮総督府は、このような措置のうえ、学制の改革をもたらすため、1921 年 1 月朝鮮教育調査委員会を設置し、朝鮮総督府の試案を審議させた。この委員会の決議をもとにして制定されたのが、1922 年 2 月 4 日公布され、4 月 1 日から施行された第 2 次朝鮮教育令である。

新しく制定された教育制度の特徴は次のようである。まず、普通学校の授業年限を 4 年から 6 年に、高等学校は 4 年から 5 年に、女子高等普通学校は 3 年から 4 年に延長し、日本の小学校、中学校、高等女学校の授業年限及び学課課程と同一とした。それまでは教育年限が足りないため、日本に留学しても、もう 1 年学校に通わなければならなかった不便があったが、授業年限の延長により、直接に上級学校に進学する資格を持つことができた。そして、新しく大学に関する規定が置かれ、また師範学校の教育も認められるようになった。

3.3.2「女子高等普通学校規定」

1922 年 2 月 17 日、朝鮮総督府令第 14 号として発表された「女子高等普通学校規定」のなかで学科目に関する項目をみると、「朝鮮語及び漢文」から「朝鮮語」が分離され、正規の必須科目として独立しており、その一方、「漢文」は加設科目(選択科目)になっている。そして選択科目として認められた英語が正規の必須科目、または必須選択科目として格上げされた。一方、「裁縫及び手芸」はそれぞれ裁縫と手芸と分離され、手芸は選択科目となった。他にも「教育」、「法制及び経済及び実業」なども選択科目にすることができるようになるなど、学科目を選択する学校の裁量の範囲が広まった。

それにより、授業時間の変化が起きており、1911 年に全体授業時間のなかで 30%を上回る高い割合を占めていた裁縫科目は、1922 年には 10%台に大きく減少した。一方、1911 年には設置されなかった外国語科目は 1922 年には全体の 10%までとなっている。

教育の程度も日本人学生が通う「高等女学校」と

同じレベルまで高くなっており、従来の女子高等普通学校は、普通学校 4 年卒業生を受け入れ、3 年の過程を教育していたが、新教育令により、普通学校 6 年卒業生を入学させ、4 年の過程を教育させるようになった。

この第 2 次朝鮮教育令と女子高等普通学校規定は、戦時体制の強化と「内鮮一体」といった同和政策のもとで改正された、第 3 次朝鮮教育令（1938 年 3 月 3 日～1943 年 4 月 1 日）が公布されるまで続いた。

4. 近代朝鮮の女性リーダーと「女子高等普通学校」

近代女性教育の歴史を辿ってみると、女性の教育機会拡張を主張する側と、それを抑圧しようとする男性中心社会との間で、葛藤が続いていることがわかる。女性が良妻賢母として家庭で必要とされる教育を受ける以外に、学問を学ぶことは極めて困難なことであった。植民地時代末期まで、一般のほとんどの女性には教育の機会が与えられなかったため、女子高等普通学校は、極めて限定された学生たちのみ進学する教育機関であった。

しかし、差別的な性規範と消極的な女性教育政策にもかかわらず、中等教育を受ける女学生の数は 1920 年代以後徐々に増加しており、1915 年 378 名だった女子高等普通学校の学生数は、1920 年 709 名、1925 年 2022 名、1930 年 4554 名と増加した。

次は 1925 年 3 月雑誌『新女性』に「女学校卒業生の総数とその希望別目標」というタイトルで掲載された、当時の京城にあった女子高等普通学校の卒業生の進路希望をまとめたものである。（「表 2」）

当時の女性高等普通学校の学生総数が少ないことを勘案しても、卒業生の多くが上級学校への進学や海外留学を希望しており、また教師になるなど社会に進出していることの意味は大きいと考える。女子高等普通学校は、女性教育の中心的な場として、女性リーダーを創出するための大きな役割を果たしていたのである。

5. 今後の課題

今回の資料調査において、近代朝鮮の女子高等普通学校の状況と女性教育政策に関する資料を入手することができた。今後は、今回には資料収集に至らなかった 1930 年代以後の女子高等普通学校の資料も研究の視野に入れることにより、女子高等普通学校の教育が時代によってどのように変貌していくのかについて検討したいと考える。

そして、今回は教育政策と学制、学生の学校生活の記録に焦点を当てたため、女性教育において重要な役割を果たしていた女性教師の記録にまでは手が届かなかった。特に、当時多くの日本人教師が朝鮮で働いており、学生たちに多くな影響を及ぼしていたと考えるが、その資料収集までにはいたらなかった。今後の課題として、近代朝鮮の女性教育の場で、日本と朝鮮の女性教師がどのような役割を果たしていたかについて考察したいと考える。

参考文献

淑明女子大学校（1956）『淑明 50 年史』
淑明女子中高等学校（1976）『淑明 70 年史』
慶南女子高等学校（1987）『慶南女高 60 年史』
梨花女子大学校（1994）『梨花 100 年史』
淑明女子中高等学校（1996）『淑明 90 年史』
京畿女子高等学校同窓会（1998）『京畿女高 90 年』
慶北女子高等学校（1999）『慶北女高 70 年史』
全州女子高等学校同窓会（2006）『全州女子高等学校 80 年史』
慶南女子高等学校同窓会（2007）『慶南女高 80 年史』
淑明女子大学校（2008）『淑明 100 年』

きむ　はよん／お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻

「表 2」女学校卒業生総数とその希望別目標

校名	卒業生総数			希望別目標				
	1925 年	1924 年	前年と比較	上級学校	外国留学	教師	家庭、その他	計
進明女高普	28	14	増 14	15	日本 5	7	1	28
培花高等科	17	29	減 12	6	—	5	6	17
淑明女高普	38	38	—	15	日本 19	—	4	38
京城女高普	102	72	増 30	12	日本 5	81	4	102
梨花女高普	39	30	増 9	36	日本 3	—	—	39
貞信女高普	27	15	増 12	10	日本 2	6	9	27
同徳高等科	14	24	減 10	10	—	—	4	14

計	265	222	増 43	104	34	99	28	265

資料：『新女性』（1925・3）

指導教員によるコメント

当該研究調査は、近代朝鮮における女性文学研究の基盤調査として行われたものである。金夏娟氏は、日韓女性文学の比較研究を博士論文の中心テーマとしているが、近代女性表現の登場に、近代的女子教育制度の確立が大きく寄与していることは言うまでもない。近代日本におけるそれは、女子教育史ならびに女性文学、さらにジェンダー研究の視点からの多様な研究成果の積み重ねがある。一方、近代朝鮮におけるそれは、とくに日本在住の研究者にとっては情報が不足しており、第一次資料にアクセスする機会も皆無に等しい。今回、海外調査の機会を得て、各元女学校の第一次資料を渉猟できたことは、今後の氏の研究にとって貴重な成果である。

さらに期待されるのは、調査対象である日帝植民地時代における朝鮮女学校における、日本人女性教師の貢献についての考察である。本学の前身、東京女子高等師範学校をはじめとして、日本近代において女子教育に携わった女性たちの中には、殖民地朝鮮に赴任した者も少なくなかった。その大半は、朝鮮の日本人女学校に赴任したが、なかには、朝鮮人女学校に関わった者もいたはずである。そのような調査が展開されるなかで、植民地時代における、両国の女性同士の関係性の構築ならびにその限界が具体例とともに示されれば、これまでの日韓比較研究には完全に欠落していた、新しい視点を開拓することができるだろう。

女子教育の成立は両国の女性文学の登場・展開に必須の条件であった。と同時に、描かれる対象としての「女学生」をも誕生させた。語る主体として、また語られる客体として、教育を受けた女性達がどのように文学生成の現場に関わるのか、のみならず、領主国と植民地という支配関係の存在は、両国の女性文学の展開にどのような差異をもたらしているのか、今後の氏の研究の進展に、本調査が意味を持つであろうことを期待するものである。

菅　聡子（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　教授）

学生海外調査研究		
18 世紀のフランス・モードにおけるアンディエンヌの特徴及び受容に関する研究のための資料調査		
権　裕美		比較社会文化学専攻
期間	2010 年 10 月 19 日～2010 年 11 月 17 日	
場所	フランス　パリ、アルル、オランジュ	
施設	フランス国立図書館、装飾芸術美術館付属図書館、レアテュ美術館、オランジュ歴史芸術美術館	

1. 海外調査研究の必要性及び目的

「アンディエンヌ」indienne ということばについて、一般に「インド更紗」と説明されているが、アンディエンヌは、この意味のほかに、フランスで使用・製造されるあらゆる更紗を指して使われる。そればかりか、さらにそれで仕立てられたローブまでを指し、幅広い意味も持っている。また、アンディエンヌは誰によってどこで製造されたのか、どのような目的のために作られ、どのような貿易路を通して取引されたのかなどによってさまざまな名称が存在する。そのためアンディエンヌに関する名称を調べることは、欠かせない作業であると考えられる。

各種の辞典において、アンディエンヌがどのように定義されているのか、アンディエンヌの意味を確認しておく必要がある。1750 年刊行のジャク・サヴァリ・デ・ブリュスロンの『商業、博物学と技術の全辞典』[1]、1838 年に初版が刊行されたアンリ・アヴァールの著作『13 世紀から今日までの家財と装飾の辞典』[2]など、17 世紀から 20 世紀まで、時代を代表する辞典によれば、アンディエンヌの意味は次のようである。アンディエンヌとは、まず、インドで生産された、多様な色彩や図柄が手描き染め、またはプリントされた綿の布地を意味する。そして、この布地で作られた男性や女性のための部屋着も意味する。さらにインドの綿布を、ヨーロッパで模倣し製造した布地もアンディエンヌと呼ばれた。しかも 17 世紀の後半には、綿布以外の、薄い羊毛とリネンで模造したものもアンディエンヌは指した。

アンディエンヌのもつ多様な意味を、これまで筆者は 18 世紀のモード雑誌や、喜劇、手紙などを通して確認してきた。男女の部屋着や散歩に着用する軽い衣服に限らず、カーテンや椅子、寝台など調度品にまで幅広く使われたことが明らかになっている。また、アンディエンヌの広い意味と、多様な方面への使用はアンディエンヌの大流行の証であると思われる。

アンディエンヌに関して論じた 18 世紀の経済学者フォルボネーの著書[3]では、アフリカ地域との貿易のためのギニア向けのアンディエンヌがあることが述べられている。また、アンディエンヌに関する先行研究やポンパドゥール夫人の財産目録には、フランスの南部の都市オランジュで生産されたトワル・ドランジュという名のアンディエンヌが存在していることが記録されている。つまり、アンディエンヌには、貿易の対象、生産地によって異なる名称が存在するということである。また、ポンパドゥール夫人の財産目録に記録されているさまざまな綿布は、綿布に多彩な色彩で文様を染色したアンディエンヌの流行が背景にあると推測される。今回の海外調査研究では、アンディエンヌを含むフランス国内で生産された 18 世紀の織物が収録されているリシュリュー・コレクションを調査し、アンディエンヌ及び多様な綿布を調査することによって、アンディエンヌとアンディエンヌの関連用語、その他の綿布に関する用語を明らかにし、アンディエンヌの流行を 18 世紀織物史に位置づけることを主な目的とする。

2. 調査の概要

2.1 リシュリュー・コレクション

フランス国立図書館に所蔵されているリシュリュー・コレクション[4]は、ルイ 13 世の時代に宰相を務め、フランスの絶対主義の基礎を築いたリシュリュー枢機卿(1585-1642)の甥の息子にあたる、元帥リシュリュー公爵(1696-1788)の主導の下に収集、整理された布の見本集である。リシュリュー・コレクションを集大成した元帥リシュリュー公爵もまた、ルイ 14 世、ルイ 15 世、ルイ 16 世と 3 代のフランス国王に仕え、国王の第一の側近として重責を果たし、24 才のときにアカデミー会員ともなった人物である。彼の死後、長い時間をかけて整理された財産目録の中には、二折判の手稿本 52 巻があり、1715 年より 1736 年に至る、「われらが時代の逸話、版画、肖像、地図、儀式」、モードに関しては、絹、綿、麻織物などの見本がふくまれている。織物見本集は、整理番

号 LH45 から LH45(F)までの 7 冊に整理されていて「われらの時代の逸話」のコレクションの一部をなしている[5]。この見本帳には生産年や生産地が手書きで記されている。

ここに収録されている織物の見本は、1720 年から 1737 年に至るまで、フランス国内及び国外で生産された、変化にとむ、あらゆる種類の織物を示し、ありふれたものから、豪華で、この上もなく見事なものまである。ツーロン港の徒刑場の刑囚たちによってつくられたものから、リヨンの製造所の絹織物、ブロカール、ダマ、タフタ、紋ビロードや型押しビロード、無知や縞や錦織など、貴族や王の衣装として作られたものまで及んでいる[6]。18 世紀フランスの膨大な織物を収録している貴重な資料である。

リシュリュー・コレクションの見本 7 冊の中で、第 1 巻である目録番号 LH45 は、リヨン産織物、アベビル、ニム、ルアン、マルセイユなどで生産された多様な織物を収録している。ここには、1736 年マルセイユで生産された、「アンディエンヌ又はギネー」Indiennes ou Guinées と名づけられた見本が、整理番号 126 番から 136 番まで 11 点収録されている。白地又は青地に褐色、赤、緑、黒を用いて花と枝を手描きで染めた織物である。また、「アンディエンヌ・サン・ジョゼフ又はシフラカニ・ダレプ」Indiennes S.Jopseph ou Chiffracanni d'alep と名づけられた、白地に赤色で鮮明に手描きで染められたものが整理番号 140 に収録されている。その他、縞模様の綿布、「シャモワズ」Siamoise、「バザン」Basin、「クティー」Coutil などの綿布も収録されている。

第 2 巻、目録番号 LH45(A)は、ペルピニャン、カタロヌなどで生産されたレース、リボン・テープなど装飾用の織物が収録されている。第 3 巻、目録番号 LH45(B)には、夏用の絹織物、毛織物、ベルベットなどが主に収録されている。

第 4 巻、目録番号 LH45(C)は、大部分が綿織物で、今まで調査してきた綿織物に関しての見本が全部収録されていた。ルアンで生産された縞模様の「シャモワズ」が整理番号 2117 番から 2159 番まで、「縞模様のトワルとチェックのトワル」Toiles rayée et à carreaux が整理番号 2160 番から 2209 番まで、2228 番から 2237 番まで、2357 番から 2358 番まで、収録されている。「クティー」は整理番号 2210 番から 2227 まで、2356 番、2359 番から 2374 番まで収録されている。「フュテンヌとバザン」Futaines et Basin が、整理番号 2303 番から 2310 番まで収録されている。その他「綿織物」と名づけられているのが、整理番号 2275 番から 2277 番まで収録されている。また、名称は記録されていないが、綿織物と推測されるものが整理番号 2406 番から 2413 番まで収録されている。

第 5 巻である目録番号 LH45(D)には、1736 年オランダで生産された織物が整理番号 2420 番から 2451 番まで、ジェンヌで生産された織物が整理番号 2692 番から 2702 番まで収録されている。

第 6 巻の目録番号 LH45(E)、最後の第 7 巻である目録番号 LH(F)には、リボンの見本が収録されている。LH45(E)には、生産地は記録されておらず、1732 年から 1736 年までの年代だけが記されたリボンが整理番号 2820 番から 4233 まで 1414 点、収録されている。LH(F)には、フランスのパリ、リヨン、オランダ、イタリアなど、各地で 1736 年から 1737 年まで生産されたリボンが、整理番号 4234 番から 4819 番まで、586 点収録されている。

アンディエンヌと綿織物は 第 1 巻の目録番号 LH45 と 第 4 巻の目録番号 LH45(C)に収録されている。以上の資料はすべてに説明が書いてあるわけではないが、それぞれ生産地、生産年、織物組織、用途、値段などが部分的に手描きで説明されている。

収録されている綿織物の中で、模様が染め出されているのは「アンディエンヌ又はギネー」、「アンディエンヌ・サン・ジョゼフまたはシフラカニ・ダレプ」などである。また、柄が入っているものとして縞模様、チェックの模様の綿織物は、絹織物に表現された文様とは区別される透明な軽い感じの色合いであった。青、赤、緑、黄色などの組み合わせの多様なデザインのチェックは現代人の目にも明るい軽快さが感じられた。

リシュリュー・コレクションが収集された 1732 年から 1737 年までは、フランスではアンディエンヌの輸入・生産が禁止されていた時期に相当する。フランスでは、経済的損失を回避し、伝統織物産業を保護する目的で、アンディエンヌの輸入・生産が 1686 年から 1759 年まで禁止されていた。その間に集められたリシュリュー・コレクションは、当時フランス国内では自由港としてアンディエンヌの生産と貿易が可能であったマルセイユの布見本のみを載せている。

リシュリュー・コレクションに載せられている数多くの名称の綿布の見本は、18 世紀、軽く実用的である綿布への好み、流行を表し、何種類の綿織物を生産し消費したのかを如実に示している。このような綿布の名称は、ポンパドゥール夫人の財産目録に記録されている各種の綿布の用途とも関連付けられ、18 世紀の綿布への好みを明らかにすることが可能であろうと思われる。

今回の調査で特に注目したいのは、「アンディエンヌ又はギネー」という名でリシュリュー・コレクションに載っている「ギネー」についてである。ギネーは、インドのポンディシェリから来た上質の白い綿布[7]を指す。または、白い綿布で、自然のままのもの、または濃いブルーで染められたものを指し、この布地は調度品の裏地に使われた[8]という。つまり、「ギネー」は、インドから輸入された白い綿布、または濃いブルーで染められたものを指しているが、リシュリュー・コレクションによる見本集にはアンディエンヌと同じく綿布の上に多様な模様と色彩が

染められたものを「ギネー」と記録し、11 点が収録されている。用語の再検討が必要である。マルセイユの商業会議所出版の最近の研究書では、「ギネー」には白い綿布と、アンディエンヌと同じ方法で文様が染められた布の二つの種類が存在すると述べている[9]。今後、アフリカ地域、特にギニアとの貿易独占のために 1720 年に設立されたギネー会社[10]の活動、アフリカ地域を対象とする貿易の内容を追求し、「ギネー」とは何かを明らかにしていきたい。

2.2 オランジュの歴史芸術美術館、アルルのレアテュ美術館の絵画作品

「トワル・ドランジュ」Toile d'Orange もアンディエンヌの一種であり[11]、ギネーと共に重要な研究対象である。トワル・ドランジュは、フランスの南部の都市オランジュで生産された布という意味である。1736 年、スイス人デュ・カントン・ダパンツェルは、マルセイユに近いユヴォンヌの海岸に工場を設立した。その管理人、ジャン＝ロドルフ・ヴェテルが 20 年間、この工場を経営したことが知られている。ジャン＝ロドルフ・ヴェテルは、1757 年、マルセイユを去り、オランジュにアンディエンヌ工場を建設し、この工場は発展をとげた[12]。トワル・ドランジュは、つまりオランジュに建造され、成功をおさめた工場の生産品に名付けられた名称である。ポンパドゥール夫人の財産目録にトワル・ドランジュで作られたローブとスカートが記されているが、これはここで生産された布である。

トワル・ドランジュの調査のため訪問したオランジュ歴史芸術美術館には、過去オランジュのアンディエンヌの生産が盛んであったことを表す絵画作品が残っている。画家ジョゼフ・ガブリエル・マリア・ロセティによりジャン＝ロドルフ・ヴェテルの工場の様子を描いた作品である。先が見えないほど広い工場で数百人の女性がぎっしり座り、布の上に筆を用いて模様を描いている様子は、アンディエンヌの需要がどれほど大きかったのかを如実に示している[13]。同じアンディエンヌ工場において、各種の染織工程にかかわっている労働者の様子を描いた絵画も残されている。木版を用いて文様を押し出すところ、デザイナーたちが蝋燭をともした部屋でデザインに臨んでいるところ、図案を木版に彫刻するところ、野原で布を漂白するところなど、アンディエンヌにかかわる多くの工程の労働者の姿を生き生きと描いている。また、絵画の中で工場の中央に、赤地に緑色で花模様をプリントしたアンディエンヌの一式を揃えて着たジャン＝ロドルフ・ヴェテルは、成功を収めた企業家の堂々とした様子で描かれている。オランジュ歴史芸術美術館に所蔵されている絵画は、所蔵番号も付けられていないまま保存、展示されているが、オランジュがアンディエンヌ生産において繁栄していた時代を雄弁に物語っている。

オランジュの歴史芸術美術館の絵画作品は、トワル・ドランジュの生産工場の巨大さに加え、トワル・ドランジュがアンディエンヌを代表するほど、多く生産され広がったことを明らかにする上で貴重な資料になると思われる。

オランジュ近郊の都市アルルには、アンディエンヌを着た女性たちの絵画作品が残されていることが知られている。アルル出身の画家であるアントワーヌ・ラスパル(Antoine Raspal, 1738-1811)は、アルルの人々の表情や服装を細部にわたって生き生きと描いており、最良の証言を今日に伝えてくれる画家である。アルルにはアルラタン美術館、レアテュ美術館がある。アルラタン美術館には、アンディエンヌを着ているアルルの女性たちを描いた絵画作品や、各種のアンディエンヌの衣服が保存されており、この衣服についての研究書もあると知られている。しかし、この美術館は、2009 年 9 月から 2015 年までを目標として大々的な復元工事が行われている。レアテュ美術館に展示されているアントワーヌ・ラスパルの絵画には、花模様のついたアンディエンヌと推測される布地を着た女性が描かれている。彼の絵画の中には、アンディエンヌ以外にも、刺繍としても生き生きとした花模様を表現していたようなものもある。アンディエンヌの多彩な花文様の服装の女性を描いた作品をは、生地の花模様に刺繍のような細かいきめ模様が入っていることを教えてくれる。綿布の上に刺繍として繊細な花模様を表現したのかという点について、オランジュの歴史芸術美術館で目にしたフランスの縫い物、刺繍、レースを取り扱った研究書では、アルルの女性の肖像画について、アンディエンヌと刺繍で装飾したものがあると述べている[14]。また、ポンパドゥール夫人の財産目録には、綿布に刺繍を施したカーテンが記録されているのだが、レアテュ美術館に展示されている絵画で見られるように、綿布の上に刺繍技法も使用されたようである。

アルルには、町の至る所に絵画作品の中のアンディエンヌ衣服の姿の女性たちを思い出させるアンディエンヌの専門店が並んでいた。衣服では男性のワイシャツが特に多く、その他女性のスカート、子ども用の衣服が多く、その他、テーブル掛け用、クッションなどアンディエンヌを現代的に使用した多様な生活用品が取り扱われている。

今回の海外調査研究を通して得られた貴重な資料であるリシュリュー・コレクションと、絵画作品をもとに、アンディエンヌ及びアンディエンヌの種類、18 世紀の綿布の名称を検討し、アンディエンヌを好んだ当時の人々の情緒や美意識の考察へつなげたい。

注

1. Jaques Savary des Bruslons, *Dictionnaire universel de commerce, d'histoire naturelle, et des arts et métiers.* Vol.1~Vol.4, Paris, 1750.
2. Henri Havard, *Dictionnaire de l'ameublement et de la*

décoration depuis le 13e siècle jusqu'à notre jours, 1838-1921, Paris, 1999.
3. Forbonnais, François Véron Duverger de, *Examen des avantages et des désavantages de la prohibition des toiles peintes*, Marseille, 1755.
4. Maréchal de Richelieu, *Echantillons d'Etoffes et Toiles des Manufactures de France et étrangères*, 1732-1737, Paris ; LH45-FOL à LH45(F)-FOL
5. ロジェー＝アルマン・ヴェイジェール『18 世紀フランス織物ーリシュリュー・コレクション』 宮川淳訳、 美術出版社、1964 年、8-11 頁。
6. ロジェー＝アルマン・ヴェイジェール、前掲書、12 頁。
7. Pierre Richelet, *Dictionnaire de la langue Françoise ancienne et morderne*, Les Frères Duplain, Lyon, 1759, (1987), Tome II, p.334.
8. Henri Havard, *op.cit.,* Tome II, p.1241.
9. *Marseille-Provence au contact du monde：Marseille sur les routes de la soie*, Tome II, Chambre de commerce et d'industrie Marseille-Provence, 2001.
10. *La Musée de la compagnie des Indes*. Musée de la compagnie des Indes(Port-louis, Mobihan), Lorient, 1990.
11. Henri Havard, *op.cit.,* Tome III, p.1168.
12. H. Chobaut, L'industrie des Indiennes à Avignon et à Orange(1677-1884), *Extrait des mémories de l'academie de vaucluse*, Avignon, 1938, pp.16-19.
13. «Atlier de la manufacture Wetter» Joseph Gabriel ROSSETTI, XVIIIe siècle, Musée d'art et d'histoire Orange.
14. Marie le goaziou et Nathalie bressson, *La France au fil de l'aiguille*, Éditions Ouest-France, 2002.

クォン　ユミ／お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

東インド会社によって 17～18 世紀のヨーロッパに大量に持ち込まれたインド綿布は、ファッションや日常生活の面でヨーロッパ人の感性に大きな影響を及ぼした。そればかりか経済発展を促し、産業革命へ至る技術の革新を生み出したという意味においても、歴史のなかで果たした役割は大きく、産業・商業・貿易史において少なからず研究がなされてきた。服飾文化史としては概説的、または個別の調査が若干あるのみであり、17～18 世紀ヨーロッパ服飾史の重要な課題として残されている。権裕美さんは、このような視野で修士論文以来この領域の調査に当たっており、今回はフランス国立図書館に所蔵されているリシュリュー・コレクションの織物見本帳、及び綿布の輸入と製造で知られた南フランスで描かれ、今日に残された絵画史料を特に調査の対象としている。フランス語では綿布は総称としてアンディエンヌと呼ばれているが、生産地や、輸入に携わる中東の商人、また経由地によって多彩な名称が記録されており、そこにさらに国内生産の模造品が加わり、織物の技法や特質とその呼称との関係は複雑な状況を呈している。今回の調査は、この点を明らかにする基本的な調査であり、新たな研究の展開が生まれることと期待している。

徳井　淑子（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　教授）

学生海外調査研究		
18 世紀初頭 スコットランド・ジェントリの史料調査		
河内山　朝子		比較社会文化学専攻
期間	2009 年 6 月 27 日～2009 年 7 月 16 日	
場所	エディンバラ　スコットランド, UK	
施設	スコットランド公文書館、スコットランド図書館	

内容報告

1. はじめに

18 世紀半ば以降、スコットランドでは、政策ではなく土地所有者層の個人的な活動が、新たな産業に適応した村落建設を目覚しく展開させたとされる [1]。しかし、そのような土地所有者たちが村落建設に着手する少し以前の時期について、土地所有者層の実体を論じた研究は少ないと言える。そのため、17 世紀後半から 18 世紀初頭のスコットランド土地所有者層が持っていたネットワーク、そしてそれが持つ政治的な意味、中央との関係について注目することを博士論文の目標としている。

この関心の前提として、修士論文で扱った一地方の大規模借地農反乱が存在するが、今回の調査ではそれは扱わない。今回は、その反乱の際に、それを書簡で詳細に報告した一人のスコットランド東部低地地方出身のジェントリ [2] について調査する。この人物自身は、土地所有家系に所属しているが相続権を持たない次男以下であり、土地所有者ではない。しかし、彼の残した書簡群全体に書かれていることを見ると、その時期の土地所有家系に属する者がかかわった特徴的な出来事のいくつかが、より現実的に伝えられていることがわかる。そこで、この人物の残したそれらの記録から当時の土地所有者層の実体を知ることができるのではないかということを考えた。今回の調査では、この史料の価値を探ることを目的とした。

具体的な方法としては、1) この人物の書簡群の調査、2) この人物とその背景を知るために必要な補完史料と文献の調査、3) この書簡に書かれている出来事を理解するために必要な補完史料と文献の調査、以上 3 点である。

2. 調査の実際

2.1 スコットランド国立公文書館の調査

2.1.1 ジェイムズ・クラークの書簡

1724 年にスコットランド南西部、ギャロウェイで起こった大規模借地農反乱の第一史料とみなされているのは、スコットランド東部低地地方、ペニクック出身のジェイムズ・クラークという地方官吏の書いた 5 通の書簡である。彼は、同時代的にも知名度の高かった土地所有者家系、ペニクックのクラーク家の息子の一人であり、クラーク家の跡取り息子である法律家、政治家、改良家、古物蒐集家サー・ジョン・クラークの弟であった [3]。ジェイムズは、自らの生業を模索する中で父や長兄に書簡を送った。彼は、父や長兄のネットワークを頼りにオランダやイングランドを行き来し、1723 年にギャロウェイの地方徴税官となった。彼はそこで反乱を目撃し、その様子を長兄に報告した。

このジェイムズ・クラークの書き残した書簡は、全体では 1715 年 12 月から 1730 年 2 月までのおよそ 14 年間、主に長兄サー・ジョンに宛てて書かれた 69 通が存在する。それはスコットランド国立公文書館(National Archives of Scotland)所蔵のクラーク家文書 (Papers of Clerk family of Penicuik, Midlothian)全 6181 点中の 1 ファイル GD18/5288 としてまとまって残っている。

東部低地地方のクラーク家出身のジェイムズが、何故南西部のギャロウェイで反乱を目撃することになったのかを知るために、書簡群全体を通して見てみると、当初、彼は商人修行を試みるためにオランダやロンドンを行き来していたが、ロンドンにおいて株式投機で挫折し、その後、長兄サー・ジョンの紹介でギャロウェイの地方徴税官になったことがわかる。書簡群全体をみると、反乱はもとより、クラーク家の資金と人脈を支えにしながら彼が経験した商取引、投機と挫折、そして地方徴税官としての職務遂行の様子が、その時代背景と一致していることがわかる。

この書簡群以外のジェイムズの記録物は見当たらない。したがって、GD18/5288 はジェイムズの書き残した唯一の史料と言える。

2.1.2 ジェイムズ・クラークに関する史料

ジェイムズ・クラークがサー・ジョン・クラークの弟であり、1724 年の借地農反乱に関する書簡をサー・ジョンに送ったことは既に知られているが、彼の生涯や人物像について述べられた文献はみあたらない。長兄であるサー・ジョンの回想録ではクラーク家の家族構成員について言及されている箇所があるが、ジェイムズに関する言及はとりわけ少ないこともわかっている[4]。そのため、クラーク家文書内でジェイムズ・クラークに関する史料を調査した。

前に述べたように、彼自身が書き残した記録物は、スコットランド国立公文書館所蔵の 1 ファイル、69 通の書簡だけであることがわかった。そこで、クラーク家文書において、ジェイムズ・クラークの経歴を知るために必要な補完史料の調査を行った。その結果、何点かの補完史料があることがわかった。

一つは、彼の父であるサー・ジョンによって書かれた子どもたちに関する記録が存在することである。けれども、これは現在この文書群の持ち主であるクラーク家が保管しており、文書館での閲覧はできないことがわかった。

二つめは、父サー・ジョンと長兄ジョンがやり取りした書簡における、ジェイムズについての言及である。目録をみると、クラーク家では家長、あるいは家長を継ぐ長兄が、家族構成員の生活に配慮して資金や人脈の援助を行っていたことがわかる。ジェイムズの場合、投機に関わっていた時期があり、そのことについての言及がサー・ジョン父子の書簡中にあることがわかった。

三つめは、クラーク家と関係を持つ土地所有者の書簡における、ジェイムズについての言及である。前述のとおり、クラーク家家長、あるいは長兄による家族構成員に対する人脈支援は、ジェイムズにも与えられていた。それは商取引、投機、そして地方徴税官の職務遂行を助けるためにジェイムズに紹介された。ジェイムズに紹介されたこれらの人々は、ジェイムズに対する援助経過を家長や長兄に報告することがあり、その書簡がいくつか残っていることがわかった。

最後に、地方徴税官だったジェイムズの同僚から長兄サー・ジョンに宛てられた、ジェイムズの危篤・死亡報告書簡が存在することもわかった。

以上のように、ジェイムズ・クラークの生涯と人物像を知るための補完史料が、クラーク家文書内にいくつか存在することが確認できた。

2.1.3 ジェイムズ・クラーク書簡に登場する人物たち

ジェイムズ・クラークの書簡では、ジェイムズの活動にかかわった人々の名前が見られ、その数は 40 名を超える。それは、クラーク家が関係を持つ爵位貴族層から土地所有者層、土地所有家系に属する者たち、商人たち、船長に及ぶ。このうち、もっとも多いのは土地所有者層である。

爵位貴族たちは、父サー・ジョンと長兄サー・ジョンの議会におけるつながりと姻戚関係に由来する人物やクラーク家と親しいバロン、そしてジェイムズが投機を通じて知り合った人物などである。土地所有者たちはもっとも多く登場し、クラーク家と関係がある爵位貴族の縁戚者たちも含まれている。彼らは商取引、投機、そして地方官吏の職務といった、ジェイムズが経験したすべての場面に登場する。土地所有家系に属する者たちは、クラーク家と関係がある土地所有者層の子息たちも含まれており、商業と地方官吏の場面に登場する。

商人たちは、ジェイムズが商業や投機の話題を出すたびに登場する。彼らは、その拠点をアムステルダムやロンドン、そして新大陸に置いており、ジェイムズはそこでの商人修行を希望したり、彼らの拠点に滞在させてもらったりしていることがわかった。船長は、そのようなジェイムズの船荷を運ぶ船の持ち主であることもわかった。

2.2 スコットランド国立図書館の調査

2.2.1 スコットランド土地所有者層の来歴

ジェイムズ・クラークの書簡には、ジェイムズの活動にかかわって多くの土地所有者層が登場する。そこで、スコットランドの下級爵位貴族と土地所有者層の来歴を知るための文献を調査したところ、次の 2 つが有用であることがわかった。

1) *The Baronage of Scotland*: containing an historical and genealogical account of the gentry of that kingdom: collected from the public records and cartularies of this country; the records and private writings of families; and the works of our best historians. / By Sir Robert Douglas of Glenbervie, Baronet. Illustrated with engravings of the coats of arms (Edinburgh, 1798).

2) Mosley, Charles eds., *Burke's Peerage, Baronetage & Knightage*: Clan Chiefs Scottish Feudal Barons 107th Edition (Delaware, 2003).

2.2.2 Caledonian Mercury 紙

ジェイムズ・クラークの書簡に書かれている出来事を理解するために必要な補完史料のひとつとして、同時代の新聞がある。今回の調査では、ジェイムズの書簡の中で一番多く言及されていた1720年の投機に関することを中心に、この新聞の内容を確認した。

1720 年 4 月創刊のカレドニアン・マーキュリー (Caledonian Mercury) 紙は、およそ 2-3 日毎のペースで発行されており、各 6 ページほどである。他社の記事の転載と投書で構成されている紙面には、国王の動向、戦況、宗教問題、そして貨幣経済の動向に関することが記載されている。

1720 年の記事では、ジェイムズがかかわった投機について、株価の推移からその背景、風評まで、多くの紙幅が割かれていることがわかった。1 年分の関

係記事を読むことで、ジェイムズの書簡において説明されている彼の経験との比較が可能になると思われる。

2.2.3 スコットランド土地所有者層の既存研究

国立公文書館のアーキヴィストの見解では、スコットランドにおいて、スコットランド土地所有者層の研究は比較的マイナーな研究であるとのことであった。実際、スコットランド土地所有者層の既存研究は、議会合同やナショナリズムに関係するものに比べると数が少ないと言える。そこで、国立図書館ではスコットランド土地所有者層研究文献を調査した。

その結果、確かに議会合同やナショナリズムに関する文献が多いが、それらのテーマを探求していくと、そこにスコットランド土地所有者層の性質の変容がかかわっているということを示唆するような研究も多く存在することがわかった。

また、スコットランド土地所有者層の変容自体をテーマにした研究も1990年代から現われ始めているように思われた。たとえば、それまでは大きな枠組みで捉えられていなかった人々を明確に「スコティッシュ・エリート」としてテーマを掲げているものが現れ始める。ただし、その対象とされている地域は限定されている。このことは史料の制約とも関係していることもうかがわれるが、今後、研究を進めていく意義がある分野であると考えられる。

3. おわりに

今回の調査は、ジェイムズ・クラークという土地所有家系に属するジェントリが書いた書簡群の史料的価値を探ることを目的とした。その結果、書簡群それ自体は、時代背景を反映している興味深い史料であることがわかった。また、ほぼ無名と言えるこの人物の生涯と人物像を知るための補完史料が、いくつか存在することがわかった。そして、この書簡に書かれている出来事を理解するための補完史料として、同時代の新聞などが存在することがわかった。しかし、既存研究という点では、その数が少なく、これからの分野であることが推測された。

今回の調査結果は、まずは史料紹介としてまとめ、投稿できればと考えている。

注

1. Mitchison, Rosalind, *Lordship to patronage Scotland 1603-1745* (1983); Lynch, Michael, *Scotland: a New History* (1992); Whyte, I.D., *Scotland Before the Industrial Revolution: An Economic and Social History, c.1050 - c.1750* (1995); Lynch, Michael ed., *The Oxford Companion to Scottish History* (2001).
2. 今回の調査で偶然お会いすることができた Burke's *Peerage, Baronetage & Knightage* (2003) の執筆者の一人であるヒュー・ペスケット氏によれば、クラン（氏族）というカテゴリが存在するスコットランドにおいて、「ジェントリ」を厳密に定義することは難しいとのことだった。ここでは、土地所有者であっても爵位貴族は爵位貴族とし、それ以外で土地に依拠して生活する者を土地所有者層とし、土地に依拠しない法曹や官吏などの上位ミドリング・ソートをジェントリとする。
3. *The Baronage of Scotland*: containing an historical and genealogical account of the gentry of that kingdom: collected from the public records and cartularies of this country; the records and private writings of families; and the works of our best historians. / By Sir Robert Douglas of Glenbervie, Baronet. Illustrated with engravings of the coats of arms (Edinburgh, 1798). 420-423; H.C.G. Matthew/Brian Harrison eds., *Oxford Dictionary of National Biography*, vol.12, in Association with The British Academy: From the Earliest Times to the Year 2000 (New York, 2004), 48-49.
4. Prevost, W.A.J. ed., "Letters Reporting the Rising of the Levellers in 1724", *The Transactions of the Dumfriesshire and Galloway Natural History and Antiquarian Society*, 3-44 (1967), 198, n19; サー・ジョン・クラークの回想録でジェイムズに関する言及が確認できるのは、ほんの数行である (Clerk, Sir John, *Memoirs of the Life of Sir John Clerk of Penicuik, Baronet, Baron of the Exchequer Extracted by Himself from His own Journals 1676-1755*, ed. John M. Gray (Edinburgh, 1892), 111.)。

参考文献

Brown, Iain Gordon, *The Clerk of Penicuik: Portraits of Taste & Talent* (Edinburgh, 1987).

Marshall, Gordon, *Presbyteries and Profits: Calvinism and the Development of Capitalism in Scotland, 1560-1707* (Oxford/New York, 1980) （大西晴樹（訳）1996『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神: スコットランドにおけるウェーバー・テーゼの検証』 すぐ書房）.

Williams, J. Lloyd, "The Import of Art: the Taste for Northern European goods in Scotland in the Seventeenth Century", Roding, Juliette/Lex Heerma van Voss eds., *The North Sea and Culture (1550-1800)* (Uitgeveriji Verloren, 1996).

こうちやま　あさこ／お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

河内山さんは、博士課程論文で、18 世紀初頭スコットランドの土地所有階層を扱い、17～18 世紀における土地所有階層の変容を手がかりにして、近世スコットランド史を見直そうと考えています。現在のところ、河内山さんが想定しているスコットランド土地所有階層の変容とは、大きなレベルでは経済的基盤の変化、それへの対応に伴う社会ネットワーク形成の変化といった問題ですが、イングランドのジェントリ階層との比較を視野に入れることで、より明確に変容を分析することが可能になると考えています。今回の海外調査研究による支援を得て、河内山さんは、比較的新興の土地所有階層であったペニクックのクラーク家文書に着目しました。クラーク家のなかでは法曹出身で政治家でもあったサー・ジョン・クラークが有名であり、イングランドとの関係やスコットランド貴族との関係からも興味深い人物といえます。しかし河内山さんは、あえてその弟でいわば部屋住み身分からの自立を画して模索したジェイムズ・クラークを取り上げました。イングランドのジェントリ階層においては、その構成員・担い手をどう考えるか、あるいは社会的流動性とのかねあいなどが議論の対象となっていますが、同じような問題意識から検討する上で、ジェイムズ・クラークが格好の視点を提供してくれると考えたからのようです。ただしクラーク家文書のなかではジェイムズ関連史料は少なく限界があり、今回の調査研究によって、それを補完する史料群を発見できたこと、また日本では手に入らないプロソポグラフィカルな分析に必須の文献を得たことは喜ばしく、博士課程論文の核心部分の研究がこれにより可能になるものと大いに期待されます。

新井　由紀夫（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　教授）

学生海外調査研究		
近代日本における陶磁器輸出と米国市場		
今給黎　佳菜		比較社会文化学専攻
期間	2010 年 8 月 30 日～2010 年 9 月 25 日	
場所	アメリカ合衆国（ボストン、セイラム、ハートフォード、スプリングフィールド、ニューヨーク、フィラデルフィア、バルティモア）	
施設	ボストン美術館、ピーボディ・エセックス博物館、ワズウォース・アセニウム、ジョージ・ウォルター・ヴィンセント・スミス美術館、メトロポリタン美術館、フィラデルフィア美術館、ウォルターズ美術館、ボストン公共図書館、ハーヴァード大学ファイン・アーツ図書館	

内容報告

1. 研究概要と本調査の目的

報告者の研究テーマは「近代日本における陶磁器輸出と海外市場」であり、博士論文では海外の輸出先市場が日本陶磁器業発展に何らかのインパクトを与えたことを、経済史・美術史両分野のアプローチから包括的に実証することを目標としている。これまで報告者は、日本国内の陶磁器業発展という視点から、輸出向け陶磁器生産システムがどのように形成され発展していったかを、修士論文「輸出向け陶磁器生産システムの形成と段階的発展－欧米市場情報受容のプロセスから－」で明らかにした[1]。よって次の段階として、海外側の視点から、日本の輸出陶磁器に対して欧米ではどのような需要と市場構造が存在していたのかを分析したいと考えている。最終的にそれが日本側の技術的発展や大量供給を導き出したという連関性を明らかにするするためである。

このような研究の枠組みの中で、まず第一に、近代日本陶磁器業にとって、市場としての重要性が一番高かったといえるアメリカ市場の分析から着手することにした。特に海外における日本陶磁器の需要を考えるために、「上流階級」、「中流階級」、「一般大衆」という需要層の区分を設定し、まずはその中の「上流階級」を分析対象とする。

アメリカ人の「上流階級」を考える場合、造船業や繊維産業などによって富を蓄積し、独立戦争直後からアメリカ経済を牽引していたボストン、ニューヨーク、フィラデルフィアなどのアメリカ北東部の諸都市がその拠点となる。特にボストンにおいては「ブラーミン」と呼ばれる「教養ある上流階級たち」[2]の社交活動に注目すべきであろう。このブラーミンたちの人的ネットワークがアメリカ人の日本美術への関心を引き起こすのに大きく作用し、ひいては日本製陶磁器の需要を促進することになったと考えるからである。もちろん、都市文化や大量消費社会の発展とともに、のちにこのような限られた人たちによる需要は、アメリカ国中の「中流階級」、「一般大衆」の間にも広がっていくことになることを想定しているが、その出発点として「上流階級」が位置づけられるのである。その部分の分析するため、今回はアメリカ北東部の都市に所在する美術館・博物館、図書館において、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、富裕な「上流階級」によって形成された陶磁器コレクションとその関連史料を調査することを目的とした。

2. 本調査の内容・成果

本調査では、ボストンからバルティモアまでを転々としながら、7 箇所の美術館・博物館、2 箇所の図書館を訪問した。主に美術館・博物館（①～⑦）では、各館が所蔵する陶磁器コレクションを総計 170 点ほど実見、撮影した。また、それぞれの館のアーカイブ部において関連史料を収集した。一方図書館（⑧･⑨）では、19 世紀後半にアメリカで発行されていた美術・インテリア専門雑誌の閲覧、撮影をおこなった。以下、各館における成果をそれぞれ報告する。ただし、館名の右に付した（　）内は所在の都市名である。

＜美術館・博物館＞

①ボストン美術館（ボストン）

ボストン美術館が豊富な日本美術品を有していることはよく知られているが、今回はエドワード・シルベスター・モース（1838-1925）、ウィリアム・スタージス・ビゲロー（1850-1926）、デンマン・ワルド・ロス（1853-1935）が収集した日本陶磁器コレクションの中から計 16 点を調査した。

モースは明治期の御雇い外国人として 1877 年に来日して以来、蜷川式胤に師事しながら全国で陶器を収集し、5,000 点にも上るコレクションとしてそれをボストン美術館に売却、1901 年にはそのカタログ “Catalogue of the Morse Collection of Japanese Pottery” を出版している。彼は博物学者として日本

の陶器を体系的に収集することに意義を見出していたため、自ずとそのコレクションの芸術的価値の低さが批判されてきた。確かに今回調査した作品やカタログに掲載されている作品や見ても、全体的に素朴な味わいのもの、日本人の日常生活の中によく現れるようなものが多い。ジャポニスムに乗じてインテリアとしての装飾的な輸出陶磁器を収集していた他のコレクターたちとは、その目的やコレクションとしての価値が大きく異なる。本研究の趣旨においても、「輸出」陶磁器ではないため、主な対象からは外れる。ただし、ジャポニスムという現象を日本美術に対する大きな「需要」と考える時、モース・コレクションの視点も一つの需要のあり方だと捉えられる。よって本研究では、他コレクターとの比較対象として位置付けており、ボストン美術館をめぐって親交のあったビゲローやロスとの比較もこのような視点から今後行う必要がある。

一方、ボストン美術館所蔵のアーカイブからは、モース・コレクションを同館が購入する際に募られた寄附金（計 77,171 ドル）の出資者リスト[3]を得ることができた。そのほか、日本陶磁器に関して 1900 年代に同館アジア部に寄せられた照会・回答書簡[4]や、1910 年代当時のアジア部所蔵品リストの一部[5]などを収集した。

②ピーボディ・エセックス博物館（セイラム）

同館では、収蔵庫および展示室のコレクションを合わせて 29 点調査した。多くは日本から輸出された皿、茶碗、花瓶、香炉、壷、カップ＆ソーサーなどである。「大日本横浜井村造」、「肥　　碟山信甫造」、「日肥山深川製」などの銘が確認できるものがあった。中でも横浜井村彦次郎商店のコンポート[6]は、円周 4 箇所に設けられた小さい丸枠の中に西洋風の紋章（家紋か）が描かれている。丸枠内の部分は輸出後に絵付けされた可能性もあるが、日本の陶磁器に紋章を入れたいという特定の顧客の要望があったことが推測される。また、婦人花見の画や何種類もの花が器面いっぱいに描かれた横浜保土田製茶碗[7]の裏には「此ノ器ハ他ニ比類ナシ、余ガ丹年困苦ノ末初メテ器ニ寫スナリ、此ノ器ナルヤ実ニ世界無二ノ器ナリ　㊥榮山画」とあった。ただし、これらを含めて、今回調査したコレクションが誰の手を経てどのような経緯で同館の所蔵に至ったのかはほとんど不明であった。

③ワズウォース・アセニウム（ハートフォード）

同館では収蔵庫・展示室コレクションから計 22 点を調査した。特筆すべきは、蝶・バッタ・蜻蛉・蝉・はね蟻などの昆虫を描いた茶碗[8]、内面に魚・蛙を、外面に浮彫の鱗をもつ龍を施した茶碗[9]である。いずれも奇抜なモチーフと大胆な構図が印象的であるが、まさにジャポニスムを背景とする欧米人の嗜好を象徴している。また、ティーポット・砂糖入れ・5 点のカップ＆ソーサーから成る錦光山のティーセット[10]は、素地は厚く均一性に欠けるが、雀と花草を色とりどりの釉薬であしらった美しい作品である。ティーポットの蓋部に模された鶏の頭もおもしろい。他にも、綿野[11]、帯山[12]、滝藤[13]、深川[14]、井村[15]製のものも確認できた。

一方、展示室の藪明山の茶碗[16]は、外面に螺旋状の帯に沿って描かれた花、内面にごく小さな蝶が無数に描かれているものである。これはハートフォードの Goodwin 家に伝わっていたのもので、同家のレセプション・ルーム（1874 年頃）に飾られていたものと推測されている[17]。このような藪明山の細密な絵付けは今回他館の調査でもよく目にしたものであり、19 世紀において高い価値・評価を有していたと考えられる。

ちなみに同館では、ジャポニスムを美術分野にとどまらずアメリカのコンテクストから捉え直すことを目的とした展覧会 “The Japan Idea: Art and Life in Victorian America” が 1990 年に開かれている[18]。

④ジョージ・ウォルター・ヴィンセント・スミス美術館（マサチューセッツ州スプリングフィールド）

ジョージ・ウォルター・ヴィンセント・スミス（1832-1923）[19]は、コネチカット州ダービーで生まれ、1852 年から 67 年までニューヨークで馬車製造･販売業で財をなした人物である。その成功から、1867 年、35 才という若さで仕事を引退し、ヨーロッパに滞在して美術を学びながらコレクション数を増やした。自身のための美術品収集だけでなく、他のコレクターや美術館への売却もおこなっていたようである。1892 年頃から美術館設立の計画を立て始め、「美術館を開館するのなら」という条件でスプリングフィールド市に全コレクションを寄贈し、1896 年に開館したのがこの美術館である。スミスは 1923 年に逝去するが、彼の死後書簡はすべて処分するよう妻に命じていたため、残念ながら同館に書簡の類は残されていない。しかし、彼がコレクションを購入した際のインボイス（納品明細書）[20]が大量に残されており、今回の調査ではそのすべてのコピーを得ることができた。例えば、“Imari Jar (伊万里壷)／17 世紀／150 ドル”、“Satsuma Koro (薩摩香炉)／1850 年／250 ドル” というように、品目・おおよその制作年代・価格などの情報が判明する。これによって 19 世紀後半から 20 世紀初頭のアメリカにおいて、どのような種類の日本美術品が、どの程度の価格で、誰によって販売されていたかを知ることができる上に、陶磁器と他の日本美術品の比較、さらには日本陶磁器と中国陶磁器の比較なども可能となる。これは本研究が目指しているアメリカの日本陶磁器市場構造を解明する上で非常に有用な史料となる。さらに、このインボイスは山中商会、起立工商会社、ヴァンタイン社などのものが大部分を占めて

いる。これらの商社は欧米への日本美術品輸出および現地での販売を行っていたことが知られているが、その現地での販売状況などは必ずしも明らかになっていない。特に明治初期の勧業政策と関連の深い起立工商会社については、日本に残っている史料が少ないため、このインボイスは同社の実態を伝えるものとして史料価値が高い。

また、同館のコレクションのうち、“Satsuma” として分類されていたものの目録（No.1～45、作成年代不明）があり、この中の“Value” の項目[21]を平均すると 84 ドルである。最も高額なものは錦光山の花瓶 400 ドルであり、他にも藪明山の濃茶茶碗 250 ドル、同じく錦光山の茶碗 150 ドルなどが目立つ。“Kinkozan” や “Meizan” がブランドとして高い価値を有していたのであろうか。

他にも、ランプスタンドとして応用するための日本風花瓶を紹介している、Japanese Fan Company（ニューヨーク）の商品カタログ[22]や、東洋美術品で埋め尽くされたジョージ・ウォルター・ヴィンセント・スミスの自室の写真[23]などのコピーも入手することができた。

また、コレクションについては計 35 点を調査した。うち収蔵庫の 18 点に関しては一つ一つ陶磁器の裏まで確認することができたので、底に価格シールが貼られているものがそのうち 11 点あることが分かった。今後これらの陶磁器とインボイス、目録を照合することによって、価格とデザインの関係も明らかにし得るだろう。

⑤メトロポリタン美術館（ニューヨーク）

ここでは展示準備のためコレクションを実見することができず、館内データベースのみでの調査となった。そこから、同館が 1879 年から 1946 年の間に計 34 回日本陶磁器の寄贈を受けていることが分かった。その中で一番点数が多いものはチャールズ・スチュワート・スミス（Charles Stewart Smith）の 433 点[24]である。同館のコレクションは全体的に近世以前の茶陶などが多い中、彼の寄贈品は装飾的なものを多く含んでおり、宮川香山、清風与平、加藤友太郎など近代の作品もあった。またフィラデルフィア万博で大量の日本美術品を購入したことで有名なハヴェマイヤー（Henry Osborne Havemeyer）・コレクションは、計 65 点で数量的にそれほど多くなく、少なくとも陶磁器に関しては江戸時代、室町時代のものがほとんどで、近代のものはほとんど見られなかった。

⑥フィラデルフィア美術館（フィラデルフィア）

1876 年、フィラデルフィアでは建国百周年を記念してアメリカ最初の万国博覧会が開催され、そこには明治政府の勧業政策に裏付けられて日本から多数の陶磁器が出品された。よって日本陶磁器とアメリカ人との接触の契機として、この万博は非常に重要なのである。フィラデルフィア美術館はその万博会場の美術館を基礎として翌 1877 年に開館した。よって同館所蔵の日本美術コレクションは、このフィラデルフィア万博で展示されていたもの、もしくは会場内の売店で販売されていたものを多く含む。今回調査した計 15 点の陶磁器も然りである。そのうちの 8 点には、裏に “Jap. 132” などと書かれた楕円形のシールが貼られていた。これは南北戦争の名士であるヘクター・ティンデール（Hector Tyndale）の寄贈品であり、彼がフィラデルフィア万博で買い求めたものである可能性が高い。例えば花鳥草木が美しく描かれた「肥 碟山晴信製」の薄手の蓋付湯呑[25]などがそれである。

一方、アーカイブ部での調査では、1888 年の “American Pottery and Porcelain” 展などを企画していた学芸員ダルトン・ドア（Dalton Dorr）などへ寄せられた書簡[26]、フィラデルフィア万博に関係するあらゆる新聞記事を収集した大型スクラップブック[27]、また同館が所蔵するフィラデルフィア万博関係史料の展示品目録[28]などを得たが、複写がまだ手元に届いていないためここで詳細な報告することはできない。一点だけ、1876 年 11 月に同館へ薩摩焼茶壷一対を寄贈すると書かれた中島良慶の書簡（日本語）[29]を発見したことを記しておく。

⑦ウォルターズ美術館（バルティモア）

同館は、父ウィリアム・ウォルターズ（1819-1894）とその息子ヘンリー・ウォルターズ（1845-1931）の二代に渡って形成されたコレクションを所蔵している。父ウィリアムはペンシルヴァニア州リヴァプールに生まれ、1841 年バルティモアへ移住、1850 年代から酒の卸売業で成功した人物である。日本陶磁器との出会いは 1862 年のロンドン万博でオールコックの収集展示品を見た時であるという[30]。

今回はウィリアムのコレクションの中から計 54 点を調査した。また、ウィリアムがフィラデルフィア万博で購入した日本美術品のリストが記された二冊の手帳[31]のコピーを得た。さらに、1878 年時点の起立工商会社からのインボイス、1900 年パリ博時の新聞記事 1 点、1904 年セントルイス万博時の書簡およびインボイスなどを得た。

＜図書館＞

1870 年代～1880 年代のアメリカでは、エステティック・ムーブメント[32]を背景に、人々の関心が美術工芸品に注がれ、様々な美術雑誌やインテリア専門雑誌が発行された。今回は、万国博覧会やジャポニスムの影響によってアメリカ人の生活に入り込んでいた日本陶磁器もそれらの関心の対象であったと予測し、以下 2 箇所の図書館において計 4 種類の雑誌を調査した。

⑧ボストン公共図書館（ボストン）

"The American Art Review" ボストン、1879 年 11 月創刊
"The Decorator and Furnisher" ニューヨーク、1882 年 10 月創刊

⑨ハーヴァード大学ファイン・アーツ図書館（ボストン）
"The Art Age, a Journal of Architecture and Fine Arts" ニューヨーク、1883 年創刊
"The Art Review, Devoted to Art, Music, and Literature" シカゴ、1870 年 4 月創刊

やはり関心の主流はヨーロッパ美術であり、日本美術に関する記事は全体の比率からして決して多いわけではないが、中国美術に関するものよりは多いと言える。例えば、日本の工芸品を使った室内の飾り方や、日本の寓話・モチーフについて挿図付きで紹介している。また、日本関係の記事以外でも、当時のアメリカ人の生活や理想を読み取ることができ、今後「中流階級」や「一般大衆」について検討していく際にも、このようにアメリカのコンテクストから日本陶磁器に対する需要を見ていくことは非常に重要な視点であると考えている。

3. まとめと今後の課題

今回の調査は、アメリカにおける近代日本の輸出陶磁器に対する需要について、特に「上流階級」に当たる富裕層のコレクションについて分析するための史料調査を目的としていた。特にジョージ・ウォルター・ヴィンセント・スミスやウィリアム・ウォルターズのような個人のコレクションは、当時のアメリカ人富裕層の趣味を如実に表していたし、一番の収穫であったインボイスや関連の書簡およびカタログなどから、市場構造を分析する際の材料を得ることができた。よって、当初の目的は十分に達成できたといえる。

また、コレクション調査として 7 箇所の美術館・博物館を回ることができたため、アメリカ北東部の都市の日本陶磁器所蔵状況やそれぞれの特徴について大まかなセンスを得ることができた。これは多様なコレクションの中から本研究に最も合致した対象を探し出すという意味で、今後の研究の大きな足がかりとなった。当面は、ジョージ・ウォルター・ヴィンセント・スミスおよびウォルターズ父子に注目し、彼らの人物像とともにその需要の傾向を追究する予定である。加えて、今回様々な学芸員、アーキビスト、司書の方々との接点および交流をもつことができ、今後国際的な視野で研究を進めていく上で本調査は非常に有益であった。

課題としては、以下 2 点が挙がった。第一に、コレクターたちの購入ルートを明確にしなければならないことである。万国博覧会、オークション、ヨーロッパ旅行、来日、山中商会やモリムラ・ブラザーズなどの日本人販売店から、などそのルートは多様である。さらに万国博覧会の中でも、会場内美術館の展示品を購入したのか、土産物の感覚で売店でより安価なものを購入したのかも区別しなければならない。このような多様なルートを想定した上で、それぞれの陶磁器がどのような価値を見出されて購入されたのかについて検討を深めていきたい。

第二に、今回の調査でよく目にした "SATSUMA" をどう考えるかである。いわゆる「東京薩摩」や「京薩摩」などと呼ばれる、薩摩地方で焼かれた素地か否かに関わらず、東京・横浜・京都などで「薩摩焼風」の絵付けがなされて輸出されたものが、欧米では一緒くたに "SATSUMA"と捉えられている。今回の調査品でいえば藪明山、錦光山、保土田などである。これは興味深い事実であるにも関わらず、その生産から輸出までの実態の部分については明らかにされていないことが多い。国内史料も踏まえて今後解明していきたい。

最後に、今回の調査を遂行するにあたって、アマースト大学のサミュエル・モース先生に多大なご協力を頂いた。心より感謝を申し上げる

注

1. 2010 年 1 月、お茶の水女子大学に提出。
2. 木村昌人「金ぴか時代の米国東部－ボストン・フィラデルフィア・ニューヨーク」p.21（阪田安雄『国際ビジネスマンの誕生－日米経済関係の開拓者－』東京堂出版、2009 年）
3. "E. S. Morse Collection, Subscription to purchase" (MFA, AAOA Archive, Pre-1910, M)
4. 例えば、Edward G. Clapham から McLean に送られた日本陶磁器関係の英文出版物についての照会・回答書簡（1906 年 2 月 20・21 日、MFA, AAOA Archive, Pre-1910, C）など。
5. Box: "Okakura Tenshin Sorted Papers"; Folder: "Document 6, 1911, The State of the Department Registration + Catalogue of the Dept., Feb + Aug 1911"
6. Object number: E50.551.1 (Peabody Essex Museum)
以下、同様に特定の作品については Object number として各館の所蔵番号を示す。
7. Object number: 1978.51 (Peabody Essex Museum)
8. Object number: 1908.385 (Wadsworth Atheneum) Constance S. Mead という人物の遺贈品であり、1890 年頃に制作されたものと推定される。
9. Object number: 1905.958 (Wadsworth Atheneum)
10. Object number: 1937.411, 412 (Wadsworth Atheneum) ただし、カップは 4 点しか確認できなかった。
11. Object number: INV1146.1994, 1917.91 (Wadsworth Atheneum)
12. Object number: 1918.983 (Wadsworth Atheneum) 作品の裏に"G. T. MARSH & Co. (Palace Hotel), SAN FRANCISCO" と書かれたステッカーが貼られていた。

販売店の名前であろうか。

13. おそらく Object number: 1918.981 (Wadsworth Atheneum)
14. Object number: 1905.364 (Wadsworth Atheneum)
15. Object number: 1951.341 (Wadsworth Atheneum)
16. Object number 未確認
17. William Hosley "The Japan Idea: Art and Life in Victorian America" (Wadsworth Atheneum, 1990) p.64
18. 展覧会カタログ : William Hosley "The Japan Idea: Art and Life in Victorian America" (Wadsworth Atheneum, 1990)
19. スミスの経歴については、Caroline V. Mortimer "George Walter Vincent Smith: The Man and His Museum" (Partial fulfillment of the Master's dissertation in the History of the Decorative Arts, Cooper-Hewitt Museum and Parsons School of Design, May 1984) に詳しい。
20. Folder: "A", "B", "O" and "Yamanaka"
21. ここに示されている"Value"とは、スミスによる実際の購入価格や陶磁器自体に貼られているシールの価格とは異なる場合が多い。
22. Japanese Fan Company "China-Japan Decorative Arts, Catalogue No.10" （年代不明）
23. Folder: "Mr. Smith's House interior", "Smith House Interior- Exterior"
24. 点数に関しては重複しているデータが含まれていたため必ずしも正確な数字ではない。
25. Object number: 97.218, 97.219 (Philadelphia Museum of Art)
26. Board of Trustees Records, Series 3 Initiatives--Subseries A. Exhibitions--1. American Pottery and Porcelain (1888); Dalton Dorr Records, Series 1 Museum letter books [incoming]
27. Scrapbooks, Series 1 Centennial Exhibition
28. 同館図書館でフィラデルフィア万博に関する企画展示が開催中であった。
29. Dalton Dorr Records, Series 1 Museum letter books [incoming], Box1, folder 9, No. 96 1/2
30. "The Taste of Maryland－Art Collecting in Maryland, 1800-1934" Walters Art Gallery, 1984, pp.50-52
31. "Centennial Exhibition 1876 Objects Purchased" (Given by John Walsh, April 1945)
32. 中島朋子「アメリカのエステティック・ムーブメントにおける日本の美術工芸品の受容」（明治美術学会『近代画説』10、2001 年、pp.14-32）

いまきいれ　かな／お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

本学生のアメリカ調査は、近代日本における陶磁器輸出の最大の市場であったボストン、ニューヨーク、フィラデルフィアなどのアメリカ北東部の諸都市における、陶磁器コレクションとその関連史料の発見を目的としていた。合計で 7 箇所の美術館・博物館、2 箇所の図書館を訪問する精力的な調査を行い、美術館・博物館では、各館が所蔵する陶磁器コレクションを総計 170 点ほど実見し、それぞれの館のアーカイブ部において関連史料を収集した。一方図書館では、19 世紀後半にアメリカで発行されていた美術・インテリア専門雑誌を閲覧、調査した。

陶磁器と文献とを総合的に歴史学的視点から行なうこの調査により、個人コレクションの重要性の発見、また史料の新発見や再評価への視点の確認など、今後の研究を進める上で重要な成果を挙げた。また、詳細な調査の内容が記されているこの調査報告書そのものが重要な学術的価値を持っているといえよう。今後の研究におおいに資すると高く評価することができ、論文の発表が待たれるところである。

小風　秀雅（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　教授）

学生海外調査研究	
14 世紀初期イングランド宮廷及びエドワード二世に関する史料調査	
常木　清夏	比較社会文化学専攻
期間	2010 年 11 月 30 日～2010 年 12 月 22 日
場所	イギリス（オックスフォード、ロンドン、グロスター）
施設	オックスフォード大学ボードリアン図書館、イギリス国立公文書館、グロスター大聖堂、テュークスベリー・アビー

内容報告

1. 海外調査研究の必要性及び目的

報告者は、主にジェンダーやセクシュアリティの観点から、中世イングランドにおける人的結合関係を研究している。ある社会集団の中で共有されている道徳観念や行動様式を考察することで、その集団の思考様式の一端を明らかにすることができると考える。そこで、14 世紀初期のイングランドを対象に年代記を初めとする当時の叙述史料を分析することで、当時の宮廷内において共有されていた思考様式を明らかにしようと研究を進めている。そこから、その思考様式が戦争や政変にいかに影響を与えているかについても考察することが可能であろう。修士論文とそれに基づく投稿論文では、イングランド国王エドワード二世（1284-1327 在位 1307-1327）と二人の寵臣、ピアズ・ガヴェストン（1312 年没）ならびにヒュー・ディスペンサー二世（1326 年没）を取り上げて、国王とこの二人の男性それぞれとの関係が同時代に書かれた年代記 *Vita Edwardi Secundi* 内においてどう描写されているかを分析した[1]。それにより、14 世紀初期イングランドの宮廷内では男性同士の絆が極めて重視されており、その絆の維持と調和が重視されていたことを明らかにした。それと同時に、対象者の政治的な失脚を意図して、男性同士の親密な絆がソドミーの文脈でバッシングされていたことも指摘した。この研究を博士論文に向けて更に発展させるには、この研究結果を他の文書記録と比較することで、一般化が可能か否かを検証しなくてはならない。そのために必要とされる史料は、現時点で二つ考えられる。まず、同時代の他の年代記を多数分析する必要がある。年代記作者のバックグラウンドや出自が多様であるにも関わらず、エドワード二世を初め宮廷の人物描写もしくは関係描写に共通の見解を見出せるならば、その見解はイングランドの広範囲に渡って、14 世紀初期の人々が共有していたものであると言えるのではないだろうか。次に、チャーターなどの公文書と内容を比較する必要がある。年代記に書かれている内容が独自のものなのか、それとも宮廷の公的な記録にも記載されているものなのかを検証することで、多角的な視点からの分析が可能になる。以上のことを踏まえて今回の海外調査では、日本では手にいれられない年代記史料や二次文献の収集、チャーター（証書）を初めとする公文書の原本の閲覧及びその複写の収集、そしてエドワード二世や宮廷に密接に関わりのある史跡の確認及び調査を行った。

2. 調査の概要

2.1 オックスフォード大学ボードリアン図書館（Bodleian Library）

オックスフォード大学ボードリアン図書館はオックスフォード大学に属する学術図書館であり、国立図書館（British Library）に次ぐイギリス第二の規模を誇っている。今回ボードリアン図書館を訪れた目的は主に二つある。第一の目的として、これまでの研究でメインの分析対象として取り上げてきた 14 世紀初期に書かれた年代記 *Vita Edwardi Secundi* のマニュスクリプトをマイクロフィルムで確認することである。日本では、この年代記は刊本のみ入手可能であり、マイクロフィルム版もない[2]。後述するように、ボードリアン図書館に所蔵されているこのマニュスクリプトは 18 世紀に作成された写本であり、14 世紀当時のものではない。しかし、現存する最古の *Vita Edwardi Secundi* のマニュスクリプトはこのボードリアン図書館所蔵のものだけであり、現在発行されている刊本は全てこれに依拠している。このマニュスクリプトが全ての刊本の元になっているとはいえ、刊本の編者それぞれの解釈により、本文中のラテン語単語や活用に関しては微妙に異なる箇所がある。現存する最古のマニュスクリプトを改めて確認することは、自身が内容解釈をする際に有益であると考えて今回の閲覧に至った。今回、ボードリアン図書館で閲覧した *Vita Edwardi Secundi* のマニュスクリプトは、1729 年にトマス・ハーンが作成し

た写本である。1728 年にインナーテンプルのジェームズ・ウエストが、ジャーバス・ホールズ（1674 年没）というマニュスクリプト収集家が所持していたマニュスクリプトを入手し、このマニュスクリプトの調査をオックスフォードの古物研究家であったハーンに依頼した。彼は、このマニュスクリプトは元々二つに分かれており、それをおそらくホールズが 17 世紀に一つに合わせたのではないかという見解を示した。ウエストが所持していたマニュスクリプトの後半部分が、現在の *Vita Edwardi Secundi* 部分である。1730 年に、ハーンはこのマニュスクリプトの写本を作成し、元のマニュスクリプトはウエストに返却する。しかし、1737 年にインナーテンプルで火事が起こり、ウエストのマニュスクリプトは火事で焼失してしまう。結果として、ハーンが作成した写本のみが残され、それがボードリアン図書館 Rawlinson MS B. 180.として所蔵されているマニュスクリプトである[3]。今回はマイクロフィルムの使用方法を学習するため、またマイクロフィルムで文字を読むことに慣れるためもあって、あえてマイクロフィルム形式で年代記を閲覧した。レバーを回しているうちにどのページを見ているかわからなくなるという初心者にありがちな問題が頻繁に生じて苦戦したが、ハーンが原写本から書き写したもの、すなわち現存する最古のマニュスクリプトを確認することで、史料そのものについて改めて考察する機会を得ることができた。

ボードリアン図書館利用の第二の目的は、オックスフォード大学所属の博士論文の閲覧兼複写申請をすることである。博士論文では、エドワード二世治世末期のイングランド宮廷を政治文化史の面から考察したいと考えているが、そのためにはエドワード二世妃イザベラの動向について深く知ることが不可欠である。イザベラはエドワード二世治世末期からエドワード三世治世初期を考える際に重要な人物である。1325 年にサン・サルド戦争の戦後処理とフランス王に対する臣従礼問題の解決のために、イザベラは王太子エドワードを連れて渡仏した。彼女は目的を果たした後もフランスに留まり続け、イングランド側からの再三の帰国要求にも応じず、エドワードと対立することになった。彼女は恋人であったとされるロジャー・モーティマやイングランドから追放された人々に合流し、1326 年 9 月に兵を率いてイングランドに上陸した。ロンドン他、イングランド諸都市の支持を取り付けると、ディスペンサー父子を捕縛して処刑した。国王であるエドワードは王位を剥奪されて、翌 1327 年 1 月に亡くなっている。王位は王太子であった息子のエドワードが継承してエドワード三世として即位したが、彼の治世の初期はイザベラとモーティマが権勢をふるった。1330 年にエドワード二世の死に加担したという罪状でモーティマが処刑された後はイザベラも失脚するが、彼女がエドワード二世治世末期からエドワード三世治世の初期において多大な影響を与えた人物であるのは間違いない。収入面から見ても、彼女はどの伯とも肩を並べることのできる存在であり、豪勢な家政組織が与えられて莫大な出費が許されていた。このように、イザベラは 14 世紀初期のイングランド宮廷ついて考察する際に欠かせない重要な人物であるにも関わらず、彼女に関するまとまった研究は多くない。数少ないイザベラの伝記のうち、歴史作家ポール・ドハーティの *Isabella and the Strange Death of Edward II* は、豊富な史料に裏打ちされた学術的にも信頼がおける文献である[4]。彼のこの著作は、オックスフォード大学での博士号取得のために書かれた彼自身の学位論文を元にしている[5]。この学位論文を入手することで、以後のイザベラ研究に必要な情報を多数得られるのではないかと期待して、閲覧申請を提出した。博士論文の複写申請はマニュスクリプトの複写申請と同じ扱いで、閲覧者自身でコピーすることができない。図書館スタッフに依頼するのだが、あいにく大学が冬期休暇に入っていたため滞在期間中の受け取りができず、郵送してもらうこととなった。論文の内容は、極めてよくまとまったイザベラの伝記であり、1308 年のエドワードとイザベラの婚姻以前からエドワード三世期初頭までのイザベラの動向が、豊富な史料を元に詳細に記載されている。個人的に、この論文内の情報で最も重要と考えているのは、他の学術論文や概説書になかなかまとまって載っていないエドワード二世治世前期から治世中期までのイザベラの動向について記載されていることである。年代記 *Vita Edwardi Secundi* によれば、イザベラはディスペンサーが夫婦の間を裂いているとして抗議しており、イザベラとディスペンサーの関係が良好でなかったことが記されている[6]。年代記のこの記述を取り上げた文献は複数存在する一方で、イザベラともう一人の寵臣とされているガヴェストンの関係について考察した文献はあまり見当たらなかった。そもそも、治世末期になるまでイザベラの存在はあまり表に出てこないのである。しかし、ドハーティのこの論文にはイザベラとガヴェストンの関係についての考察や1314年のイザベラのフランス滞在時におきた義妹の不義密通事件など、イングランド宮廷内外の動向が詳細に記されている。そのため、この論文の入手によって、イザベラの果たした役割について改めて考察することが可能となった。

2.2 イギリス国立公文書館（The National Archives）

ロンドンではイギリス国立公文書館（The National Archives）を訪れた。ここを訪問した目的は、エドワード二世治世の公文書、中でもチャーターの現物を確認することである。チャーターは、記載されている内容自体も重要だが、チャーターに書かれている証人の名前一覧を使って、年代記に書かれている情報が正しいかの裏を取るためにも利用できる。チャーター、すなわち国王が発給する証書は、

王と共に移動中の宮廷が滞在している場所が発給地として書き込まれており、その際、王に供していた主だった臣下たちが証人として名を連ねるのが普通である。その情報を利用して、年代記の記載と史実とで異なっている箇所を明らかにすることができる。例えば、ヨッヘン・ブルグトーフの研究では、エドワード二世治世下に書かれた年代記 *Annales Paulini*[7] の記述をチャーターの証人名から検証して、史実にはなかったことを年代記があったと主張している箇所を明らかにしている[8]。これは、年代記作者は実際にあったことだけではなく「あり得そうなこと」もあったように書いている場合があるという事例であり、作者があえて記述した内容を考察することで、作者の意図について考察することができる。このように、証書と年代記を照らし合わせて分析することで年代記作者の見解をより明確にすることができ、結果的に同時代の特徴を浮かび上がらせることにも繋がる。

今回、公文書館を訪れたことで最も有益であったのは、現物の史料を自身の手で触って、紙やインク、文字の並びなどを直接確かめることができたことである。内容を確認するだけならば複写で事足りる場合もあるだろうが、史料全体がどのような構成になっているかを把握するには現物を見るしかない。しかしながら、イギリス史研究者にとって日本にいながら現物の史料にあたることはなかなか難しい。そのため、今回の海外調査のような貴重な機会を有効に活用して、史料そのものに関する知識を今後も増やしていきたい。また、利用者カードの作成とエドワード二世治世部分にあたる公文書の該当ページの一覧を目録から作成することができたので、これから先の研究で他の公文書が必要となった際に、スムーズに複写を取り寄せることが可能になった。これも、現地のみで可能な作業であるたえ、貴重な機会を得ることができた。

2.3 グロスター大聖堂（Gloucester Cathedral）

グロスターシャーの州都であるグロスターにあるグロスター大聖堂は、かつてベネディクト会の聖ピーター修道院であった。ここには、エドワード二世の墓がある。1326 年にニース修道院で捕えられたエドワード二世は、ケニルワース城に連れて行かれた。1327 年 1 月ウェストミンスターにパーラメントが招集され、開会とともに国王廃位に向けて世論の盛り上げが行われた。エドワードの政治能力の欠如、愚昧さ、弱さが力説され、廃位の正当性が説かれた。すなわち、王の名において召集されたパーラメントが王を廃するという自己撞着の事態がおきたのである。パーラメントに召集された各身分の構成員を含む代表団が王の元に訪れ、その代表団の一人が全王国の臣民を代表してエドワードに対するあらゆる臣従と忠誠を放棄した。こうしてエドワード二世は廃位され、1327 年 2 月 1 日にエドワード三世が戴冠した。エドワード二世は、その後私人として監禁状態に置かれていたが、この年の 9 月にバークリー城で亡くなった。殺害されたとも言われている。同年 10 月 21 日に、エドワードの遺体は聖ピーター修道院に運ばれた。その遺体を見ようと多くの群衆が詰めかけ、人員整理のための柵が必要なほどであったという。同年 12 月 20 日にエドワード三世とイザベラも出席して葬儀が行われた。当初の墓はパーベック大理石の台でできたシンプルなものであったが、エドワード三世の命により十年の歳月をかけて豪奢な墓が造られた。はめ込まれていた宝石や設置されていたはずの石像などが現在はもはや欠けてしまっていることを思えば、出来上がったばかりの墓は今見ることができるもの以上に立派であったろうことが想定される。以降、彼の墓には膨大な数の巡礼者が訪れており、1378 年には時の国王であるリチャード二世が訪れたことも記録されている。巡礼者による寄付と王家の庇護により修道院は聖歌隊席や内陣を改装することができ、今日でも有名な回廊が造られた。すなわち、このエドワード二世の墓は修道院に多大な恩恵をもたらしたのである。今回訪れた際には、隅々まで墓を確認することができ、資料用に多数の写真も撮ることができた。墓に関する詳細な資料も購入できたので、エドワード二世の死や葬儀について考察する際に有効に活かしたい。

2.4 テュークスベリー・アビー（Tewkesbury Abbey）

テュークスベリー・アビーは、現在はグロスターシャーにおいて第二の規模を誇るアングロ・カソリックの教区教会であるが、宗教改革以前にはベネディクト会修道院であった。初代グロスター伯ロバートを初め、代々のグロスター伯の庇護を受けてきた修道院であり、ここにヒュー・ディスペンサー二世の墓がある。ディスペンサー二世はヒュー・ディスペンサー一世（1261–1326）の息子であり、父子ともにエドワード二世治世中期から末期にかけて宮廷内の実力者であった。ディスペンサー二世はグロスター伯領の女子相続人の一人であるエリナー・ド・クレアと結婚していた。クレア家はヘンリー一世の時代からウェールズ辺境地方南部の有力家系であったが、1314 年にグロスター伯ギルバート・ド・クレアがバノックバーンで戦死した後、グロスター伯領はエリナーを含む伯の三人の姉妹に分割して引き継がれることとなった。この財産相続により、ディスペンサー二世はウェールズ辺境のグラモーガンに所領を得て、ここを足がかりに強引な勢力拡大にのり出し、他の諸侯から強い反発を受けた。彼はその後宮廷内で権力を握り、最終的には前述の通り父親共々1326 年に処刑される。1330 年に国王の許可を得て、彼の妻であるエリナーは夫の遺骨を集めてテュークスベリー修道院に埋葬した。今でも彼の墓はテアビーの中にあり、棺を見ることできる。

ディスペンサー二世はテュークスベリー修道院の改装を手掛け、彼が亡くなった後はエリナーと息子のヒューがそれを引き継いで完成させた。アビー内

には、その改装の際に作成されたとされるディスペンサー二世の姿を描いたステンドグラスがある。彼のステンドグランスの両側には、修道院の創始者であるロバート・フィッツハモン（1107 年没）と初代グロスター伯であるギルバート・ド・クレア（1230 年没）のステンドグラスが並べられている。ディスペンサー二世について研究する際、クレア家の財産相続ならびに相続人であったエリナーについて知ることは極めて重要なことである。テュークスベリー・アビーは、当時のクレア家とディスペンサー家の財力と権力の大きさを視覚的に窺い知ることができた場所であった。

3. 今後の研究計画、展望

今回の調査では、年代記史料及び公文書の閲覧のみならず、これからの研究に必要な二次文献も多数収集することができた。また、文献だけでなく 14 世紀当時の姿を留めている史跡も訪れることができ、時代感覚を掴むという意味でも有意義であった。今後、より包括的な視点から 14 世紀初期イングランド宮廷内の人的結合関係を考察することが可能になると思われる。また、それがどう政治に影響したかも、多角的な角度から考察できるであろう。これまでの研究で、年代記 *Vita Edwardi Secundi* においてガヴェストンとディスペンサーに対する批判の内容に違いがある理由は、時間の経過によるものだという仮説を立てた。14 世紀初期にセクシュアリティを理由にして逮捕されるという事件が複数おきていることから、エドワード二世治世が進むに連れて、人々のセクシュアリティに対する態度が徐々に不寛容になっていき、それが寵臣に対する人々の態度にも影響を与えたという仮説である。時代的なこの変化は、セクシュアリティそのものに関する意識の変化だけではなく、セクシュアリティを政治的に利用するという習慣が成立していった時期であるために生じたという仮説も成り立つ。どちらの仮説にしても、実証するためには、キーパーソンである王妃イザベラの動向や彼女と関わりの深いフランス宮廷の動向を調べ、公文書の記録からの考察も行わなくてはならない。今回の調査で得た史料を基に、14 世紀イングランド宮廷におけるセクシュアリティ観の一端を明らかにし、成果を 2011 年度の『人間文化創成科学論叢』に投稿したいと考えている。中世イングランドにおけるセクシュアリティ観を明らかにすることができれば、歴史研究の面で有益であるだけでなく、ジェンダー・セクシュアリティ研究においても新たな視点を提供できるだろう。そして、ある国ある時代のサンプルケースとして留まらずにグローバルな視点から比較検討することで、これからの多様性社会について考える大きなヒントにもなり得ると考える。このことも視野に入れ、今後も本研究を継続していきたい。

注

1. 「エドワード二世宮廷における男同士の絆――Vita Edwardi Secundi を中心に――」、『ジェンダー研究』（お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報）14（2011 年 3 月刊行予定）
2. *Vita Edwardi Secundi* の刊本は、N. Denholm-Young, (ed.), *Vita Edwardi Secundi: The Life of Edward the Second by the So-called Monk of Malmesbury*, (London, 1957). と、W. R. Childs, (ed.), *Vita Edwardi Secundi: The Life of Edward the Second* (New York, 2005). がある。両方ともラテン語原文に英訳が併記されている。
3. マニュスクリプトの来歴については、Childs, *op.cit.*, pp. xv-xvii.を参照。
4. P. C. Doherty, *Isabella and the Strange Death of Edward II* (London, 2003).
5. P. C. Doherty, 'Isabella, Queen of England, 1296-1330' (D.Phil., Oxford, 1977).
6. Childs, *op.cit.*, p. 242: 'respondit regina, 'Ego,' inquid, 'senciens, quod matrimonium sit uiri et mulieris coniunccio, indiuiduam uite consuetudinem retinens, mediumque esse qui inter maritum meum et me huiusmodi uinculum nititur diuidere; protestor me nolle redire donec auferatur medius ille, set, exuta ueste nupciali, uiduitatis et luctus uestes assumam donec de huiusmodi Phariseo uiderim ulcionem.'
7. W. Stubbs, (ed.), *Chronicles of the Reigns of Edward I and Edward II* (Rolls Series, 1882-3, 2 vols), i, pp. 253-370.
8. J. Burgtorf, "'With my life, his Joyes began and ended': Piers Gaveston and King Edward II of England Revisited" in N. Saul (ed.), *Fourteenth Century England V* (Woodbridge, 2008), p. 37.

つねき　さやか／お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

常木清夏さんは、14 世紀イギリス宮廷をめぐる政治文化史を博士論文のテーマとして研究を進めています。14 世紀政治史に関してイギリスでは膨大な研究蓄積があり、それらをきちんと消化した上で新しい成果をだすことが求められています。常木さんの研究は、特に宮廷のひとびとの絆のありかたに着目し、ジェンダーとセクシュアリティの視点から考察することにより、従来の政治史研究の成果を政治文化史という新しい切り口から改めて問い直そうという斬新で意欲的なものです。本海外調査研究が認められたことにより、オクスフォード大学やイギリス国立公文書館に所蔵されている史料調査だけでなく、国王エドワード二世の足跡を追う現地調査が可能になりました。その結果、14 世紀イギリス宮廷における王妃イザベラの動向という、これまでの研究ではあまり光が当てられてこなかった視点を発見したこと、年代記だけでなく証書などの様々な史料に目が開かれたことなど、常木さんの博士論文における中核的研究がこれにより可能となるものと思われます。従来の政治史研究動向を丹念に追うことと同時に、これらの視点を生かした研究成果を学術論文として発表することが期待されます。

新井　由紀夫（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　教授）

学生海外調査研究		
ローラン・プティ《若者と死》－第二次大戦後のフランスの舞踊界での「事件」		
深澤　南土実		比較社会文化学専攻
期間	2010 年 9 月 6 日～2010 年 9 月 24 日	
場所	フランス	
施設	シネマテーク・ド・ラ・ダンス、パリ・オペラ座附属図書館	

内容報告

1. 調査の目的

ローラン・プティ(Roland Petit)は、 第二次世界大戦後、様々な「新しいバレエ」作品を創作した。特に、1946 年初演の《若者と死》(*Le jeune homme et la mort*)は、当時のフランスの芸術界で最も傑出した「事件」と言われた。現在に至るまで、《若者と死》は男性ダンサーや観客を惹き付け、再演され続けている。

筆者は修士論文において《若者と死》の何が衝撃的/革新的だったのかを映像・資料を通して検討することによって導き出した。しかし、筆者は《若者と死》を映像でしか観ておらず、生の舞台から会得するものを、また、映像には写らないものを確認することが必要であった。また、日本では入手することの出来ない資料の多くを確認し、研究をさらに進めることが必要であった。

さらに、論文執筆のための研究において、ローラン・プティ、またシャンゼリゼ・バレエ団 (Les Ballets des Champs-Élysées) の重要作品を調査し、戦後のフランスの舞踊の動向や、舞踊史におけるそれらの位置を検討する。そのためにフランスに赴き、関連文献、資料の収集をすることが必要であった。

特に、舞踊の映像は入手不可能な場合が多い。幸い、《若者と死》は数々の有名なダンサーが踊り、市販されている映像が多い方ではあった [1]。しかし、初演の映像を一部しか観ることが出来なかった。

本調査の目的は、《若者と死》の初演の映像や、プティの初期の作品映像の視聴のために、パリ市内にある、舞踊関係の映像資料館、シネマテーク・ド・ラ・ダンス (Cinémathèque de la Danse) への訪問、そして、資料調査をするために、パリ・オペラ座附属図書館 (Bibliothèque-Musée de l'Opéra de Paris) への訪問を最大の目的とした。

2. 調査施設

2.1 シネマテーク・ド・ラ・ダンス

シネマテーク・ド・ラ・ダンスでは、主にローラン・プティの作品の所蔵映像を全て視聴した。また、合わせて、プティと同時代の偉大な振付家、モーリス・ベジャール (Maurice Béjart) やシャンゼリゼ・バレエ団に関係するバレエ・リュスの貴重な映像も多く視聴した。プティに関する映像は、市販されていない初期の映像を多く視聴したが、多面的で独創的な彼の思想を知ることが可能となった。

また、調査の目的であった、初演のジャン・バビレ(Jean Babilée)の踊る《若者と死》の全映像を視聴し、初演の振付を全て知ることによって、さらに、自身の研究の発展に貢献したと言える。具体的に述べると、女性が舞台に登場する時間が後世の作品よりも早いこと、二人のデュオが多いことも、初演の特徴である。後々のダンサーにはない雰囲気をバビレが醸し出していることは既に部分的な映像でも知っていたことだが、全映像を通して観ることによって、様々なことを理解できた。

振付の特徴を、バビレが「全ての身振りが感情と結びついていた。これは振付けではない。全ての身振りに必然性がある」[2] と語っているように、ミモドラム（無言劇）の体裁をとる珍しいバレエである。そして、リハーサル時にはジャズの曲に合わせて踊っていたが、ジャン・コクトーの意向 [3] で本番直前にバッハの「パッサカリア」(Passacaille B.W.V582) に置き換えられたため、即興性の高い作品である。しかし、近年のダンサー達は、プティの振付とともに、曲に合わせて稽古を行っているため、振付の違いは目で見て理解出来るが、その即興性はわかりづらかった。しかし、バビレの踊りを観ていると、曲に合わせているわけではないことが明白であった。

さらには、この作品はコクトーが当時「現代のニジンスキー」と認めたバビレのために脚本を考えたことも起因しているだろうが、バビレは「演じている」ように見えないのである。非常に自然にこの若者を踊っているに考えられた。このバビレの自然な「演技」に関しては、本調査の最終日に筆者がバビ

レに直接会い、インタビューをしたことにより、より明らかとなった。

2.2 パリ・オペラ座付属図書館

国立図書館の一部でもある、オペラ座内にある図書館の所蔵資料をパソコン等検索機で検索することは未だに出来ず、昔ながらのカード式で探して司書の方に依頼する。すなわち、所蔵資料は、現地に行ってみないとわからないのだが、予想以上に資料が豊富にあった。《若者と死》だけでも、初演当時の新聞・雑誌の切り抜きが大量に保管してあった。それらをざっと見る限りでも、バビレが、当時アイドル的存在であったのであろうことは想像できた。また、数々のフランスの舞踊史の本の中にも、必ずバビレの紹介と写真は掲載されている。日本ではほとんど知られていないダンサーであるが、フランス舞踊史の中では重要なダンサーなのである。

シャンゼリゼ・バレエ団に関する新聞・雑誌の資料も、《若者と死》と同様に多く所蔵してあり、このバレエ団が、当時の人気バレエ団であり、紙面を賑わせていたことが伺えた。コクトーが《若者と死》を構想した時のデッサンなどもあった。

わずか 5 年間（1945-1950）しか存続しなかったバレエ団ではあるが、シャンゼリゼ・バレエ団において、現在《若者と死》とともに、パリ・オペラ座のレパートリー作品でもあるプティ振付《旅芸人》(*Les Forains*)や《ランデブー》(*Le rendez-vous*)を始めとして、ピカソやマリー・ローランサン、ブラッサイやジャック・プレヴェールなどの一流の芸術家たちと常に新作を発表した。46 年のロンドン公演でも喝采を浴びている。このシャンゼリゼ・バレエ団については、いまだ研究がなされていない。

3. ダンサーへのインタビュー

シネマテーク・ド・ラ・ダンスのディレクターであるパトリック・バンサール氏は、2000 年に「バビレの神秘」(*Le Mystère Babilée*)という 4 時間の映像を作成した。その中でも前半の 2 時間は、ほぼ《若者と死》にまつわる映像、バビレやコクトー、関係者らへのインタビューである。バンサール氏は《若者と死》について、この作品が戦後最も革新的で現代的な作品であり、それはバビレという天才的ダンサーが踊ったから、と筆者に語った。「適切な演技者がいなければ、そう容易には上演できるバレエではない」[4]とも言われるほど、この作品はダンサーで全てが左右される作品なのである。

バンサール氏を通じて、現在 87 歳のバビレ氏に会うことが出来た。高齢と思えぬほどしっかりとした声で《若者と死》について語っていただいた。音楽についてはメロディを奏でながら説明して下さった。

バビレ氏が、「あの若者は私自身であった」と語ったことはこの作品にとって非常に重要な発言である。また、コクトーが後年、バビレに、「このバレエ作品は君のダンスだ。これを体現出来る人は誰もいない」と手紙で書き送ったという。プティがコクトーの死後に振付けを変更したことついて、コクトーが生きていたら認めていなかっただろうとも語っていた。

それほど、《若者と死》は、ジャン・バビレと強固に結ばれていたのであり、初演の 46 年から 20 年間はバビレが何百回と踊り、バビレ以外のダンサーは誰も踊らなかったことが証明している。その後は素晴らしい作品の再演を望むプティとダンサー達の手によって作品は変容、発展してきている。しかし、バビレは解釈の間違った踊り方や振付けを認めていない。バビレによれば、作品は「コクトーが私達に生命を吹き込んだもの」であり、再演の時に「《若者と死》がデフォルメされたが、そのように変える作品ではない」と話す[5]。このような初演のダンサーと振付家との関係は、一回性という特性を持つ舞踊だからこそおこる問題とも言える。「踊るという言葉は似合わない作品」、「演じていて、作品に没頭してしまうあまり、若者が自分自身になってしまう、錯覚、現実」[6]を持つという熊川哲也らの発言からは、ダンサーたちが作品への没頭ゆえに危険をさえ感じていることさえが明らかとなった。それほど、強さを持つダンスとも言える。

また、筆者は、修士論文において、《若者と死》の「死」について、若者は「生」を象徴するが故に、「死」と対極の存在であること、さらに若者の未曾有の大量死をもたらした第二次世界大戦の終了直後という時代性も考慮すると、「死」は若者にとって避けることの出来ない運命、現実と捉え、戦争直後の若者の絶望や苦悩という現実がこの作品の見えない舞台となっていたのではないかと考察した。そのような現実の等身大の若者がバレエ作品に登場する点が当時革新的であったと考察した。

以上のことは、今回の筆者によるインタビューでバビレが語った、「作品の重要な点は現実の男性(real man)が踊っていること」、という言葉によってもさらに強調された。

そのような今を生きる等身大の若者をバレエ作品に登場させたことが、《若者と死》が第二次世界大戦後、当時のフランスの舞踊界で最も傑出した「事件」、「新しいバレエ」であった最大の理由と言えるだろう。

4.《若者と死》の観劇

映像で観ることに限定されていた作品を生の舞台で観ることにより、作品へのアプローチは異なる。筆者は生の舞台を鑑賞しないまま《若者と死》を研究していたが、ついに観る機会を得られた。

観劇した日はローラン・プティ・ガラの初日だったために、政治的重鎮が客席にいるなど、華やかで社交的な色が強く、フランスでのバレエの文化的価値の高さを顕著に表していたと言えよう。《若者と死》は最後に上演され、最もアクロバティックな振

付けであり、その日最高の観客の歓声と拍手を受け、人気の高さをしのばせた。 また、振付の点や装置の点など、市販の映像だけでは確認できないことを多く得た。

5. 今後の研究へ

以上のように、本調査は非常に充実したものとなった。このように、バレエ団や振付家や作品の研究を、文献のみで行うのではなく、映像と実際の舞台を確認し、実際に踊ったダンサーにインタビューをすることにより社会や舞踊を捉える、という研究は舞踊学という枠に収まらない研究であり、本調査はグローバルな広い視野での先進的な調査研究であったと考える。

本調査の主題であった《若者と死》についての研究は恐らく学位論文（博士論文）執筆の第一章をしめるであろう。

シャンゼリゼ・バレエ団についてはいまだ研究がなされていないため、筆者の学位論文での主要テーマとなる。シャンゼリゼ・バレエ団が他の芸術やその後に続く舞踊に与えた影響は計り知れないものがある。シャンゼリゼ・バレエ団について、また同バレエ団に属していた時代にプティが振付けをした重要な作品の調査を通し、戦後のフランスの舞踊の動向や社会的背景を導き出し、舞踊史におけるそれらの位置を考察する。

今回の調査に基づき、帰国直後にはお茶の水女子大学における表象芸術論領域研究発表会にて発表を行った。また、第 62 回舞踊学会大会にて《若者と死》とシャンゼリゼ・バレエ団をテーマに研究発表することが決定している。

注

1. 筆者が映像分析の対象としたダンサーは以下の通りである。ジャン・バビレ、ルドルフ・ヌレエフ、ミハイル・バリシニコフ、ニコラ・ル・リッシュ、熊川哲也。以上の５人のダンサーの映像の中で、市販されているものは 3 点。バビレの映像は、Bensard(2000) *Le Mystère Babilée* より、バリシニコフの映像は、映画「ホワイトナイツ」に短縮版が使用されたために、使用した。
2. Bensard(2000) *Le Mystère Babilée* の中で、バビレはオペラ座のエトワール、ジェレミー・ベランガールにこのように伝えている。
3. コクトーが「偶然的な同時進行性の神秘」(le mystère du synchronisme accidentel) と名付けた、音楽的実験。
4. Ries,Frank W.D(1986)*The Dance Theatre of Jean Cocteau.* UMI Research Press:Michigan.
5. Bensard(2000) *Le Mystère Babilée*
6. 熊川哲也《若者と死》. (2007)記録映像. TBS:東京.

参考文献

平田友子（1999）ローラン・プティ研究―＜モダン＞に関する考察.お茶の水女子大学人文科学紀要 52：193-209.

平田友子（1993）ローラン・プティ研究.お茶の水女子大学舞踊教育学専攻卒業論文（1993 年度）.

松田和之（1999）内在する“若い女性の姿をした死”―ジャン・コクトー『若者と死』小論.福井大学教育地域科学部紀要第 1 部人文科学外国語・外国文学編：41-53.

コクトー、ジャン：秋山和夫訳（1991）ぼく自身あるいは困難な存在.筑摩叢書：東京.

Aschengreen,Erik:Tr. to English by Patricia Mcandrew and Per Avsum (1986)*Jean Cocteau and the Dance.* Gyldendal:Copenhagen.

Beaumont,Cyril(1954) *Ballets of Today.* Putnam and Co:London.

Boll,André(1956)*Jean Babilée.*Robert Laffont:Paris.

Clair Sarah(1995)*Jean Babilée ou la danse buissonnièr.*Van Dieren :Paris.

Craig-Raymond,Peter(1953) *Roland Petit.*Losely Hurst:Surbiton, Surrey.

Fiette Alexandre(Ed.)(2007a)*Roland Petit a l'opera de Paris：Un patrimoine pour la danse.* Opera national de Paris:Somogy editions d'art:Paris.

Joyeux,Odette(1967)*Le monde merveilleux de la la danse.*Hachette:Paris.

Koeing,John Franklin(1980)*Le Danse contemporaine.* Fayard: Paris.

Lidova,Iréne(1956) *Roland Petit.Robert* Laffont:Paris.

Lidova,Iréne(1969) *Roland Petit.*Sodal:Paris.

Lobet,Marcel(1958)*Le ballet français d'aujourd'hui:de Lifar à Béjart.* Ad.Goemaere:Bruxells.

Mairie du XXe arrondissement,Mairie du 1er arrondissement(1985)*4 Siècles de Ballet à Paris. Délégation a l'action artistique de la ville de Paris*:Paris.

Michaut,Pierre(1950) *Le ballet contemporain 1929-1950.* Plon:Paris.

Minyama,Philippe(1998)*Jean Babilée.* Marval:Paris.

Pastori,Jean-Pierre(1997)*La danse,des Ballets russes à l'avant-garde.* Gallimard:Paris.

Petit,Roland(2003)*Roland Petit:rythme de vie:entretiens*

avec Jean-Pierre Pastori.La Bibliotheque des Arts:Lausanne.

Petit,Roland(1993)J'dansé *sur les flots.Grasset* :Paris.

Ries,Frank,W.D(1986)*The Dance Theatre of Jean Cocteau*.UMI Research Press:Michigan.

Chardans,J.-L(1954)*Jean Babilée l'ensorcelé de la danse.* Paris-Théâtre n.89.10:28.

McLain Stoop,Norma (1979)*Babilée:The charismatic career of Jan Babilée*.Dance magazine v.53.7:64-77.

*D*umesnil,René(1946)*Ballet des Champs-Elysées"Le jeune homme et la mort"*Le Monde. 27.06.

Gandrey,Rety(1946)*Sur un assassinat*.Arts 5.07.

Luquet,René(1946) *Jan Babilée danse"Le jeune homme et la mort"Ballet de Jean　COCTEAU*.Ce Soir 2.07.

プログラム

Soirée de Ballets Ed.Chêne.06.1945 :Paris.

Les Ballets des Champs-Élysées Ed.Mercure.12.10.1945:Paris.

Les Ballets des Champs-Élysées Ed.Mercure.17.03.1946:Paris.

Les Ballets des Champs-Élysées Ed.Mercure.06.1946:Paris.

Les Ballets des Champs-Élysées Ed.Mercure.12.1946:Paris.

Les Ballets des Champs-Élysées Ed.Mercure.1948:Paris.

Les Ballets des Champs-Élysées Ed.Mercure.1949:Paris.

Les Ballets des Champs-Élysées Ed.Mercure.1950:Paris.

Ballet de L'opéra Roland Petit 9.2010:Paris.

映像

Bensard,Patrick(2000) *Le Mystère Babilée.* Document, Paris.

ふかさわ　なつみ／お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

深澤南土実さんの海外派遣プログラムにおける調査の目的は、①シネマテーク・ド・ラ・ダンスにおいてローラン・プティ《若者と死》の初演映像とプティの初期の作品映像の視聴、②パリ・オペラ座附属図書館における資料調査、③オペラ座での《若者と死》の観劇であった。このたびの調査においてこれら３つの目的を全て達成できたことは大きな成果であるが、それ以上に素晴らしいことは、《若者と死》の初演ダンサーであるジャン・バビレ氏にインタビューできたことである。これは、直接パリに赴き《若者と死》に関する資料収集することを通して得られた幸運であろう。そして、これまでの博士論文の構想には入れられていなかった《若者と死》を生み出す母体となったシャンゼリゼ・バレエ団に関して多くの新聞・雑誌の資料を収集することができ、その資料をもとに戦後のフランスにおける舞踊の動向や社会的背景を導き出したいと考えるに至っている。今後の博士論文の進展を期待している。

猪崎　弥生（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　教授）

学生海外調査研究	
接触場面における中国人日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジーの使用 ー意味伝達の問題を解決するための達成ストラテジーを中心にー	
方　穎琳	比較社会文化学専攻
期間	2010 年 8 月 16 日～2010 年 9 月 28 日
場所	中国（湖南省・広東省・上海市）
施設	湖南大学・広東外語外貿大学・上海外国語大学

内容報告

1. 海外調査研究の必要性

近年、経済、文化の影響で中国での日本語学習者の数は急速に増加し、2006 年の時点で学習者数が 68 万人に達し、世界の日本語学習者数の第二位を占めるようになった [1]。そして、その 68 万人の内、6 割近くは大学で日本語を専攻とするか、選択科目として勉強している学習者で、これからもますます増える見込みである。これらの学習者は主に教室内で日本語を習い、そこで蓄積された知識を用いて日本語母語話者とコミュニケーションに取り組む。だが、語彙、文法などの面において学習者の言語的能力の不足によってさまざまな問題が起こり、それが日本語母語話者との意味伝達を妨げる要因となっている。そこでは、学習者はコミュニケーション・ストラテジー（以下、「CS」と略す）を用いて言語産出及び言語理解の過程に現れた問題に対処しながら、円滑なコミュニケーションの促進を図る。

グローバル化が進むにつれ、日本語教育の重心は文法知識の指導からコミュニケーション能力の育成に変えつつある。そこで、「日本語による異文化コミュニケーションの過程で、どのような問題が、いかなる原因で起き、その問題がどのように処理されているかを明らかにする研究は日本語教育の内容と方法を考える上でとても重要である」（尾崎 1998：18）という指摘から、日本語教育における CS 研究がいかに重要であることが考えられる。これまで日本国内での CS 研究では、学習者の言語レベルと全体的な CS の使用（種類・頻度など）の関係についての横断的な考察（武井 1995、冨山 1995、大野 2003；2004 等）と、縦断的な研究（初鹿野 1994；荻原 1996）がたくさんなされてきた。これらの研究から、学習者の言語レベルが CS の種類、使用頻度と大きく関わることが示唆された。また、CS の指導について、金・赤堀(1997)はトレーニングによる方略能力の向上がコミュニケーション能力の向上とプラスの相関があることを検証した。金（2005）は自然会話で見られた学習者の調整行動を教科書で使われている調整行動と比較し、より円滑なコミュニケーション指導が行えるだろうと指摘している。

これまでの CS 研究では、OPI テストやインタビューなどのタスク型のデータがよく扱われてきた。タスク型会話（特に、双方向性タスク [2]）では意味交渉の機会が増えるに伴って意味伝達の問題の発生が頻繁になり（Pica&Doughty1985b；Shortreed1993 等）、CS が集中的に現れるようになると考えられる。しかし、デザインされているタスクは自然な場面で起きる交渉を反映せず（宮崎 2002）、自然場面での会話を通して意味交渉における有効な調整行動を見直してみることが有効である（金 2005）という指摘から、自然会話からの試みが必要になると考えられる。だが、人権やプライバシーなどを配慮するため、完全の自然会話を収集することは不可能になり、ある程度収録条件をコントロールした場面での会話、例えば話題を与えずになるべく自然に話してもらうような自由会話（雑談）は自然場面の会話の特徴を反映する有力な参考になるだろう。従って、本調査研究では接触場面での CS 使用の特徴を把握するために、自由会話とタスク型会話の二種類のデータを収集して考察を試みたい。

また、接触場面の環境における話者の認知的・文化的「優勢性」が話題選択に影響を及ぼし（加藤 2006）、「JSL と JFL[3] の環境で見せる非日本語母語話者の日本語母語話者に対する対応には違いがある」（鎌田 2003：358）ため、学習者の CS の使用にも影響をもたらすことが推測される。環境による CS 使用の違いを明らかにする前提として、これまであまり注目されなかった JFL 環境での CS 使用の様相を解明すべきであろう。

2. 海外調査研究の目的及び位置付け

2.1 調査研究の目的

本調査研究では、JFL 環境での初対面接触場面の自由会話とタスク会話から、中国人日本語学習者の

CS 使用のパターン、効果、使用においての問題点を明らかにすることを目指す。

また、今回の調査研究のオリジナリティーとして、主に以下の三つが挙げられる。第一に、接触場面の自由会話とタスク型会話の二種類のデータを収録し、異なる場面においての学習者の CS 使用特徴を把握することが可能になる。第二に、ビデオカメラで収録したデータから、ジェスチャー、視線の動き、また顔の表情の変化を観察することで、非言語 CS についての分析が可能になる。第三に、会話データのみならず、フォローアップ・インタビューという方法を用いて会話参加者が CS 使用当時の意識を探ることによって、CS のカテゴリー化と使用効果（達成効果）の確認、また学習者の使用動機を検証することが期待できる。

2.2 本調査研究が博士論文における位置付け

筆者の博士論文では、中国人日本語学習者の CS 使用の全貌を解明することと、中国の日本語教育へ提言できることを研究目的に定め、以下の 5 つの研究を行う予定である。まず、研究 1（修士論文、方 2010）では、学習者は日本語母語話者とコミュニケーションに現れた意味伝達の問題をどのような CS（種類）、どのような頻度で使用したか、その実態を把握した上で、学習者の学習歴による影響を検討した。次に、研究 2 では CS の使用に関わる学習歴以外の要因、例えば学習者の性差、会話の種類などを対象に分析する。そして、研究 3 では日本語母語話者の反応と学習者の調整から CS 使用のパターンと効果を検討し、研究 4 では日本語母語話者の評価を参考に学習者の CS 使用の問題点について注目したい。さらに、そこから明らかになったことを中国の大学の日本語教育現場に取り入れ、教育実践を通して中国人学習者に適応する CS の指導法を研究 5 で提案する。最後に、研究 1 から 5 までの結果を博士論文にまとめ、より全面的に中国人日本語学習者の CS 使用の様相を解明したいと考えている。今回の調査研究は博士論文の研究 2 と、研究 3、研究 4 に位置付け、博士論文の中核になる。

3. 調査研究の方法

3.1 会話データの概要

3.1.1 データ収集の場所とペアの設定

本調査研究の会話データはすべて中国国内における日本語接触場面のデータである。

データ数の確保、及び信頼性を向上させるために、一か所ではなく、湖南大学と広東外語外貿大学の二つの大学でデータ収集を行った。また、すべての会話データは一対一の初対面会話である。会話参加者の学習者は当該大学の日本語学科に在籍する 2 年生[4]、3 年生、4 年生である。日本語母語話者は湖南師範大学と広東外語外貿大学の中国語コースに在籍する短期留学生[5]である。なお、会話のペアとなる学習者と日本語母語話者の年齢差を 3 才以内に控えた。さらに、同一日本語母語話者が異なる日本語能力レベルの学習者と話してもらい、日本語能力の差による学習者の CS 使用の違いを実感することができるのではないかという想定のもと、学習者は会話に一回のみの参加と、日本語母語話者は重複して 3 名の学習者とペアを組んで会話すると設定した。具体的なペア設定を稿末資料に示す。

3.1.2 データ収集の手順

今回の調査研究は 5 つのステップで実施した。まず、学習者の選定と日本語能力の測定を行った。各大学の日本語専攻の 2 年生、3 年生、4 年生の 2010 年前期日本語期末試験（精読+会話）の学年平均成績±5 点を基準に学習者を集め、SPOT テスト（A 紙）[6]を実施した。採点に一要因分散分析を行った結果、まず、両大学の学年間には有意な差が認めなかった。次に、両大学とも 2 年生と 3 年生、また 2 年生と 4 年生の間に有意な差が見られ（$F=4.38$、$p<.05$；$F=3.97$、$p<.05$）、3 年生と 4 年生の間には差が見られなかった。そして、3 年生と 4 年生を日本語能力レベルで分けるために日本語能力試験 1 級試験の成績を参考にし、日本語能力試験 1 級の資格を持つ 4 年生とそうでない 3 年生を選出した。それによって 2 年生、3 年生、4 年生の日本語能力レベルは初級、中級、上級に当たると考えられる。

次に、表 2 の設定に基づき、日本語母語話者の留学生と学習者のペアを組んで、データ収集の日にちを定めた。

また、データ収集の前日に 3 組のパイロット調査を行って、機材の動き、タスクの設定、時間配分などについて確認した。特に、双方向性タスクの話題の難易度について、学習者と日本語母語話者からのフィードバックを参考に確定した。

最後に、データ収集当日は、「会話調査の参加→調査協力承諾書の記入、フェスシートの記入→フォローアップ・インタビューの参加」という順に学習者に協力してもらった。一方、日本語母語話者は 3 名の学習者との 3 回会話（25 分×3＝75 分間）と、インタビュー3 回（45 分×3＝135 分間）、合わせておよそ 4 時間ほど調査に参加してもらうのは、非常に負担が大きいので、2 日にわけて（会話参加の日とフォローアップ・インタビューの日）協力してもらった。

3.1.3 会話の設定

今回のデータは自由会話とタスク型会話との二種類のデータから成っている。

修士論文のデータの性質との一致性を保つために、自由会話の設定は修士論文と同じように話題を会話者同士に与えず、15 分間の間に自由に話してもらうことにした。

また、双方向性タスクについて、Long（1981）は会話参加者に真のコミュニケーションを要求するタスクを利用することは接触場面の意味交渉を考察する適切な手段になると指摘している。また、村上（1996）はゴールがはっきりしていることと、タス

クの内容や設定について参加者が興味や知識を持っていることが参加者の意欲に関わる重要な要素であると述べている。従って、参加者の意欲は喚起された場合こそインターアクションが促進されると推測し、今回のデータに扱う双方向性タスクを、学習者と日本語母語話者が実際のコミュニケーション（特に初対面会話）の中である程度関心を持ち、何より話しやすい話題に設定した。なお、学習者の日本語能力レベルを考慮し、また日本語母語話者が同じ話題に慣れてしまうことを防ぐために、2 年生・3 年生・4 年生の学習者にそれぞれ異なる話題[7]を与えた。1 ペアに 10 分間という時間制限を設けた。また、すべての話題についての指示は日本語で行い、学習者の要望に応じて簡単な説明を加えた。

3.2 フォローアップ・インタビューの概要

本調査研究では、ネウストプニー（1994：7）によるフォローアップ・インタビュー[8]の実施方法を参考に、意味伝達の問題発生および学習者が使用した CS の確認、CS 使用当時の学習者の動機の探索、また CS 使用効果に対する会話者双方の評価などについてインタビューを行った。学習者に対するインタビューは基本的に会話収録直後に行った（2 年生の内の 2 人は次の日に行った）。質問と映像再生の時間を合わせて、1 人におよそ 45 分程インタビューし、計 1350 分間（30 名の学習者）のインタビュー資料が得られた。また、日本語母語話者へのインタビューはデータ収集日の次の日に実施し、計 1350 分間（10 名の母語話者）のインタビュー資料が得られた。

3.3 CS に関する資料調査

中国における CS 研究の現状を把握するために、上海外国語大学の図書館の修士論文・博士論文データベース、言語学電子データベースを利用して調べた。そこで、最近 10 年間の日本語研究を概観してみると、談話・会話分析の手法から日本語の談話構造や展開などに注目を集めるようになり、ポライトネス理論、Leech 会話原則の視点から、間接発話行為（趙 2001）、依頼･断り行動（陳・劉 2010）、言いさし（馬・王 2002）、感謝･不満表現（呉 2007）等を分析対象とした研究が現れてきた。また、言語行動のほか、非言語行動、メタ言語の使用（張 2006、李 2008）についても関心を寄せてきた。その中、日本語学習者を対象とした CS 研究は学習者の間接ストラテジー（顧・趙・董 2002）と、聞き手の会話ストラテジー（趙・董・李 2002）などの CS 使用についての研究などが挙げられる。しかし、これらの研究は主に中日母語場面の対照研究の形になり、日本語を媒介言語としての接触場面研究は管見の限り多く見当たらない。日本語を第二言語として学ぶ学習者が参加する機会の多い接触場面が母語場面との特徴が異なると考えられる。そこで、今回の調査研究を通して接触場面における CS 使用の実態及びその問題点を解明すれば、日本語学習者にとって学習の素材が豊かになり、接触場面の実態を反映した日本語教育を構築する目標の達成に貢献できるであろう。

4. まとめ

本報告書では、今回の海外調査研究の研究背景、今後の研究における位置付け、また具体的にどのように行ったかについて述べた。およそ 1 カ月の間に中国の湖南省、広東省及び上海市にわたって、大学生間の日本語接触場面の最前線に立ち、中国人日本語学習者と日本語母語話者の声に耳を傾きながら、生き生きとした会話データを拾い上げ、CS 研究の意義について考える機会が得られた。これからは、今回の調査研究で得られた貴重なデータを処理、分析して、そこから分かったことを中国国内で日本語教育現場にどのように活かすかを考えていきたい。

5. 今後の予定

今回の調査研究で得られたデータを整理、分析して、その結果を社会言語科学会の研究大会で発表し、また、社会言語科学会の学会誌『社会言語科学』に投稿して、研究論文の形で公表したい。執筆予定の論文名は「中国人日本語学習者による意味伝達の問題の修復プロセス　ーコミュニケーション・ストラテジーの使用パターンからー」である。

注

1. 2006 年国際交流基金の「日本語教育国別情報」による。
2. Gass＆Varonis(1985:149)には「双方向性タスク」は「情報の交換を含むインターアクションであり、その情報の交換の中で、与えられたタスクの達成のために共有しなければならない情報を、双方の参加者が持っている」と定義されている。
3. 「JSL」とは、非母語話者にとって日本語が外国語ではなく第 2 言語として使われる場面である。「JFL」はそれが第 2 言語ではなく、外国語として使われている場面である(鎌田 2003:358)。
4. ここでの学年はデータ収集時の学年である。全員は大学に入ってから日本語の学習が始まり、実際の日本語学習歴はそれぞれ 1 年間、2 年間、3 年間である。
5. データ収集時、留学生全員の滞中歴は半年未満である。
6. 日本語能力簡易試験（Simple Performance-Oriented Test:SPOT）は簡単に短時間で日本語能力を測定することを目的に筑波大学で開発された。SPOT テストは総合的日本語能力と高い相関関係があり（フォード丹羽、小林、山本 1995）、アメリカ外国語教育協会（ACTFL）の口頭能力測定（OPI）の査定レベル（主に初級～中級）と高い相関関係にあることが報告されている（岩崎 2002）。また、SPOT テストのうち、上級向けの A 版と初・中級向けの B 版が使用申請のあった個人（研究用）や機関（プレースメント用）に用いられている。
7. 2 年生には「健康維持の方法」、3 年生には「有効的な外国語勉強法」、4 年生には「エコな生活を送る方法」という 3 つの話題を与えた。

8. ウストプニー（1994:7）では、「フォローアップ・インタビュー」を「具体的な行動に際してその行動の参加者にどのような意識があったかを明らかにしようとする手続きである」と定義している。

参考文献

岩崎典子(2002) 「日本語能力簡易試験(SPOT)の得点とACTFL 口頭能力測定(OPI)のレベルの関係について」『日本語教育』114, 100-106.

大野陽子(2003)「初級日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジー　－『発話のストラテジー』使用についての考察－」『三重大学留学生センター紀要』 5, 55-65.

大野陽子(2004)「中級日本語学習者の『発話のストラテジー』使用についての考察」『三重大学留学生センター紀要,』6, 83－93.

荻原稚佳子(1996)「日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジー使用の縦断的研究」『講座日本語教育』31, 74-92.

尾崎明人(1998)「異文化接触場面のコミュニケーション研究と日本語教育　－コミュニケーション・ストラテジー研究の概観－」『日本語教育通信』32, 12-13.

呉雲珠（2007）「言語行動と異文化コミュニケーションの考察　―日本語教育の視点から」上海外国語大学大学院日本文化経済学院日本語言語文学コース修士論文

顧明躍・趙剛・董戈（2002）「会話における間接表現の日中対照研究」『会话分析对比研究（国家社科基金项目成果）』赵刚編,西安交通大学出版社,145-176

武井直紀(1995)「コミュニケーション・ストラテジーとコミュニケーション能力」『日本語の研究と教育　窪田富男教授退官記念論文集』, 497-513.

金銀美(2005)「接触場面におけるコミュニケーション調整行動　－日本語母語話者と韓国人日本語学習者の会話より－」『言語情報学研究報告』6, 243-260.

金シミン・赤堀侃司(1997)「日本語学習者を対象にしたコミュニケーション方略のトレーニング効果の分析」『日本語教育』 93, 49-60.

趙剛・董毛毛・李慧（2002）「聞き手の会話ストラテジーの日中対照研究」『会话分析对比研究（国家社科基金项目成果）』　赵剛編,西安交通大学出版社,213-240

冨山佳子(1995)「日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジー　－OPI 資料に基づいた Proficiency レベル別CS 使用について－」大阪外国語大学大学院外国語学研究科修士論文

初鹿野阿れ(1994)「初級日本語学習者を対象としたコミュニケーション・ストラテジーに関する縦断的研究」お茶の水女子大学大学院人文科学研究科修士論文

村上かおり（1997）「日本語母語話者の「意味交渉」にタスクの種類が及ぼす影響　－母語話者と非母語話者とのインターアクションにおいて-」『世界の日本語教育』7,137-155.

宮崎里司（2002）「第二言語習得研究における意味交渉の問題」『早稲田日本語教育研究』創刊号,早稲田大学大学院日本語教育研究科,77-89.

加藤好崇(2006) 「日本国内と中国国内における日本語接触場面の相違点」平成 18 年度日本語教育学会研修会（北海道大学）　平成 17－19 年度科学研究費補助（基盤研究C 17520355）

鎌田修（2003）「接触場面の教材化」『接触場面と日本語教育　ネウストプニーのインパクト』宮崎里司／ヘレン・マリオット編,353-369.

フォード丹羽順子・小林典子・山本啓史(1995)「「日本語能力簡易試験（SPOT）は何を測定しているか　－音声テープ要因の解析」」『日本語教育』86,93-102.

方穎琳（2010）「接触場面における中国人日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジーの使用　－意味伝達問題を解決するための達成ストラテジーを中心に－」『言語文化と日本語教育』39,122-131

Long,M.（1981）Input,interaction,and second-language acquisition. In Winitz,H.(ed) Native Language and Foreign Language Acquisition,259-78.Annals of the New York Academy of Sciences,379.

Pica.T. and C.Doughty(1985b)The role of group work in classroom second language acquisition.Studies in Second Language Acquisition. 7:1-25

Shortreed.I.（1993）Variation in foreigner talk input:The effects of task and proficienty.In Crookes, G.and S.Gass(eds.)Tasks and language learning:integrating Theory and Pratice. Clevedon,Philadelphia:
:Multilinguak Matters ,96-122

陳訪澤・劉玉（2010）「日语拒绝言语行为的生成机制」『日语学习与研究』4,64-69

李慶祥（2008）「非语言交际与副语言——兼论日语副语言的特点与交际作用」『日语学习与研究』6,15-19

馬安東・王維真（2002）「省略的语用条件和语用策略」『浙江大学学报（人文社会科学版）』4,76-80

趙剛（2001）「间接语言行为的语用特征及其功能」『日语学习与研究』2,1-4

張一絹（2006）「非言语交际在跨文化商务沟通中的应用——商务日语教学新尝试 」『日语学习与研究』1,53-56

ほう　えいりん／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻

稿末資料　データ収集の場所とペアの設定

実施大学	学習者の属性	日本語母語話者の属性	収録データ数	合計
湖南大学	2 年生（男性 2 名、女性 3 名）	湖南師範大学に在籍する	6 組（男性同士 2 組、女性同士 3 組）	15 組
	3 年生（同上）		6 組（同上）	

	4年生（同上）	日本人短期留学生（5名）	6組（同上）	
広東外語外貿大学	2年生（男性2名、女性3名）	当該大学に在籍する日本人短期留学生（5名）	5組（男性同士2組、女性同士3組）	15組
	3年生（同上）		5組（同上）	
	4年生（同上）		5組（同上）	

指導教員によるコメント

方穎琳さんは、2010 年 8 月末から 9 月末までの 1 カ月の間、「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プロジェクトに係わる支援により、中国（湖南省、広東省、上海市）においてデータ収集及び文献調査を行いました。その成果を以下のように博士論文に活かしていく予定です。

まずデータについてですが、日本語学習者の日本語レベルを事前テストにより正確に測定した。総数で 30 組のデータ収集を行った。自然会話とタスク型会話という二種類のデータ収集を行った。ビデオカメラを用い非言語行動を含む分析が可能になった。という点において、博士論文執筆に向けて修士論文で収集したデータを質・量の両面で補完するのに十分なデータを収集することができました。

次に文献調査ですが、日本国内では入手することのできない中国の文献を収集し、分析を行うことによって、これまで中国では談話・会話分析の手法による研究は少ないと言われていたのが、実際にはかなりの量のレベルの高い研究が行われていることが明らかになりました。今回の調査を踏まえ、日本語による文献、中国語による文献、英語による文献のレビューを行うことによって、ＣＳ研究の現状と今後の展望をより正確に把握することが可能になりました。

以上のように、今回の方さんの海外調査研究は、1 カ月という短期間の間に博士論文の執筆に向けて貴重なデータの収集および文献調査を行った点で高く評価いたします。

佐々木　泰子（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　教授）

学生海外調査研究	
ローレンツ・フォン・シュタインが明治立憲国家構想に与えた影響について	
松居　宏枝	比較社会文化学専攻
期間	2010 年 9 月 21 日～2010 年 10 月 15 日
場所	オーストリア共和国、ドイツ連邦共和国
施設	ウィーン大学、ウィーン大学図書館、ウィーン大学東アジア学科図書館、 オーストリア国立公文書館、シュタイン別荘跡地、シュタインの墓所 シュレスビッヒ・ホルシュタイン州立図書館、 キール大学ローレンツ・フォン・シュタイン行政学研究所、 エッケルンフェルデ郷土博物館、ボン大学図書館

内容報告

1. 海外調査研究の意義と目的

報告者は、近代国家建設構想の中における国民国家の成立という枠組みから、欧州憲法調査におけるドイツ、オーストリア法学者と日本人との交流に焦点をあて、その受容の系譜を歴史学的に実証する研究を行っている。

明治期の日本における立憲国家構想については、これまでに多くの研究がなされており、中でも、明治 15（1882）年 3 月 14 日から明治 16 年 8 月 4 日におよぶ伊籐博文の欧州憲法調査については、尾佐竹猛『日本憲政史大綱』[1]、清水伸「独墺における伊東博文の憲法調査」[2]、稲田正次『明治憲法成立史』[3]など、憲法史の中で明らかにされている。

近年、坂本一登氏の『伊東博文と明治国家形成』[4]によって、伊東博文の憲法調査は立憲政治家としての足固めを行うための政治工作であり、井上毅主導ですすめられていたドイツ中心の憲法構想に対して、ウィーン大学のローレンツ・フォン・シュタインを後ろ盾に得て帰国した伊籐が「立憲のカリスマ」として憲法制定に深く関与したことが指摘されている。

また、瀧井一博氏は日本に存在する史料だけでなく、ドイツにある一次史料にも目をむけて、ローレンツ・フォン・シュタインと日本人の関係を詳細に分析し、シュタインという一人の人物が明治国家に与えた多大な影響を明らかにしている[5]。

以上のような先行研究の下、報告者は日本における史料を基に、大日本帝国憲法と国民統合についてドイツ・オーストリア法学者との交流を中心に修士論文の執筆をおこなった。しかし、それには史料的限界があり、今後の研究活動のためにも、ドイツ・オーストリアにおける史料調査が必要であった。

また、昨今ドイツにおいても、ドイツ国内における史料を基に、近代日本の法律や憲法制度形成に対するドイツ人の貢献についての研究が充実しているという現状もある。ドイツと日本それぞれの史料の分析による研究から、ドイツやオーストリア、日本における史料を体系的かつ複合的に分析する研究状況の中で、報告者にとって今回の海外史料調査は非常に欠かせないものである。

2. 調査の概要

本節では、今回の調査で訪問した①ウィーン大学・・ウィーン大学図書館・ウィーン大学東アジア学科図書館（オーストリア）、②オーストリア国立公文書館（オーストリア）、③シュタイン別荘跡地（オーストリア）、④シュタインの墓所（オーストリア）、⑤シュレスビッヒ・ホルシュタイン州立図書館(ドイツ)、⑥キール大学ローレンツ・フォン・シュタイン行政学研究所（ドイツ）、⑦エッケルンフェルデ郷土博物館（ドイツ）、⑧ボン大学図書館（ドイツ）のそれぞれについて、収集した史（資）料について紹介する。なお、図書館については利用方法、閲覧環境、複写などの情報を、別荘跡地や墓所、博物館などのシュタイン関連地についてはその所在と概要について述べたい。

また、先行研究者によって既に記述されている図書館や関連地については、先行研究を紹介した上で、報告者が調査を行った際の状況について報告することとする。(尚、掲載した URL の最終確認日は 2010 年 10 月１５日である。)

①ウィーン大学
　Universität Wien
　http://www.univie.ac.at/
ウィーン大学図書館
　Universitätsbibliothek Wien
　http://bibliothek.univie.ac.at/
ウィーン大学東アジア学科図書館
　Fachbereichsbibliothek Ostasienwissenschaften

http://bibliothek.univie.ac.at/fb-ostasienwissenschaften/

いわゆる「シュタイン詣」が行われた時、ローレンツ・フォン・シュタイン[6]はウィーン大学の教授を務めていた。現在、ウィーン大学にはシュタインの足跡をうかがい知ることができるものとして、シュタインのレリーフを見ることができる。

ウィーン大学図書館では史料閲覧の予定はなかったが、見学者として入館することができた。OPAC を利用できるパソコンが設置されている他に、レファレンカウンターが設けられており、担当職員から情報を得ることも可能であった。

また、ウィーン大学の図書館はすべて、ID カードを作成すれば学外者も本を借りることができる。閲覧の利用であれば、ID カードは必要ない。ウィーン大学東アジア学科図書館も同様で、入館に際しては、荷物をロッカーに預け、コピーを取る際には専用のコピーカードを購入して行う。報告者は、ウィーン大学に提出された学位論文、市村（桑野）由喜子『ローレンツ・フォン・シュタインと日本』(Lorenz von Stein und Japan. Zur Entstehung des Staatssystems im19 Jahrhundert）を閲覧・複写した。

②オーストリア国立公文書館

Österreichisches Staatsarchiv

http://www.oesta.gv.at/

Geschichte der sozialen Bewegung in Frankreich von 1789 unsere Tage 1,2,3(報告者訳：『1789 年のフランスにおける社会運動の歴史』)[7]というシュタインの著作が所蔵されている。ここでは、入口でパスポート番号を控えられて入館する。荷物はコインロッカーに預ける。閲覧室の入口には、レファレンスカウンターがあり、職員にどのような用件か、閲覧を希望している史料について尋ねられる。英語の使用も可能であった。史料の請求に関しては、閲覧申請を行って即日閲覧はできないとのことで、滞在期間中には閲覧することは難しいことがわかった。しかし、日本からメールで問い合わせることも可能で、柔軟に対応をしてくれることが分かった。

③シュタイン別荘 跡地[8]

萩原延寿氏は『日本の名著３５　陸奥宗光』[9]の中で、陸奥宗光が明治１８（１８８５）年にシュタインの個人授業を受けていた経緯から、陸奥が通った「スタイン氏居住の地」を明らかにしている。

萩原氏は、昭和４４（１９６９）年１２月下旬に「スタイン氏居住の地」である「ワイドリンガウ村」を訪ね、翌昭和４５（１９７０）年７月に、シュタインの孫であるマンフレッド・フォン・シュタイン夫妻の許可を得て、屋根裏部屋に保管されていた書類箱の中の多数の日本人からの書簡と名刺を閲覧した[10]。

現在この史料は、シュレスビッヒ・ホルシュタイン州立図書館に移管されている。その経緯については、⑤シュレスビッヒ・ホルシュタイン州立図書館の項で詳述したい。

萩原氏の著書を参考に訪問し、「Lorenz―Steinstrasse」を見つけることができた。数十メートル程の短い通りで、１６番地のシュタインの旧別荘跡は空き地になっていた。1873 年 9 月 19 日に取り壊されてから、そのままの状態と思われる。

現在、国立国会図書館憲政資料室には、シュタインに宛てた日本人の書簡の一部が『シュタイン関係文書』[11]として所蔵されている。

④シュタインの墓所

シュタインと息子エルンストの墓所は、Ｓバーン Matzleinsdorfer platz 駅近くの Fieldhof にある。

『JAHRBUCH DER HEIMATGEMEINSCHAFT DES KREISES ECKERNFÖRDE』14 JAHRGANG. ECKERNFÖRDE,1956 に掲載されている写真とは、場所は同じであるが墓碑が異なっている。

⑤シュレスビッヒ・ホルシュタイン州立図書館

Schleswig-Holsteinische Landesbibliothek

http://www.shlb.de/

伊籐博文ら多くの日本人がシュタインに宛てた書簡は、「シュタインの日本関係文書」として同図書館に所蔵されている。この史料は萩原氏によってワイトリンガウの旧別荘で発見された。その後、キールに移管され、多くの日本人研究者が閲覧に訪れている。Johann Nawrocki 氏によって目録も作成されている。

⑥キール大学ローレンツ・フォン・シュタイン行政学研究所

Lorenz-von-Stein-Instituts für Verwaltungswissenschaften

http://www.lvstein.uni-kiel.de/t3/index.php?id=1

シュタインの蔵書が開架されている。

場所はキール大学のメインキャンパスから少し離れたところに位置している。ローレンツ・フォン・シュタイン行政学研究所には教授・准教授その他多くの職員の部屋があり、法学部に在籍してシュタインや行政学を研究している学生が来室していた。別の階ではあるが図書館が併設されており、他の多くの本とともにシュタインの蔵書が開架されている。荷物はロッカーに預ける。また、コピーはセルフサービスで取ることが可能である。

⑦エッケルンフェルデ郷土博物館

Eckernförde　Heimatmuseum

http://www.eckernfoerde.net/museum/

柴田隆行『社会思想史の窓』No100[12]にも紹介がある。キール中央駅から Nord-Ostsee-Bahn というローカル電車で３０分のところに、シュタインが生まれ育った Eckernförde という町がある。シュタインの家はないが、駅から中心の通りを市庁舎広場へ向かうと、広場の一角にエッケルンフェルデ郷土博物

館/Eckernförde　Heimatmuseum があり、そこにシュタインが地元の偉人の一人として紹介されている。展示内容はシュタインの胸像や日本からの爵位授与の賞状、著書、書簡、シュタインの明治憲法への貢献について書かれたキールの新聞などである。いずれもシュレスビッヒ・ホルシュタイン州立図書館に所蔵されているもののレプリカである。

シュタインを研究して日本から来たことを告げると、職員方々は大変喜ばれ、案内していただいた。それぞれの展示に解説もついており、すべてではないが、解説を書いた有料のパンフレットも販売されている（ドイツ語のみ)。デンマークに地理的にも近いシュレスビッヒ・ホルシュタインおよびエッケルンフェルデの多数の民俗的資料とともに、シュタインが故郷で顕彰されていることを知ることができる重要な場所である。

（キール―エッケルンフェルデ間往復 14.40€、エッケルンフェルデ郷土博物館入館料　3€、パンフレット　0.50€）

⑧ボン大学図書館

Universität und Landesbibliothek in Bonn
http://www.ulb.uni-bonn.de/

瀧井氏の研究によれば、シュタインは「Allgemeine Zeitung 紙などで独自のオリエント論をかねてから展開していた。」[13] という。それは「オーストリアの通商政策とリンクしたものであったが、そのような「オリエンタリズム」の延長上に、彼の東アジア論、日本論が位置している。」[14] と述べている。早島氏はこの、Allgemeine Zeitung 紙に寄せた記事は主として『Japan weekly mail』からのものであり、また『Japan weekly mail』は「当時、わが国で『東洋雑誌』とよばれていた『オーストリア・オリエント学雑誌』の日本と東アジアに関するシュタインの論文の資料でもあった」と述べている。報告者はこの『東洋雑誌』または『オーストリア・オリエント学雑誌』というシュタインの日本論に着目した。これは当時、Orientalischen Museums in Wien で発行された、『oesterreichsche Monatschrift für den Orient』のことである。ボン大学に限らず、オーストリアやドイツ各地の大学および国州立図書館に所蔵されているが、閲覧・複写の状況がことなっているため、報告者はボン大学で閲覧した。

まず、ロッカーに荷物を預け、OPAC で史料の請求番号を控え、それをもって請求を行う。史料の請求は即日ではなく、１日から２日かかる。史料を受け取るときはボン大学の ID カードが必要であるが、学外者の場合はパスポートと引き換えになる。

3. 調査のまとめ

今回の調査では、一次史料の収集に限らず、ドイツ・オーストリアにおけるシュタイン研究の状況やシュタイン研究者について把握し、幅広い調査を行うことができた。史料収集に限らず、シュタイン研究の土壌に触れることができたことも、報告者にとっては大変有意義であった。

ドイツ・オーストリアでは、図書館の専門職員との密接なコミュニケーションを基としたレファレンスサービスが行われている。それらは非常に充実しており、たとえこちらの語学力が十分でなくとも、できるだけ意に沿ったサービスを提供しようとしていただけることが史料調査を行う上で大きな支えとなった。こちらもできるだけ研究内容や見たい史料について積極的に申し出ることが重要である。たとえば、日本在住であることから、史料の出納やアポイントメントのとり方、ID なしでの閲覧などにおいて融通を利かせてもらうことができた。

また、情報網が非常に発達している昨今、日本からドイツ・オーストリアの史料所蔵状況について把握することは容易となっている。しかしながら、実際に行ってみると、思いがけない史料に出会えることや、閲覧した史料から新たな情報を知り、芋づる式に広がっていくことなど、訪問しなくては得られなかったであろう情報を得ることができた。何より、人とのつながりは大きいと実感させられた。図書館職員との密接なコミュニケーションと述べたが、実際に顔を合わせて話すことの意義は非常に大きい。今後の研究活動にもつなげていきたいと考える。

3. 今後の計画、展望

今回の調査では、在欧史料の閲覧を始め、多くのシュタイン研究の蓄積を知ることができた。収集した史（資）料はすべてドイツ語であるため、今後翻訳を行い、より多角的視点から研究テーマについての議論を深めることが可能となるであろう。

その研究成果報告の発表時期については未定であるが、長期的な展望としては、査読論文として公表して本海外調査の成果とするとともに、博士論文につなげていきたい。

注

1. 尾佐竹猛著『日本憲政史大綱』上下巻　日本評論社 1938-1939 年(復刻 1978 年、宗高書房)
2. 清水伸『明治憲法制定史』上・下、原書房、1971
3. 稲田正次『明治憲法成立史』上・下、有斐閣、1960、1962
4. 坂本一登『伊藤博文と明治国家形成』吉川弘文館、1991
5. 瀧井一博『ドイツ国家学と明治国制―シュタイン国家学の軌跡―』ミネルヴァ書房、1999
   同編『シュタイン国家学ノート』信山社、2005
6. この著作については、早島瑛「ローレンツ・フォン・シュタインと明治憲法の制定」(関西学院大学『商学論究』27―1・2・3・4 合併号、1980）に詳しく取り上げられている。
7. ワイトリンガウのシュタイン邸が「別荘」であったのか本宅であったのかについては現在調査中であるが、本報告では萩原氏の記述に基づいて「別荘」としたい。早島

氏によれば、シュタインは他にも不動産を所有した可能性がある。（早島瑛「ローレンツ・フォン・シュタインに宛てた福澤諭吉の書簡について」275 頁）

8. 萩原延寿『日本の名著３５　陸奥宗光』中央公論社、1973
9. 前掲書、７～１６頁。
10. 伊藤博文、伊東巳代治、海江田信義、河島醇、黒田清隆、谷干城、藤波言忠、松方正義、陸奥宗光、渡辺廉吉の十名。現在はマイクロフィルムでの閲覧のみ可。憲政資料室が所蔵した経緯など、詳細については不明であるが、萩原氏の寄贈によるものである。
11. 柴田隆行『社会思想の窓』NO.100、『社会思想の窓』刊行会、1992
12. 瀧井一博「『日本におけるシュタイン問題』へのアプローチ」（『人文学報』第 77 号、京都大学人文科学研究所、1996）37 頁。
13. 同上。
14. 早島瑛「ローレンツ・フォン・シュタインに宛てた福澤諭吉の書簡について」（『近代日本とアジア　年報・近代日本研究』山川出版社、1980）、277 頁。

参考文献

稲田正次『明治憲法成立史』上・下、有斐閣、1960、1962
清水伸『明治憲法制定史』上・下、原書房、1971
萩原延寿氏『日本の名著３５　陸奥宗光』中央公論社、1973
早島瑛「ローレンツ・フォン・シュタインに宛てた福澤諭吉の書簡について」（『近代日本とアジア　年報・近代日本研究』山川出版社、1980）
早島瑛「ローレンツ・フォン・シュタインと明治憲法の制定」（関西学院大学『商学論究』27―1・2・3・4 合併号、1980）
エルンスト・グリュンフェルト「ローレンツ・フォン・シュタインと日本」（服部平治・宮本盛太郎訳　京大教養学部『政法論集』4、1984）
坂野潤治『明治憲法体制の確立』東京大学出版会、1986
水田 洋「須多因先生――マルクスの先駆者で伊藤博文の顧問」「須多因先生後記――キールのシュタイン文書」（『知の風景』、筑摩書房、1988 年）
坂本一登『伊藤博文と明治国家形成』吉川弘文館、1991
柴田隆行『社会思想の窓』NO.100、『社会思想の窓』刊行会、1992
瀧井一博「『日本におけるシュタイン問題』へのアプローチ」（『人文学報』第 77 号、京都大学人文科学研究所、1996）
瀧井一博『ドイツ国家学と明治国制―シュタイン国家学の軌跡―』ミネルヴァ書房、1999
堅田剛『独逸学教会と明治法制』木鐸社、1999
瀧井一博編『シュタイン国家学ノート』信山社、2005
鳥海靖他編『日本立憲政治の形成と変質』、吉川弘文館、2005
坂野潤治『近代日本政治史』岩波書店、2006
柴田隆行『ローレンツ・フォン・シュタインの思想形成過程―前期シュタインの法学・社会学・国家学 - 』御茶の水書房、2006
川口暁弘『明治憲法欽定史』北海道大学出版会、2007
堀口修編著『明治立憲君主制とシュタイン講義―天皇、政府、議会をめぐる論議―』慈学社、2007
ローレンツ・フォン・シュタイン「日本帝国史および法史の研究」（現代法理論学会編『Jurisprudentia　国際比較法制研究④』ミネルヴァ書房、1995、瀧井一博氏訳出）

柗居　宏枝／お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

近代国家建設を構想する上で重要な位置を占める伊藤博文の欧州憲法調査におけるドイツ、オーストリア法学者と日本人との交流に焦点をあてた本学生の研究テーマは、その重要性に比して未だ多くの研究の余地を残している。その最大の理由は、もっとも日本に影響を与えたウィーン大学のローレンツ・フォン・シュタインの講義を日本がどのように受容したのか、と言う点に関する歴史学的実証研究が不足しているためである。

その意味で本学生が行なった今回のローレンツ・フォン・シュタイン関係資料の調査は、柴田隆行氏や瀧井一博氏が行なっている程度で未だ本格的な調査は行なわれていないと言ってよい。

また、昨今ドイツにおいても、近代日本の法律や憲法制度形成に対するドイツ人の貢献についての研究が進展していることもあり、ドイツやオーストリア、日本における史料を体系的かつ複合的に分析する研究の必要性を踏まえた調査としては、ドイツ・オーストリアにおける史料の所在状況を確認し、新たな課題を得てきたと言う点で、十分な成果を得ることができたと考える。特にキール大学ローレンツ・フォン・シュタイン行政学研究所（ドイツ）における調査は今後につながる土台作りとして大きな成果であった。

また、本学生が「実際に行ってみると、思いがけない史料に出会えることや、閲覧した史料から新たな情報を知り、芋づる式に広がっていくことなど、訪問しなくては得られなかったであろう情報を得ることができた。」と指摘しているとおり、IT 情報では得られない生の情報を獲得できたこと、さらに「史料収集に限らず、シュタイン研究の土壌に触れることができたことも、報告者にとっては大変有意義であった。」と指摘しているとおり、実際に現地を体験することの重要性を確認できたことは、今後の研究活動に大きな糧となることが期待される。

小風　秀雅（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　教授）

学生海外調査研究	
Henry James, *The Princess Casamassima* 自筆原稿の調査： *The Princess Casamassima* 自筆原稿に見られる社会的要因と心理的要因の混在	
松浦　恵美	比較社会文化学専攻
期間	2009 年 9 月 6 日～2009 年 9 月 18 日
場所	アメリカ合衆国マサチューセッツ州ボストン
施設	ハーヴァード大学ホートン図書館

内容報告

1. 調査概要

私は、アメリカ・ボストンのハーヴァード大学ホートン図書館にて、2010 年 9 月 6 日から 9 月 18 日にかけて、Henry James 中期の長編小説 *The Princess Casamassima* の直筆原稿の調査を行った。

同図書館は、ニューイングランド地方で活躍した作家を中心に、その原稿や初版本および稀覯本を集めた図書館であり、アメリカ文学の研究を行う上で非常に重要な資料を多数収蔵している。また、ジェイムズ関連の資料としては、自筆原稿、手紙、ジェイムズ家の家族の写真、ジェイムズ存命中の出版物約１００点（内初版本が多くを占める）、今日までの出版物約９００点を収めている。ジェイムズの残した資料に直接触れ、さらにその膨大な出版物の概観を得ることのできる貴重な施設である。

2. 調査の対象と調査方法

今回の調査において主要な対象となったのが、1885 年から 86 年にかけて The Atlantic Monthly 誌に連載され、1886 年に本として出版された *The Princess Casamassima* の自筆原稿である。この時期、ジェイムズはそれまでの国際的主題を扱った小説群から離れ、社会的問題を積極的に取り上げている。同時期に執筆され同じく 1886 年に出版された *The Bostonians* がアメリカにおける女性運動を扱っているのに対し、*The Princess Casamassima* はロンドンの地下テロ組織とその暗殺計画、およびその中心となったロンドンの労働者の生活を主題としており、ジェイムズのテクストにおいては異色の作品であるとされている。これらのジェイムズの中期の作品は、前期の国際小説、円熟期とされる後期の心理的小説に比べて、文学批評においては長らく軽視される時期が続いた。しかし最近では、9／11 後の世界で最も大きな問題の一つであるテロリズムの問題および暴力の表象への関心の高まりと、ジェイムズのテクストにおける政治的・社会的側面への考察が求められていることから、このテクストは改めて批評の重要な対象となってきている。

今回の直筆原稿の調査にあたり、特に考察の対象としたのは以下の点である。

まず、テクストにおける社会的主題の扱われ方についてである。ジェイムズは登場人物の心理的な側面の描写とそれを描くための視点の操作において優れており、批評においても心理的側面や小説技巧が長年重要な分析の対象となってきた。一方で、実際の生活を描写することや社会的問題を扱うことについては、描写が不十分である、または内容が空虚であると否定的な評価がなされてきた。こうしたことも、中期の作品にあまり目が向けられてこなかった理由の一つである。しかし、*The Princess Casamassima* はロンドンの労働者や都市生活者、貧困層の生活を比較的丹念に描いている。これらの描写を、テクストを生産する段階においてジェイムズがどのように行ったのかは興味深い問題である。

それと関連して、登場人物たちの造形に注目した。ジェイムズの作品に主に登場するのは、アメリカの中産階級またはヨーロッパの中・上流階級の人物たちである。しかしこのテクストで中心となるのはロンドンの労働者階級であり、またその種類も、上の階級と交流を持たない男性中心の工場労働者から、ファッションを介し上流階級に積極的に交わろうとする女性の服飾関係の労働者まで、幅広く登場している。これらの、ジェイムズにとっては馴染みの浅い階級に属する人物の描写がどの程度細かく、確信を持って行われているかを、原稿にあたって調べるのは興味深い問題であると考えた。さらに重要となるのが、これらの人物の政治的思想である。ジェイムズ中期のテクストがそれ以外の時期と大きく異なるのが、その政治的コミットメントの姿勢である。ほかの作品において、ジェイムズの政治的な姿勢をうかがうことは、多くの場合間接的にのみ可能である。たとえば、前期の終りに発表された代表作 *The Portrait of a Lady* において、イギリス貴族で上院に

議席を持つウォーバトン卿が、貴族による政治や土地の占有に否定的な見方を持っていることが示されている。しかし彼自身が特権を持つ階級にあるため、この態度は混乱を含むものとして表象されている。一方で *The Princess Casamassima* では、下層階級の政治的不満が中心となっているため、その表象はより直接的で暴力的をもはらんだものとなっている。しかしその表象は一枚岩的なものではなく、テロリスト運動にかかわる登場人物の一人ひとりが、たがいに微妙な差異を含んだ思想を抱いていることがうかがわれる。彼らの政治的思想がどのように生み出されているか、さらに各人の思想の違いは何かを細かく分析することが重要であり、そのためには原稿に残された推敲の跡を見ることが有効なアプローチの一つであると考える。

さらに、社会的主題から心理的主題への移行についても注目した。テロリズムという社会的・政治的問題を扱いつつ、プロットの展開の重要なドライブとなっているのはむしろ登場人物たちの心理の変化である。特に暗殺計画の実行役となる主人公ハイアシンス・ロビンソンの階級社会、階級に付随する文化の持つ意味、さらに階級の移動に関する考えの推移が、この計画の結末に大きな影響をもたらしている。彼が、上流階級にありながら社会変革に関わりたいと望むカサマシマ公爵夫人と出会い、さらに自らのルーツとなるフランスの文化に触れたことで、二元論的な階級の捉え方から遊離していく過程は、このテクストをテロリズムという主題そのものから逸脱させていく。さらにハイアシンスの行動に大きな影響をもたらす職工のポール・ミュニメントの革命運動に対する考えが明かされるテクスト後半の過程は、このテクストの階級闘争に対する姿勢を左右するものである。よってこのテクストには、社会小説から心理小説、およびテロリズムから脱テロリズムへの大きな移行が存在しているのである。これらの移行が、1 年間の雑誌掲載という時間的な推移の中でどのように起こったのか、テクスト成立の過程と関連させて分析を行いたいと考えた。

以上の点についての考察を目標として、原稿の調査を行った。調査の方法は以下のとおりである。まず、事前に出版されたテクストを読み、上記の点について特に注目するべき個所にチェックをつけた。その上で直筆原稿を読み、書き直しや推敲の跡が見られる個所に印をつけていった。両者を突き合わせることで、テクストが生み出される段階において重要であった個所や問題をはらんでいた個所が発見できるのではないかと考えた。また、当初は出版元からの注記についても考察を行う予定であったが、これについては原稿への注記が事前の予想よりはるかに少なく、結果として作者による推敲に集中する結果となった。以上の方法により、ジェイムズが 1880 年代の社会状況とテロリズムという問題をどのようにテクストとして成立させていったのか、また社会問題に対する姿勢がテクスト生産過程において変化したのか否か、変化したとすればどのような推移をたどったのかを考察することを目標とした。

3. 調査結果

調査を実際に行い、事前に準備した個所に推敲の跡が見られたところもあれば、逡巡の跡もなく書き進められたようである個所もあった。全体としてプロットの進行自体に大きな変更が施されたような跡はなく、微妙な表現の変更や修正、書き足しが目立った。また、修正前の文については、棒線で消されているため、読みとりは困難であった。これらの個所において変更が行われた理由については、今後さらに分析を加える予定である。特に考察に値すると思われる個所について、以下例をあげる。

まず、登場人物が最初に現れる箇所での人物描写において、作者が修正を多く加えていることが認められた。例えば、第 2 章における、ハイアシンスの後見人としてその成長を見守るヴェッチ氏についての描写である。まずヴェッチという名前が、かなり後になってから変更されたことが分かった。当初は別の名前であったようであり、物語がかなり進んだ後に棒線にて修正されていた。ジェイムズは登場人物の名前についてこだわりがあったようで、創作ノートには多くの名前の案が残されていることが知られている。ヴェッチ氏の名前については、プロットが進行した後で当初の名前がふさわしくないと判断された可能性があり、これについて考察の必要があると思われる。また、ヴェッチ氏の人物描写についても興味深い変更が見られた。ヴェッチ氏は、教養はあるが下町の粗末なアパートメントに住む貧乏な音楽家であり、またイギリス王室を公然と批判し、共和制に大きな共感を寄せている。ハイアシンスが地下組織と接触するきっかけを作った人物でもあるが、彼が組織との交流を深めることには大きな心配を抱いている。ヴェッチ氏には、思想的に先進的で反社会的である面と、卑小で小市民的な面の両方が存在する。原稿の修正箇所には、この相反する両面を、どちらかのみの強調に傾かず十分に表現するように訂正を加えた様子がうかがえる。例えば、出版されたテクストには以下のように述べられている。

> Mr. Vetch displeased her [Amanda] only by one of the <u>facets of</u> his character – his <u>blasphemous</u> republican, radical view, and the contemptuous manner in which he expressed himself about the nobility. (67)

下線部が、原稿において修正があった部分である。ジェイムズは、blasphemous（不敬な）という語を加えることによって、ヴェッチ氏の反社会的な面を強調している。一方で、それに続く部分では次のような修正を行っている。

> He looked <u>placid and genial, and as if he would fidget at the most about the 'get up'</u>

> of his linen; you would have thought him finical but superficial, and never have suspected that he was a revolutionist, or even a critic of life. (67)

ここでは、ヴェッチ氏が革命的な思想を持ちつつ自分の背広の毛羽立ちを気にするような一面も持つことを示して、彼の一市民としての性格、および外見を気にする非労働者的な面を強調している。このような二面性は、革命的思想の持ち主を反社会的というイメージのみで一面化せず、むしろ彼の中にある繊細な側面、文化や上流階級への憧れ、そして貧しい音楽家という現状への不満という複数の感情が混在する状態を表象しようとしていると考えられる。よって、この個所の修正は反社会運動に内在する複雑なダイナミズムを表象しようとした一例であると考察できる。

また、第 21 章において社会主義者たちが「太陽と月」亭で集会を行う場面では、地下組織の持つ暗く激しいエネルギーを表現するために修正が加えられた跡が見られる。この場面はジェイムズのテクストの中でも異色の雰囲気を持っており、また、ハイアシンスがテロ計画の実行役になることを宣言するプロット上の重大な局面でもある。この個所における修正を見ると、作者が地下組織における暴力的なパワーとそれに参入していく主人公の行動をどう表わすかに大きな注意を払っていたことがうかがえる。ここで際立つのが、ハイアシンスの心理状態が彼の内面のみならずその場の雰囲気にまで放出され、内面と外界の区別が無化されているような描写がされていることである。

> He [Hyacinth] took no part in the violence of the talk; he had called Schinkel to come round and sit beside him, and the two appeared to confer together in comfortable absorption, while the brown atmosphere grew denser, the passing to and fro of fire-brands more lively, and the flush of faces more portentous. (292)

このように、ハイアシンス、仲間のシンケル、「太陽と月」亭の中の空気、その中の男たちの顔が混然一体となって暗い未来を予感させる雰囲気が表現されている。このような内面と外界の一体化は、社会運動と個人の心理の密接なつながりをジェイムズが強調しようとしたことの表れではないかと考えられる。また、続くハイアシンスの宣言の場面では、以下のような修正が加えられている。

> 'I don't think it's right of him to say that. There are others, besides him. At all events, I want to speak for myself: it may do some good; I can't help it. I'm not afraid; I'm very sure I'm not. I'm ready to do anything that will do any good; anything, anything – I don't care a rap. In such a cause I should like the idea of danger. I don't consider my bones precious in the least, compared without some other things. If one is sure one isn't afraid, and one is accused, why shouldn't one say so?'
>
> It appeared to Hyacinth that he was talking a long time, and when it was over he scarcely knew what happened. He felt himself, in a moment, down almost under the feet of the other men; stamped upon with intentions, of applause, of familiarity; laughed over and jeered over, hustled and poked in the ribs. (294)

ここではハイアシンスの宣言が忘我の状態で行われたこと、それに対し喝さいを送る男たちの荒々しいまでの歓喜、そしてそれにより彼らの内で絆が締結されたことを強調するような修正がなされている。ハイアシンスの宣言は、彼の政治的な姿勢よりむしろ組織における彼自身の居場所を築くこと、そして彼が憧れを抱くポール・ミュニメントに認められることを望む感情からなされている。この場面がハイアシンスおよびそれを受け入れる仲間たちの感情によって支配されていることを強調することにより、ジェイムズは政治的行動において心理的要因が決定的な役割を果たすことを描いたと考えられる。このように、これらの場面にみられる修正は、社会運動を政治的理由や外的要因からではなく心理や運動に参加する個人の内面的な理由との関係においてとらえようとする傾向を反映していると考えることができる。さらに、この心理的なドライブを強調させることが、このプロットの進行をさらに加速させるために不可欠であったことが読み取れる。

ハイアシンスの心理的側面が彼の行動を大きく左右する一方で、彼をテロ活動にまい進させる理由となったポール・ミュニメントが果たした役割も、このテクストが進行する上で重要な要因のである。彼が登場する場面に修正がなされているかどうかも、事前の準備の段階で注目していた点の一つであった。しかし、実際に原稿にあたってみると、ミュニメントの登場場面や彼の考えが明かされていく場面において、修正はそれほどみられないことが分かった。例えば、第 30 章のミュニメントの独特な性質が表されている部分を見てみる。

> Muniment's absence of passion, his fresh-coloured coolness, his easy, exact knowledge, the way he kept himself clean (except for the chemical stains on his hands), in circumstances of foul contact, constituted a group of qualities that had always appeared to Hyacinth singularly enviable. (391)

テクストの後半に改めて述べられるミュニメントのこうした冷静さ、地下活動組織の中核にあって、前

述の場面で集った男たちとは対照をなすような情熱に欠けた性格は、このテクストで扱われているテロ活動の暴力的な側面と大きな対照をなしている。また、この後彼はカサマシマ公爵夫人と奇妙な親密さを打ち立てていくのだが、上流階級の人物が社会運動に参入することに否定的な姿勢をはっきりと示していた彼が公爵夫人と面会を持つことは、プロット上での大きな転換をなしている。しかしその場面においても目立った修正の跡は見られなかった。つまり、ミュニメントの人物造型と彼の行動については、作者には確固とした構想があり、テクストはそれに従って書き進められていったのではないかと推測することができる。よって、ミュニメントのキャラクターを分析するためには、テクストより前の段階の創作ノートの記述を確認する必要があるということになる。また同時に、このテクストのみに留まらず、ほかの作品における人物との比較や、批評家たちによる様々な分析などを参照し、間テクスト的な考察を行うことが必要となるであろう。

以上のように、*The Princess Casamassima* の直筆原稿の調査から、ジェイムズが社会運動を積極的に扱いつつ、同時にテロリストとなる主人公の心理的側面、および彼と仲間の男性たちとの心理面における接触が大きな中心となっており、両方の要因がプロットの進行とその中での主人公ハイアシンスの変転とに複雑に絡み合っていることが認められた。これらの発見は、テクスト成立過程においてジェイムズがどちらかの要因に傾くのではなく、むしろこの二つの面が分かちがたく関係し合っていることを表そうとしたことを裏付けていると考えられる。また、これらの修正箇所は、連載の過程においてテクストが社会小説から心理小説に移行したというよりは、社会と心理の両面を十分に表わすという姿勢が一貫して存在していたということを感じさせる。これは、ジェイムズの社会の捉え方、現実の運動に対する内面的な運動の影響の重視などについて分析を行うための材料となるだろう。さらに、原稿を調査したことで、テクスト生産以前の段階で生起したと思われるジェイムズ独特の社会問題に対する姿勢があることも改めて確認された。このような問題の存在を意識しつつさらに多くの資料にあたって分析を進めることで、*The Princess Casamassima* というテクストが持つ複雑な問題と要素の絡み合いを、より精緻にひも解くことができると期待する。

4. 今後の課題

今回の調査の結果は、今後の研究発表および博士論文執筆のための土台とする予定である。まず、*The Princess Casamassima* について、アメリカ文学会東京支部での学会発表を目標としている。その際、今回の調査の結果を生かし、テクストにおける社会的側面と心理的側面の共存、および両方の要因の積極的な関わり合いによるプロットの発展と、このような複数の要素の相関的な関係を重視するジェイムズの姿勢について分析を行いたい。また、博士論文では、ジェイムズのテクスト全体にみられるさまざまなアイデンティティの混在、その分断不可能な移行について、中期から後期のテクストを中心に論じる予定である。特に、中期の実験的ともいわれる作品群は、ジェイムズのテクストにおける多面的な要素と、社会的問題が個人の中に内面化されさらに彼ら自身の行動として外界に反映されていく様子を考察する上で重要なテクストである。これらのテクストの分析から始めて、再び国際的主題を扱った後期のテクストの中で個人と政治性の問題がどのように表象されているか、考察をしていく予定である。

文学の研究においては、さまざまな文献が書物としてすでに発行されていることから、どうしても二次的な資料に頼ることが多くなる。そのため、第一次資料の分析を再度行うということは、その困難さもあり、なかなか試みられていない。しかし今回、本プロジェクトの援助を受け直筆原稿の調査を行ったことで、出版されたテクストだけを見ていては分からない発見や今後の研究の指針を得ることができた。今回研究を行ったホートン図書館は、ハーヴァード大学在学生に限らず世界中の研究者に広く門戸を開いた施設であり、その充実した蔵書内容や運営姿勢、および図書館職員の知識と研究者に対する協力的で温かい姿勢には深い感銘を受けた。さらに、ホートン図書館で様々な資料を研究する各国の研究者の姿を見て、文学研究の国境を超えた広がりと各分野の深さ、さらにその研究に従事する世界中の研究者の真摯な姿勢を知った。今後も、研究の過程及び発表の両面において、国内にとどまらずあらゆる場所で活動を行うことを常に念頭に置いていく所存である。

参考文献

James, Henry. *The Princess Casamassima*. 1886. London: Penguin, 1987.

まつうら　めぐみ／お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

松浦恵美さんの今回の海外調査は、彼女が執筆を予定している博士論文 Henry James 論のために、彼の中期のテクストの成立過程を検証するものである。Henry James は、国際的主題を扱う前期から、心理主義的色彩が濃厚になる後期のあいだのわずかな時期に、社会問題を直截に取り上げたが、当時も、またつい最近まで、この時期のテクストは失敗作とされ、さほど注意を払われてこなかった。しかしそこで扱われた題材はフェミニズム運動やテロリズムなど、時代的に大変新しく、また現在の視点から読み直すべき素材が多い。今回松浦さんは、Henry James のテクストのなかでも異色とされているこれらのテクストのうち、とくにテロリズムを扱った *The Princess Casamassima* を取り上げ、それがどのような経緯で誕生したかを、その自筆原稿や周辺資料を精査して資料的に跡づけようとした。そのために、それらの資料が保存されている米国ボストンのハーヴァード大学ホートン図書館で調査した。その結果、執筆時においてはすでにこのテーマの構想がかなり固まっていることがわかってきたので、今後は執筆前の伝記的・社会的資料を調査し、博士論文では James 論の多角的分析へと繋げていってほしい。

竹村　和子（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　教授）

Learner perceptions of recasts, a type of corrective feedback, provided in response to the errors of the Japanese particles and verbs in oral story narration tasks.

Researcher's name: Sachie SUGO
Affiliation: Department of Japanese Studies in a Global Perspective,
Comparative Studies of Societies and Cultures (Doctoral program),
Ochanomizu University, Japan

The current research has been conducted to investigate the perception of recasts on the errors of particles and verb forms including auxiliary verbs. In the classroom of 8 intermediate learners, oral story narration tasks were conducted during which learners received recasts on their errors of the target structures. In dyadic conditions with a researcher in which 7 learners participated, "stimulated recall" interview was conducted in addition to the oral narration task. By analyzing the learners' responses of recasts and learners' stimulated recall reports, it can be hypothesized that recasts on the errors of particles are often unnoticed, and even if they are, they don't lead to the reaffirmation of the rules using particles.

Aspects of Literary Culture in England from 19C to 20C

AOKI Keiko

Current compulsory literature in English schools has been significantly revized from the previous canon which offered “high" culture (classics) to one offering low culture (popular novels). However, Dr. Hardcastle, professor of education, mentions that most children in England in 20C receive basic elementary education, and moreover literature culture exists at homes as well. He argues that working class children also read the so-called high culture or classics. Unexpectedly, classics or canon are also enjoyed by the working class students. Consequently, he postulates, categorizing with high and low culture has not been established. Therefore ‘Pop culture’ has not originated from working class; rather, in his view, it is a new culture. Profiting from academic discussions, I will suggest that literary culture and education in England has become more nuanced. In my dissertation, I will focus on inclusive historical background of Literary Culture in England.

The Ideal Scholarly Environment for Developers of Historical Illustration Databases

BABA, Yukie

This paper discusses the ideal scholarly environment for developers and researchers of historical illustration databases for educational/research purposes. Such an environment is one in which developers and researchers can discuss and be informed of ways to further their projects, or prepare for international conferences. The most renowned English centre of Digital Humanities, known as the Centre for Computing in the Humanities (CCH) at King's College London, and one of the largest international conferences on Digital Humanities, namely, the Digital Humanities 2010 (DH2010) held in London, July 2010, will be reported on as successful precedents.

英語ライティングにおける盗用問題についての学会発表及び調査研究

姚　馨

今回「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プロジェクトの補助金を受け、三つの海外アカデミック・ディスカッション研修を行いました。

まず「第 29 回 TESOL フランス国際大会」への参加です。本学会で私は『Investigating Chinese Students' Opinions on Plagiarism』と題したポスター発表を行いました。この機会を通して自分の研究成果を発表し、他の研究者の方々のフィードバックや意見を受けることができたので、その結果を現在執筆中の博士論文に反映させたいと思っています。

また、パリ・ディドロ大学で授業見学を行いました。クリエイティブ・ライティングとインテンシブ・イングリッシュという二つのクラスの見学を通して、英語ライティングの教授法や盗用の防止について勉強ができました。これらの見学は今後の研究に非常に役に立つと思われます。

最後に、英語ライティングにおける盗用行為に対する中国人大学生の姿勢についての調査を実施しました。海外留学中の中国人学生を対象とし、英語ライティングの教授法、盗用や引用規則についてアンケートを行いました。このアンケートの結果に基づき博士論文を進めたいと考えています。

今回海外アカデミック・ディスカッションの機会を利用して国際学術会議に出席したことにより、自身の専門知識や研究能力が向上したと感じています。また大学での授業見学とアンケート調査を通じてさらに必要な研究を進めることができました。

Chinese-Japanese comparison research in invitation expressions

Huang Mingshu

This author conducted the Chinese-Japanese comparison research on the theme of "Invitation expressions" and is continuing the research in the doctoral course.

The author has the support of the graduate school education support program "Promoting skills for the transmission of global information on Japanese culture research" and the " foreign academic discussions" in 2010 fiscal year, and participated in " The tenth China Japanese Education Association/ The sixth china-japan-korea culture and education research international forums" held in China from 24th to 27th September, 2010. Study results were announced. From the presentation, the following conclusions can be drawn.

Firstly it was clear that JNS used the overall semantic formula with more frequency than CNS.

Next, in the different types of the semantic formula, a difference could be seen in ‘Joint act demand’, ‘Inducement utterance’ and ‘Noteworthy display’.

Theater criticism—Focusing on the foreign play

LEE Honglee

As a participant of the Academic Discussion Program, I travelled to France to visit Paris and Lyon. The following is a summary of my time spent there. First, I attended a seminar held in the Odeon Theater. Second, I went to see "Shun-kin" and "The Magic Flute". The former was Simon McBerney's adaptation of Jun'ichiro Tanizaki's Shun-kin, a 1993 Japanese story on aesthetics and shadows. The latter was Peter Brook's modern theater adaptation of an opera composed by Mozart. Finally, I sat in on a lecture given by Professor Li Jin-mieung, who is an eminent French scholar in the field of Korean Studies. As a Korean, I felt it was necessary to expand my horizons and to understand the importance of a global outlook as I continue to study Japanese Theatre.

Film Dance Festival Overview

Ayaha Matsuoka

The main purpose of the International Academic Discussion was to examine all aspects of dance on film and video, what I call "video dance".

This was to be a comprehensive study, in a manner that has not been carried out in Japan before.

As a result of this study, I have reviewed my ideas, and modified my approach.

I would now like to focus on those who have difficulty dance; for example, people with disabilities, or the elderly.

Video dance makes it possible to show them as vividly as professional dancers, and I regard this as a new direction for this art form.

Clinically Based Research Methodologies for Music Therapy
（United States, October 14 – 28, 2010）

Rika (Ikuno) Yamamoto

Ochanomizu University
Graduate School of Humanities and Science
Comparative Studies of Societies and Cultures
Department of Arts and Representational Studies

The purpose of this project was to facilitate the international discussions on the clinically based music therapy research methodologies for the author's doctoral dissertation, "The Study on the Therapeutic Meaning of Relationship Mediated by Music."

On-Site Clinical Observations and Discussions

- TOTS (These Our Treasures), Inc.
- New York University Nordoff & Robbins Music Therapy Center
- Rebecca School
- Beth Abraham Hospital Institute for Music and Neurologic Function

Presentations and Discussions Based on the Author's Papers

- Dr. Kenneth Aigen (Temple University): Qualitative Research
- Dr. Carolyn Kenny (Antioch University): Hermeneutic Research

The active dialogues with these researchers will continue, to develop the universal as well as culturally unique concepts on the research methodologies. Also, the author has received the recommendation from The Japanese Society of Psychopathology of Expression & Arts Therapy to submit the paper.

Teaching of Japanese Advanced Conversation to JFL Students

KOMATSU Nana

The number of JFL (Japanese as a Foreign Language) learners has increased annually and its educational content is considered to be significantly different than the study of Japanese in Japan. For this paper, I conducted observations of two Japanese language classes, “presentation/debate” and “intercultural communication,” offered at a university in Korea. Situations were observed in which students learn natural Japanese expressions through interaction with a native Japanese instructor and are led to recognize the cultural differences between Japan and Korea. In addition, a questionnaire was given to students in order to discover the differences in students’ expectations of teaching methods and course content between native Japanese instructors and Korean instructors.

Towards the Bilingual and Multilingual Education in the 21st Century

GAOYOUHAN

The purpose of this report is to show the result of author's visit to the City University of New York during September 6th to 24th in 2010 within the Overseas Academic Discussion Program. A brief introduction of author's research of doctoral dissertation is given first, followed by an explanation of the necessity of this academic discussion for author's research. After that, author explains the purpose of her visit in this academic discussion, and presents how the purposes are achieved. At last, author concludes that this visit gives her a great deal of new discoveries, and author will reflect these findings into her future research.

Cutlers in Late Medieval London: Their Relationships with Others

Machi Sasai

This research aimed to collect the essential sources for my PhD thesis, which focuses on craftspeople's relationships with others in late medieval London. One of the main subjects is cutlers, who were engaged in knife-making.

Two kinds of sources were collected; sixty-eight wills and other will-related sources of sixty-two London cutlers in the 14th, 15th and 16th centuries, and twenty-seven 15th century petitions involving cutlers which were submitted to the Court of Chancery. These sources suggest that cutlers created and made use of various relationships with others both inside and outside their craft, and that the relationships sometimes became so troublesome that they needed to petition the Court.

A Study of the Background of Masahide Komaki's Activities in Harbin

Satomi KASUYA

This paper is intended to give a description of the environment of Masahide Komaki's Activities before becoming a professional dancer, based on data from Harbin.

Harbin is the biggest city of northeastern China, and was re-developed at the beginning of the twentieth century by Czarist Russia. There were a lot of Russian and Jewish-Russian people who were refugees from the Russian Revolution who made Russian and Jewish sections within the city.

Komaki had been learning ballet at the ballet school in Harbin which was founded by Andreyev in 1930's and followed a system of the period of Czarist Russia.

The study on Korean women's education in the transitional period of modernity

Kim Hayeon

The aim of this study is to trail back the history of girls' high school in the modern Korean girls' secondary education perspective, the condition and the educational contents in the women's education context at that time.
In this research, through the analysis on the history of each school, alumni magazines, reviews by the graduates and other records on girls' high schools, the condition and the education received by the female students had been examined.

A Survey on Characteristics of Indienne & Its Acceptance in French Fashion in the 18th Century

KWON YOUMI

Indienne refers to the cotton fabrics printed with various colors and patterns introduced from India to France. In addition, it sometimes refers to the dress made of Indienne or the imitations produced in France. It has also different names depending on the production site and the trade targets. Therefore, this survey is aimed to examine many different names of cotton fabrics and Indienne. For this purpose, this study reviewed the Richelieu collection which lists all fabrics produced within and outside France. In addition, this study collected the paintings in the art gallery located in Orange which used to be the production site of Indienne.

The Records of the Gentry in Eastern Part of Lowland, Scotland, in the Early Eighteenth Century

KOCHIYAMA, Asako

This is an account of the research conducted in Scotland in June and July 2010, concerning an eighteenth-century gentry from eastern part of Lowland, Scotland.

The primary sources to research on this topic are the correspondences between James Clerk and Sir John Clerk of Penicuik (GD18/5288, 1715-1730). They are stored in the National Archives of Scotland in Edinburgh.

It seems that these items indicate several points of view about the reality of a Scottish landowning family in the early eighteenth century. For example, how they were concerned with ventures, what networks they had or used, and what support the patriarch could offer to the members of his family.

The Ceramics Exportation in Modern Japan and Its American Market

Kana Imakiire

The purpose of this research is to explore how the demands of American upper-class towards Japanese exported ceramics were in the 19th and 20th centuries by researching the ceramic collections and other historical documents at 7 museums and 2 libraries in the North-Eastern cities of America (Boston, Philadelphia, New York, etc.). As a result, the photos of approximately 170 ceramic objects including Satsuma and Imari ware; the invoices and purchase records of collections of George Walter Vincent Smith and William Walters; and the articles on Japanese artifacts in the 19th century art journals were collected through this trip.

A Survey of Historical Documents related to the Early-Fourteenth Century English Court and King Edward II

Sayaka Tsuneki

This research concerns the reign of King Edward II (1284-1327) and life in his court. The changing attitudes towards the monarch recorded towards the end of his reign, particularly those of Queen Isabella, are considered from a gender studies perspective. The means by which Queen and her supporters fostered a mood amenable to the deposition the King and the role played by their criticism of the nature of the relationship between the King and his favourites is explored. I visited the Bodleian Library in Oxford and The National Archives in London to collect historical sources such as manuscripts and royal charters and undertook site visits to Gloucester Cathedral and Tewkesbury Abbey.

T Roland Petit's Le jeune homme et la mort (1946)
'Event' in France's dance world after the World War II

Natsumi FUKASAWA

I 've researched various films by Roland Petit at the Cinémathèque de la Danse in Paris. I've also visited the Bibliothèque-Musée de l'Opéra to research various reviews and critiques on Le jeune homme et la mort, as well as information on Les Ballets des Champs-Élysées in newspapers, magazines and books.

I conducted an interview with Jean Babilée, who had danced Le jeune homme et la mort many times since the première.

It became clear why Le jeune homme et la mort was the most outstanding 'event'. My findings have allowed me to prove why this work was called 'new ballet' in France's dance world after the World War II.

The Communication strategies use in the Japanese-based contact situation by Chinese learners

－Focuses on the Achievement Strategies for Problem-solving－

FANG Yinglin

This research, which is a part of the ‘Student Research Abroad” and was promoted by the 2010 “Formation of an International Centre to Produce Women Leaders” project, offers an overview of the methodological framework applied in this work and a summary of the results as well as contents of conversation data on the use of communication strategies by Chinese Japanese learners. In the present era of advancing globalization, developing the Strategic Competence, a component of the Communicative Competence, is becoming an important task in today’s Japanese Language Education. The objective of this research is to elucidate features and problems of the use of communicative strategies in contact situations and hopefully contribute in developing a Japanese Language Education that is reflecting real contact situations.

On the influence of the Lorenz von stein in the Transitional Period to Constitutional Monarchy in Meiji Japan

Hiroe Matsui

I went to Austria and Germany for the purpose of studying about Lorenz von stein, in 21.9.2010-15.10.2010.

My intention to gathering the historical materials about Lorenz von stein who is an eminent scholar in Vienna university. He had a lot of relationships with Japanese. For example, Hirobumi Ito, Munemitsu Mutsu, and so on.

These letters and Stein's thesis are possessed by "Schleswig-Holsteinische Landesbibliothek" and "Lorenz-von-Stein-Instituts für Verwaltungswissenschaften", "Universität und Landesbibliothek in Bonn".

I collected precious historical materials. And I could know studying condition about Lorenz von stein in Austria and Germany.

These materials will be a great contribution to my future research.

The Social and Psychological Elements in the Manuscript of The Princess Casamassima

Megumi Matsuura

I carried out a research of the manuscript of The Princess Casamassima by Henry James which was published in 1886. The research was held at Houghton Library in Harvard University, Boston, USA.

The text shows a complex coexistence of social and psychological problems which is peculiar in James's middle phase. On the research I paid attention to the revised parts of the manuscript to see how the author treated this peculiar theme about terrorism and violence, which is one of the most important problems of today's world.

書　　名	文部科学省特別経費「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」（平成 22 年度―平成 27 年度） 平成 22 年度「学生海外派遣」プログラム報告集
発　行　日	平成 23 年 3 月 31 日
編集・発行	国立大学法人　お茶の水女子大学 リーダーシップ養成教育研究センター 〒112-8610　東京都文京区大塚 2-1-1 ＴＥＬ　03-5978-5520 E-mail　info-leader@cc.ocha.ac.jp ＵＲＬ　http://www.cf.ocha.ac.jp/leader/
編 集 事 務	国立大学法人　お茶の水女子大学 リーダーシップ養成教育研究センター アカデミック・アシスタント　小濵　聖子